博士論文

# 大規模コーパスを用いた
# 接続助詞「から」「ので」の研究
## ―その異同と特性について―

東北大学大学院文学研究科言語科学専攻

李　　惠正

# 目　　次

**第 1 章　研究対象と目的 ..... 1**

1.1　研究対象の「から」「ので」 ..... 1

1.2　文法研究における大規模コーパスの利用 ..... 3

1.2.1　「コーパス」の意味とその発展 ..... 3

1.2.2　大規模コーパス利用の利点 ..... 4

1.3　本研究の着眼点と目的 ..... 6

1.3.1　「モダリティ体系」と前件の「陳述性」 ..... 6

1.3.2　本研究の目的 ..... 8

1.4　本研究の構成 ..... 9

**第 2 章　「から」「ので」の概観と主張 ..... 11**

2.1　「から」/「ので」の概観 ..... 11

2.1.1　出自 ..... 11

2.1.2　接続助詞としての主要機能 ..... 12

2.2　先行研究 ..... 14

2.3　本研究の主張 ..... 17

**第 3 章　研究資料と方法 ..... 19**

3.1　研究資料 ..... 19

3.1.1　「現代日本語書き言葉均衡コーパス」 ..... 19

3.1.2　BCCWJ のサブコーパス ..... 24

3.1.3　本研究の対象媒体 ..... 26

3.2　研究方法 ..... 29

3.2.1　『中納言』 ..... 29

3.2.2　調査対象の抽出 ..... 32

**第 4 章　「から」「ので」と接続文体 ..... 35**

4.1　はじめに ..... 35

4.2.　背景と目的 ..... 35

4.2.1　背景 ..... 35

4.2.2　目的 ..... 38

4.3　調査の概要 ..... 40

4.3.1　調査対象 ..... 40

4.3.2　調査方法 ..... 42

4.3.3　調査結果 ..... 43

4.4　考察 ..... 45

4.4.1　文体の全体的傾向 ..... 45

4.4.2　ジャンルとの関連 ..... 47

4.4.3　「ので」の接続文体と使用傾向 ..... 49

4.4.4　「から」の接続文体と使用傾向 ..... 51

4.5　まとめ ..... 53

**第 5 章　モダリティ表現との共起関係 ..... 55**

5.1　はじめに ..... 55

5.2 「から」「ので」と「主観/客観」.....56
5.2.1 先行研究.....56
5.2.2 目的.....58
5.3 データの収集と分類.....59
5.3.1 調査対象.....59
5.3.2 検索方法.....59
5.4 分析.....61
5.4.1 「から」「ので」とモダリティ表現の共起形式と頻度.....61
5.4.2 モダリティ表現を伴う「から」「ので」の使用傾向.....64
5.5 考察.....65
5.5.1 機能別にみたモダリティ表現と「から」「ので」.....65
5.5.2 モダリティ表現と「から」「ので」の共起使用傾向.....67
5.5.3 モダリティ表現と「から」.....69
5.5.4 モダリティ表現と「ので」.....71
5.6 まとめ.....73
**第 6 章 推量助動詞との共起関係 ..... 75**
6.1 はじめに.....75
6.2 背景と目的.....76
6.2.1 先行研究.....76
6.2.2 目的.....78
6.3 調査の概要.....79
6.3.1 調査対象.....79

6.3.2　推量表現.....79

6.3.3　検索形式.....81

6.4　分析.....83

6.4.1　全体的な使用傾向.....83

6.4.2　BCCWJ のジャンルにおける使用傾向.....86

6.5　考察.....89

6.5.1　「ようだ」「らしい」と「から」「ので」.....89

6.5.2　「みたいだ」「かもしれない」と「から」「ので」.....93

6.5.3　「はずだ」と「から」「ので」.....94

6.6　まとめ.....95

**第 7 章　結論 ..... 98**

**参考文献 ..... 105**

**謝辞 ..... 114**

# 第１章　研究対象と目的

## 1.1　研究対象の「から」「ので」

文法分析・文法記述の目的は、その言語の適格な文が単語を材料にしてどのように組み立てられるのかといった単語から文への組み立て規則・法則性を明らかにすることである(仁田 1997, p. 9)。さらに、日本語の記述文法に関して述べると、「日本語の具体的な表現を観察することにより、表現の形式と意味の相関に関する規則性を抽出し、それらを組織化する」(益岡 2002, p. 86)ことである。つまり、文法分析とは、文法機能を担う要素に存在する何らかの規則性を、それに関する言語現象について綿密に観察することによって体系化することを言う。

このような日本語の文法分析において、助詞と助動詞の研究は文法分析の中で一つの分野を成しており、国立国語研究所(1951)や橋本(1969)の研究がそれを示している。中でも助詞は、付属語の一種として助動詞と並んで膠着語としての日本語の一大特質を成し、文を構成する上で大きな役割を果たしている。

助詞は、体言、用言、副詞につき、語と語の関係を示したり、陳述に一定の意味を添えたりする働きを持っており、文の構成を助ける。その働きによって格助詞、副助詞、係助詞、終助詞、間投助詞、接続助詞などに分類される。その内、接続助詞は節と節を繋いで複文を作り、それによって複雑な思想を表すものとして明確な位置づけを行う機能を持つという点で特徴的である。接続助詞は節と節を繋ぐ役割において接続詞と似ているが、接続詞は後ろの節につくのに対し、接続助詞は前の節につくという点で異なる。

日本語には数多くの接続助詞がある。山田孝雄(1908)以来、接続助詞は前の節(=前件)と後ろの節(=後件)[1]をどう結ぶかによって、条件接続と列叙接続に分けられ(加藤 2006, p. 110)、用法によってさらに細分される。中でも条件

[1] 本研究では、「から」「ので」を扱う多数の先行研究と同様に、複文の従属節を前件、主節を後件と呼ぶ。

接続は、2 つの命題の論理関係に関わるものを表し、前件を条件として後件に帰結を述べるものである。さらに、条件接続は論理関係によって仮定帰結、原因結果、譲歩帰結に区別される。

加藤(2006)によれば、原因結果関係を表す接続助詞は、前件と後件が明確な因果関係を持ち、後件を実現させる何らかの有効な作用をするものである。その中で代表的に用いられるのが「から」と「ので」である。

原因結果関係を表す接続助詞「から」と「ので」の機能は非常に類似しており、主に理由節に用いられる。理由節とは、後件の事態が実現するため、事実的に存在している原因・理由を表すものである(仁田 1995 p. 392)。つまり、「から」「ので」の主要機能は前件と後件を因果関係で結ぶことであり、前件の事態に起因して後件の結果が成り立つのである。

しかし、因果関係を示す両者の機能には何らかな相違点が存在しており、両者はその相違点によって使い分けられている。

これまで、「から」と「ので」の相違点を扱う研究は多くあった。「から」に比べ、比較的に使用が少なかった「ので」は、明治 10 年代に入ってからその使用が増加することをきっかけに、接続助詞として定着したと見られる(原口 1971, pp. 39)。それ以来、「から」と「ので」の相違点を扱う研究は、松下(1930)から現在に至るまで膨大な蓄積がある。近年では「から」「ので」の使い分けについて、「個人差によって「から」を選ぶか「ので」を選ぶかの判定がなかなか微妙な場合の原因の 1 つに、時代に伴う言葉の変化がある(益岡 1993, p. 116)」という見解も出されている実情である。それにも拘らず、「から」「ので」の同異点に関して私の管見の限りでは未だに一致した見解は見られていない。

そこで、本研究では因果関係を表す代表的な接続助詞である「から」と「ので」を研究対象とする。類似する「から」「ので」について実際に用いられた用例を分析し、現代日本語における両者の使い分けに関する一定の法則性を明らかにすることが目的である。具体的には、「から」「ので」複文の前件を中心に大規模日本語コーパスを題材として「丁寧体と普通体との共起」、「モダリティ表現との共起」、また、モダリティ表現の中でも「推量表現との共起」と

いう 3 つの側面から両者の使用傾向と相違点を分析していくことである。

## 1.2　文法研究における大規模コーパスの利用

### 1.2.1　「コーパス」の意味とその発展

ここでは「コーパス」という用語の定義と概念について整理する。

最近では、コーパス(corpus)という語を聞く場合が多くなっている。一般的に、コーパスは言語分析の対象となるデータ、材料の集合体として理解されている。その「コーパス」の語源は以下の通りである。

> 「コーパス」という語は英語の corpus に由来し、これはさらにラテン語 corpus「体」(発音はコルプス)に発する。この語は文字通りの意味から転じて、比較的早くから『ローマ法大全』Corpus Iuris Civilis のように「資料の総体」を意味して使われ、この用法でヨーロッパ各国語に取り入れられた。特定のテキスト(音声言語を転写した資料を含む)のみに依拠して研究が行われる場合には、それをその研究におけるコーパスと呼ぶことになり、これが、最も広い意味でのコーパスである。
>
> (後藤 2003, p. 6)

コーパスという言葉は特定のテキストのみに依拠した研究という意味でヨーロッパを中心に広まった。その後、コンピュータの発達により、1961 年には 100 万語単位の単語を含むブラウンコーパス(Brown Corpus; the Brown University Corpus of American English)が作られるに至った。

ブラウンコーパスは 1961 年に発行された 500 種の多岐にわたる印刷物から約 2 千語ずつ取ったもので、全ての資料はコンピューターに入っており、世界中のどこからでも入手できる。このブラウンコーパスはその後に続くコーパスの手本となり、現在までイギリスやヨーロッパを中心として様々なコーパスが作られている。

このような動きから、最近は言語学の専門用語として定着してきている。最近では、「コーパス」という語の意味は言語研究のために現実の言語におけ

る大規模なデータを、基準に従い、網羅的・代表的に含み、コンピューターで検索・処理・保存可能なものとして使われている。以降にも、1994 年に完成したイギリスの British National Corpus(BNC)やコリンズ社の辞書編纂に利用された Bank of English など、億語単位の大規模コーパスが米・英語圏を中心に開発されてきた。大規模コーパスの構築と共に、コーパスを利用した言語研究が活性化されていく世界的潮流の中で、2011 年日本でも現代日本語の大規模均衡コーパスが公開された。それは、国立国語研究所を中心として 2006 年に構築が開始され、2011 年に完成した「現代日本語書き言葉均衡コーパス(Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese)」である。これの詳細については後述する。

この日本語大規模コーパスの公開により日本語研究の新しいアプローチとして用いられ、いわゆる「コーパス日本語学」が急速に普及するようになった。

### 1.2.2　大規模コーパス利用の利点

今までの文法研究は言語能力に関する研究が重視され、主に内省による文法研究が行われてきた。また、言語処理研究においても、文法理論やいわゆる文法的に正しい文の解析を対象とするものが主であった。しかし、現実には、従来の文法理論では説明できない言語現象や文法に逸脱したと考えられる文が少なからず用いられており、人間の言語使用の実態を客観的に眺める必要が生じてくる(松本 2009, p. 615)。

このようなことから、現実に広範囲で使用された、あるがままの文を観察するために大規模なテキストデータ、つまり大規模コーパスの存在はとても重要である。大規模コーパスは、現実に発せられたありのままの文を対象にした文法研究を行うことを可能にする。

コーパスを用いた文法研究は、ラング(langue)よりもパロール(parole)、言語能力よりも言語運用、体系(system)よりも使用(use)を重視し、英語や日本語といった個別言語内での具体的な言語運用に見られる文法パタンの解明を目指す(石川 2012 p.190)。つまり、従来の理論的な言語研究と異なる点は実際の用例を用いた言語使用の実態を重視することである。このことから大規

模日本語コーパスを使用する利点は、以下の通りである。

一番目に、従来の研究者の内省による研究とは異なる、現代日本語を代表する均衡コーパスから得られる多用な場面の実例をデータとして利用できることである。文法研究では内省による文法性判断が重要であるが、その判断には個人による異同が存在する。個人差の原因には様々な理由はあると考えられるが、文法性判断における個人差を克服するためには巨大なデータを共有しておいて、そこに含まれる多くの言語現象を多面的に分析したのちに分析結果を総合して、包括的な理論に到達することが望まれる(前川 2007b)。このことから大規模日本語コーパスは個人差による揺れのない研究題材として非常に有効である。

二番目に、大規模コーパスの資料分析において頻度データが得られることで全体的な使用傾向が客観的に把握できることである。調べようとする言語形式などの使用頻度を定量的に把握できることによって類似している他の形式と比較が容易になる。また、対応する複数の形式の間で、頻度の他に分布の仕方にも偏りがみられる場合もあり、言語的文脈間での分布の偏りを客観的に明確に示すことができる(後藤 2003, p. 12)。

三番目に、文法研究において実際に使用されているにもかかわらず、対象外とされてきた、いわゆる非文法的文、周辺的な文も言語使用の実態を重視する観点から研究対象にすることが可能になり、文法研究の範囲が広がることである。コーパスが対象とする言語は、人間が意志疎通のために自然に発生した現実のコミュニケーションにおける自然言語(natural language)であり、従来の文法や語の枠組みに縛られない視点で言語を観察することを可能にする(石川 2012, p. 14)。

このような利点からコーパスを用いてデータを詳しく分析すれば、内省による定義や理論をさらに精密化することが可能になるのである。

本研究では、大規模コーパスの利点を生かして現代日本語における「から」と「ので」の使い分けに関する使用傾向と両者の特性を実証的に分析していく。

## 1.3　本研究の着眼点と目的

### 1.3.1　「モダリティ体系」と前件の「陳述性」

本研究は、接続助詞「から」と「ので」の使用に関する接続形式を大規模日本語コーパスを用いて観察し、実際の使用から両者の異同に関する法則を見つけ出すことを目的とする。そのために、本研究における「から」と「ので」の相違点を究明する着眼点となるのは、益岡(1991)の「モダリティ体系」と「から」「ので」複文の前件の「陳述性」である。本研究の大きな枠組みとして益岡(1991)のモダリティ体系を援用する。そして、各章においては「から」「ので」の前件に注目し、本研究を進めていく。

益岡(1991)はモダリティ表現を表現者の判断・表現態度を表す形式であるとし、その役割によって 9 つのカテゴリーに類型化した。モダリティのカテゴリーを類型化したものを図示すると、以下の図 3-1 のようになる。

益岡(1991)によると、命題を中心に述語に向かって 9 つのモダリティ表現のカテゴリーが階層的な構造を成している。この階層的構造について、上位のものが下位のものを包み込む関係であるとしている。

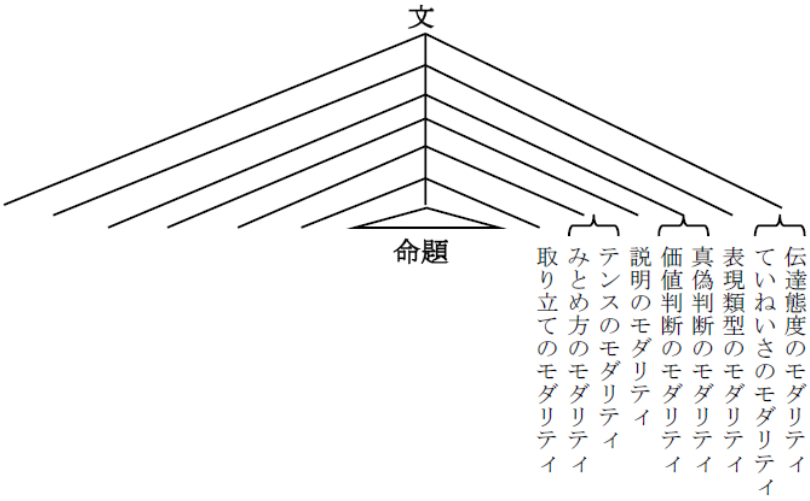


図 3-1　益岡(1991)のモダリティ体系(益岡(1991, p. 44))

その中で本研究の調査の対象とするものは、「ていねいさのモダリティ」(第 4 章)と「価値判断モダリティ」、「説明モダリティ」と「みとめ方モダリティ」(第 5 章)、「真偽判断モダリティ」(第 6 章)に関係する表現である。

「ていねいさのモダリティ」は、正に聞き手に対する丁寧さを表すモダリティであり、普通体と丁寧体の対立で構成されている。

「価値判断モダリティ」は「ことだ」「ものだ」「べきだ」「～なければならない」「ほうがよい」などの表現で事の適否を表し、「説明モダリティ」は「のだ」「わけだ」の表現で事態間の統合的な関係を表し、「みとめ方モダリティ」は事態の肯定・否定の判断を表す「～ない」などが属する。

「真偽判断モダリティ」には対象となる事柄の真偽に関する判断を表す表現であり、「らしい」「ようだ」などが属する。

このような益岡(1991)のモダリティ体系の枠組みを援用し、その中から「から」と「ので」の使い分けを両者の前件末の接続形式を中心に考察していく。上記に述べたモダリティ体系をもとに「から」「ので」の使い分けに関する法則性を明らかにするため、「から」「ので」複文の前件に注目して分析を進める。

日本語記述文法研究会(2008, p. 122)によると、「から」「ので」は、主節(後件)の事態は従属節(前件)の事態に依存して発生していることであって、その原因・理由がなければその結果も起こらないだろうという関係にある。日本語の文は文の意義的完結性が文末において完結することは一般的である。複文の場合、後件の文末に重点が置かれるということである。

一方で、伊藤(2005)によれば、これとは別に複文の従属節、つまり前件も陳述的側面を持っている。伊藤(2005)は、渡辺(1971)と南不二男(1974)の理論を挙げ、従属句(節)にも文末陳述性があることを主張した。以下はその詳細である。

> 渡辺実氏は、従属句の二次的な陳述力を述べ、南不二男氏も、同様である。文の構造に 2 つの側面があり、1 つは、その文で表現される客観的なことがら(素材)に対応する側面であり、もう 1 つは、それについての言語主体の態度に対応する側面であるが、この後者を modus(の世界)、即ち、「陳述的側面」と呼び、従属句に

もいろんな段階はあるが、陳述力を認められる。さらに、佐伯哲夫氏も、ある文の従属句に、文末陳述成分に近い性質、を認められた。

伊藤(2005, pp. 12-13)

本研究では、このような伊藤(2005)の主張を受け入れ、「から」「ので」複文の前件にも「陳述性」があるとし、「から」「ので」複文の前件の重要性を認める立場をとる。その立場から、後件の結果を導く原因である前件こそが「から」と「ので」の使い分けに深く関与していると想定する。

以上のことにより、本研究は「から」/「ので」複文の前件末の接続形式に関する特徴をモダリティという枠組みと前件の陳述性に関連付けて両者の相違点について考察を進める。

### 1.3.2　本研究の目的

本研究の目的は以下の 2 点にまとめられる。

第一に、「から」「ので」の使用に関して実例に基づき客観的に検証し、「から」と「ので」の使い分けに関するより詳細な基準を提案する。「から」と「ので」に関する従来の研究は、内省による研究が主であり、最近までにも研究者の間で一致した見解が見られていない。本研究では、大規模コーパスを資料として様々なジャンルの母集団から得られる形態論情報を用い、用例を調査、データ化し、分析を行う。コーパスはある語が実際に使われていることの実在証明になる(石川 2012, p. 16)ことから、本研究は、「から」「ので」の使用上の違いに関する実在証明をコーパスを用いて行う。本研究における実在証明とは、「ので」の丁寧さに関わる問題に注目した両者の接続文体に置ける相違点、話し手の心的態度を表すモダリティ表現に注目した「から」「ので」の主観性/客観性の問題を再解析、未定や不確かなことを表す推量助動詞とは共起し難い「ので」の使用に関する実在証明である。このような観点から、接続助詞「から」「ので」の実際の使用傾向を分析し、両者の使い分けを前件の接続形式の側面から検証する。

第二に、大規模コーパスを使用した非母語話者による文法研究の可能性を

示唆することである。本研究は、現代日本語の縮図となる、汎用的な目的に供するために作られた(山崎他 2011, p. 150)大規模コーパスを言語データとして使用し、接続助詞「から」と「ので」の特徴を観察、分析したものである。国立国語研究所は形態論情報を利用した高度な検索が可能なウェブ・アプリケーションを開発し、公開している。そのような検索ツールを利用することで、日本語の母語話者でなくても文法現象の観察が可能になる。本研究で使用した研究手法は、「から」「ので」などの助詞の研究のほかに、文法研究の全般に適用でき、他の文法事項を解明する場合はもちろん日本語教育にも役に立つと考えられる。

上述した本研究の目的を踏まえ、次節では本論文の構成について述べる。

## 1.4　本研究の構成

本論文の構成は以下の通りである。

第 2 章では、本研究の対象である接続助詞「から」と「ので」の概観と両者の同異点に関する先行研究について概観する。「から」「ので」の出自と定着までを概観し、両者に関する議論の始発点とされる永野(1952)から現在までの研究を総まとめする。そのあと、どのような問題が残されているかを確認する。

第 3 章では、本研究で使用する調査資料と方法について述べる。国立国語研究所が中心となり、10 年間に渡って構築した大規模日本語コーパスについて概観し、本研究で用いる対象ジャンルと検索手法について述べる。

第 4 章で調査する「ていねいさのモダリティ」とは、聞き手に対する丁寧さのことであり、述語の無標の形式で表す「普通体」と「です、ます」で表される「丁寧体[2]」のことを示す。「ので」は待遇的な機能を持っており、「から」に比べて「丁寧体」と共起されやすいと言われている(永野 1952, 横森・下村 1989)。このような観点から BCCWJ の「新聞」「雑誌」「Yahoo!知恵袋」「Yahoo!ブログ」での実際の使用頻度を調査し、丁寧さを表す文体が「から」「ので」の使い分け

[2] 本研究における「丁寧体」は間接的な表現や語用論的な丁寧さなどは考慮に入れず、「です」「ます」の活用形に限定して考える。

に影響を及ぼすかを考察する。

第 5 章で調査するのは、「から」「ので」と共起するモダリティ表現の使用傾向である。モダリティ表現は話し手の発話時点での心的態度を表すものであるという立場から、それぞれの表現は担う役割が異なる。ゆえに、後件に対する原因を表す前件末に用いられるモダリティ表現には「から」と「ので」の間で相違点が存在すると想定できる。モダリティ表現の各機能と使用場面を関連付けて、両者の使い分けを考察していく。

第 6 章では、まだ起きてない未来のことや未定のことを推測して話す際に用いられる推量表現の各種と「から」「ので」の共起関係を調査する。森田(1980, p. 110)によると、推量で受ける曖昧な言い方には「ので」を使うと不自然な言い方になり、「・・なので/・・するので/・・たので」などとはっきり断定的に述べるのが普通である。そのようなことから、実際の使用においても推量表現は「ので」より、「から」を選好するかを調査し、推量表現と共起する「から」と「ので」の使用場面を考察する。

最後の第 7 章の結論では、第 4 章から第 6 章までの結果を総括した後、本研究の研究成果及び今後の課題を提示する。

# 第 2 章　「から」「ので」の概観と主張

## 2.1　「から」/「ので」の概観

本節では、「から」「ので」の出自と接続助詞として使用について概観する。

### 2.1.1　出自

「から」は、動作や作用の起点を表す格助詞が出自であって、そこから理由を表す接続助詞に変化したものと考えられている（尾方 1993, p. 855）。本来の「起点」を表す性質に由来し、それが事態の変化の起点である原因・理由を表すように変化した結果が接続助詞としての機能になったと考えられる。

しかし、「から」の接続助詞としての使用がいつから始まったかについては確実にされていない。吉井(1977)によると、「から」は 1700 年代の江戸時代の文学作品には接続助詞として使われている。18 世紀末頃には日常語の文章化などを伴い、一般化され、現在に至っている。

一方で、「ので」はその語構成に関して 2 つの説がある。準体助詞「の」に格助詞「で」が付いたものと考える二語説と、「の」と「で」を一まとまりとして考える一語説がある。一語説とは、「故に」の意味を持つ「ので」の「の」は、二語説での「の」と機能が異なると主張するものである。

この 2 つの説のうち、「ので」の発生史的には前者の二語説のほうが認められている。「ので」の定着については原口(1971)の研究がある。これによると、「ので」は元禄期（1600 年代後半）の文章に見られはじめ、明治 10 年代（1877 年）には十分な定着を見るに至っている。

このように、「から」と「ので」はおよそ 1700 年ごろから接続助詞として使われていた。両者の使用状況に関して吉井（1977）の現代東京語の条件表現形式の調査によると、「から」は 1760 年頃から条件表現形式の中心となった一方で、「ので」は 1800 年前後から散見されはじめ、1850 年代には接続助詞の一定の位置を確立、1890 年までには 1800 年前後に比べ使用率が 1.5 割ほどに高まり完全に定着したと見られる。

その後、「ので」の使用増加とともに両者の区別に関する研究がなされ始め、

松下(1930)、松村(1944)などの研究が行われた。その後、永野(1952)が両者の相違点に関する本格的な議論の始発点となった。永野(1952)については次節で詳しく述べることにしておき、次項では「から」と「ので」の接続助詞の基本的な機能[3]について述べる。

### 2.1.2　接続助詞としての主要機能

現在、汎用的に使用されている辞書と日本語教育の教師のための参考書の記述を確認し、「から」と「ので」の接続助詞としての主要機能[4]を述べていく。

1) 『日本国語大辞典』第 2 版(2001)

・「から」−原因・理由を順接の関係において接続する。現代語では「ので」と並んでよく用いられるが、「から」には、話し手の主観的判断が強く働いており、「ので」には客観的描写性が強いという相違が認められる。

・「ので」−順接条件としての原因・理由を示す。「から」が二つの事柄に主観的に因果関係を持たせるのに対し、「ので」は客観的な必然の因果関係、自然の流れのようなものを追うのに用いられる。

2) 『日本語文法大辞典』(2001)

・「から」−原因・理由を示す用法の格助詞「から」が、活用語の連体形に下接して用いられ、接続助詞に転じたものと考えられる。

・「ので」−前件に述べる事柄が原因・理由・根拠・きっかけとなって、その結果、帰結として後件に述べる事柄が成立するという関係を表す。順接の確定条件を構成する語。前件と後件との関係が、比較的、客観的に明らかであるような場合に用いられる。「から」に比べると前件の条件としての独立性は弱いため、話し手が事柄を

[3] 辞書に記述されている接続助詞としての機能のみを紹介する。「からといって」、「からだ」などの活用表現に関する記述は本研究では対象外にする。
[4] 下線は原文にはない筆者の任意によるものである。

主観的な立場で原因・理由を取り上げ、順当な帰結として導かれる判断と結び付けようとする表現には「ので」ではなく「から」が用いられるのが普通である。

3) 『明鏡国語辞典』第 2 版(2010)

・「から」–次に続くことの原因・理由・根拠を表す。

自然ななりゆきで成立する、希望・命令などの根拠を表す「から」を使うのが標準的。説得・説明する気持ちで理由を述べる「ので」を用いるのは標準的でない。

・「ので」–前に述べたことが後ろに述べることの理由や原因であることを表す。

「から」と類義だが、「ので」は因果関係を話者の説明(=理由づけ)が必要な論理として、「から」は説明を要しない自然な摂理として示す。説明的ではない「から」はしばしば強引で押し付けがましい論理展開となる。

4)『日本語誤用辞典：外国人学習者の誤用から学ぶ日本語の意味用法と指導ポイント』(2010)

・「から」- 前件が理由を、後件がその結果を表す。話し言葉に用いられ、話し手の直接的な理由付けの気持ちを表すことが多い。謝罪や依頼の場面で「から」を用いると、「当然のことであり、自分は悪くない」といった態度と受け取られかねないので注意が必要である。

・「ので」- 理由節「から」と意味用法が似ているが、本来は、事態間の因果関係(理由と結果)や事実関係を論理的に述べる時に使われる。話し手がその根拠を示しながら主観的な判断を示す文では「ので」より「から」がふさわしい。

以上、「から」「ので」の機能に関して、主要辞書と日本語指導用の参考書を比べた。「から」「ので」の主要機能は前件と後件の因果関係を示しており、非

常に類似している。その詳細を確認すると 1)と 2)の辞書の主な定義は、「から」は主観的な根拠と、「ので」は客観的な根拠と因果関係を成す場合に用いられるとしている。また、4)の日本語指導用の参考書では、「から」は主観的な判断を表す文に相応しい、「ので」は事実関係を論理的述べると表現しており、「客観的」という表現を代替している。

これらに対し、3)の『明鏡国語辞典』はその解釈に若干の相違点が見られる。『明鏡国語辞典』では、「から」は自然な成り行きで成立する、「ので」は、話者の説明が必要としていると言う。言い換えると、「から」は話者の気持ちの介入が必要でない場合に、「ので」は話者の気持ちで理由づけが必要な場合に用いられるとのことであり、他の 2 つの辞書で言う定義とは逆であるとも言える。

このように、「から」と「ので」は因果関係を結ぶという主要機能は同様であるが、その因果関係を成す背景に関する捉え方には相違点が存在していることが分かる。

次節では「から」と「ので」の相違点に関する先行研究を考察し、両者の機能の区別と使い分けに関する問題を指摘する。

## 2.2　先行研究

2.1 節にも触れたが、「から」「ので」の異同に関する研究の始発点となったのは永野(1952)である。永野(1952)は「から」と「ので」の用法について以下の 7 つの相違点を取り上げている。

- 永野(1952)のまとめ

① 未来や命令の意味を含む文(推量、見解、意志、命令、依頼、質問)が次にくる時には、「から」は使うが「ので」は使わない。

② 「から」にだけ倒置の用法がある。

③ 「から」には「ので」の持っていない終助詞的な用法がある。

④ 「から」には、「は」「こそ」「とて」などの係助詞や、「といって」などをつけ

て、特に提示する用法がある。

⑤ 「ので」のあとにくる文は、ほとんど事柄の客観的叙述(自然現象・物理的現象、社会事象、生理的現象、心の動き、行動の客観描写、事物の様子の描写)である。

⑥ 「ので」は推量や未来の意味のことばに付くことができない。

⑦ 「から」は「のだ」「のです」につけて用いることができる。

このような相違点から、「から」は前・後件が話し手の主観によって原因結果、理由帰結の関係を成すものであり、その結びつきは話し手の判断作用によるものであるため、話し手の主観が充分な責任を持つという意味になるとしている。一方で「ので」は、前・後件がすでに因果関係を成しているものをありのまま客観的に描写する場合に使われるものであり、主観的な変更を加えないため主観の責任がないとしている。

このような永野説は、「から」と「ので」の用法の具体的な例を言及しながら両者の相違点の詳細を述べている点で高く評価されており、40 年以上も前に書かれた論文でありながら近年の研究にまで引用され続けている。実際、この研究について岩崎(1995)は、「から」「ので」の区別問題においては有効ですぐれた記述であり、これに完全に取って代わると思われる論文は書かれていないと評価している。

しかし、その反例を簡単に見つけることができることと、「から」は主観的、「ので」は客観的であるという二分法に対する批判が多いことは否定できない。

このような背景を踏まえ、本研究の本論で考察する、第 4 章の丁寧さと「から」「ので」の区別、第 5 章の「から」「ので」と共起するモダリティ表現、第 6 章の推量表現の各種と「から」「ので」の共起関係に関連する先行研究については、当該の章で述べることにしておく。

以下では、永野(1952)以降になされた「から」「ので」の相違点に関する主な研究の動向を簡略に概観する。

山田(1984)は、永野(1952)の「から」「ので」に関する主張を助詞の諸問題の 1 つとして取り上げ、その主張は再検討が必要であると指摘している。とりわ

け、「から」「ので」の弁別における表現者の主観的、客観的な措定について、小説などの例では表現者たるものの曖昧さから容易に当てはめることができないとしている。

趙(1988)は、「から」と「ので」が相手の対象に対する原因・理由の認識の高低によって使い分けられるとした。相手の対象に対する原因・理由の認識が低い場合には「ので」を、高い場合には「から」を主に用いるとし、認識度が低い相手に対象の原因・理由を強く分かってもらうという気持ちが働いていれば「ので」はいつでも使えるとしている。

今尾(1991)は、「から」「ので」「ため」の選択条件について発話態度、談話文法における焦点要素との共起という観点から比較した研究である。その考察の結果、「から」は、主観性・客観性の基準から中立的で焦点要素に後続しやすい接続形式である一方で、「ので」は疑似客観的接続機能を有しており、焦点要素に後続しにくい接続形式であると述べる

尾方(1993)は、説明すべき事態が状況的・文脈的に与えられている場合は「から」を、予備知識を持たない相手に伝える場合は「ので」を用いるとしている。

以上の研究らは内省に基づくものであるが、一方でもっと客観的な接近法を用いた研究も現れた。

花井(1990)は、新聞の随筆から 50 編、対話 23 編を対象に情報領域を分類し、「から」と「ので」の機能を明らかにする研究である。調査の結果、「ので」は話し手の情報領域のものを話し手の論理関係によって説明したもので、話し手情報の述べたてが本質的な機能である一方で、「から」は対話において前件が外部情報で後件に実質的に働きかけの言葉がある場合に使用されるとした。

伊藤(2005)は、新聞 3 紙と文学作品 4 種の地の文と会話文に現れた「から」と「ので」の出現数を調べ、両者の全ての用法の使用傾向を探る研究である。調べた前件と後件の文末形式から「から」は主観的な表現が多く、「ので」は客観的な表現が多いが、重なりあっている部分もあるため、完全に用法が分かれているとは言えないと結論付けている。しかし、これらの研究はいずれも

調査範囲が狭く、データの数も少ないため、「から」と「ので」の使用傾向であると言うには不充分である。

以上、永野説から今日までの「から」「ので」の相違点を扱う先行研究とその研究動向をまとめた。「から」と「ので」の同異に関して、内省に頼る研究と調査による研究がなされ、現在まで数多く蓄積されてきた。しかし、研究者の見解に一致は見られておらず、永野説を代替できる研究は筆者の管見の限りでは現れていない。

## 2.3　本研究の主張

前節で概観した先行研究を踏まえ、本研究では「から」「ので」の異同について以下のことを主張する。

一番目に、「ので」は、「から」にはない特有の機能として待遇的な機能、丁寧さを持っており、その機能によって丁寧体との共起が好まれるとされている。このことから「から」「ので」の前・後件の接続文体を調べ、「ので」の待遇的な性質が接続文体に影響を及ぼすことを明らかにする。「ので」はそれ自体が持つとされる待遇的な性質が影響を与え、前・後件の文末に「丁寧体」と共起する文体が主に用いられる一方で、「から」は「ので」とは逆に、待遇的な機能を持っていないため、カジュアルな「普通体　から、普通体」の文体の使用が多いことを証明する。また、両者と共起使用率が高い接続文体とその使用背景を考察し、接続文体における使い分けを明確にする。「ので」は聞き手と使用場面を考慮に入れ、ある事柄について話し手の意見や主張を柔らかく丁寧に述べる際に用いられるのに対し、「から」は説明を要しない情報伝達や話し手の個人的な考えを述べる際に用いられることについて主張する。

二番目に、「から」は前件と後件を主観的に捉えて結びつける一方で、「ので」は客観的に捉えるとされている。そのようなことから前件末に話し手の心的態度を表すモダリティ表現が用いられた文を調べ、モダリティ表現の機能別に分類を行う。その分類の結果から「から」「ので」とモダリティ表現の共起関係を考察し、両者の「主観的/客観的」な性質について再考する。「から」

は一般的に受け入れられていることを述べる場合やある事柄を話し手の判断を介入させず第 3 者にそのまま伝える際に用いられるモダリティ表現と共起されやすい一方で、「ので」は不確かなことや状況における話し手の判断を表すモダリティ表現が前件末に使用されることを主張する。

三番目に、「から」とは異なり、「ので」は不確かなことを推測、想像する表現や未来を表す表現、話し手の心の状態は前件には使えないとされている(森田 1980, p.112)ことから、これが実際の使用においても当てはまるかを明らかにする。推量を表す助動詞が前件末に用いられる文の出現数と使用場面を考察し、「から」「ので」の使い分けには「らしい」「ようだ」などのような推量助動詞との共起が関与していることを主張する。

次の 3 章では、本研究の研究資料である国立国語研究所が構築した大規模日本語コーパスについて概観し、接続助詞としての「から」「ので」の抽出方法を述べる。

# 第 3 章　研究資料と方法

## 3.1　研究資料

本研究で用いる研究資料は『現代日本語書き言葉均衡コーパス（Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese, 以下、BCCWJ と呼ぶ）』である。BCCWJ は国立国語研究所が構築し、2011 年に公開した大規模日本語コーパスである[5]。現代日本語の書き言葉の全体像を把握するために構築されたコーパスであり、現在、日本語について入手可能な唯一の均衡コーパスである。以下では、BCCWJ の構築について概観したあと、その中で本研究の対象としている媒体の特徴について詳述する。

### 3.1.1 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」[6]

BCCWJ は、現代日本語の縮図であること、汎用的な目的に供すること、公開可能であること、既存のコーパスと調和することの 4 つの基本方針で設計された（山崎他 2011, p. 150）。具体的には以下の通りである。

①現代日本語の縮図となるコーパス

これまで国立国語研究所が行ってきた語彙調査の手法を生かし、コーパスがその母集団の統計的な縮図になり、母集団に対し代表性を持つように設計する。それにより、母集団における言語的諸特性の分布が縮図において過不足なく再現でき、母集団における分布を高い精度で推測できるようにする。

②汎用的な目的に供するコーパス

言語研究（語彙・文法・文字）以外にも日本語教育、国語政策、辞書編集、自然言語処理などの分野でも活用することを目的として、様々な日本語の姿を捉

---

[5] http://www.ninjal.ac.jp/kotonoha/news/2011/

[6] 本研究で述べる BCCWJ の概要については国立国語研究所コーパス開発センターのホームページと山崎(2011)、山崎他(2011)を参考にした。
参考 URL：http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/

えることができるように設計する。

③公開可能なコーパス

収録する著作物について利用許諾を得て公開する。オンラインでの簡易検索、詳細検索、DVD による全文提供の 3 種類である。

④既存のコーパスとの調和

XML[7]による文書構造の記述、2 種類の言語単位（短単位、長単位）による情報付与により、『太陽コーパス』、『日本語話言葉コーパス』との整合性を保つ。

（山崎 2011, p. 12）

このような方針を掲げて構築された BCCWJ には、書籍全般、雑誌全般、新聞、白書、ブログ、ネット掲示板、教科書、法律などのジャンルにまたがって全体語数 1 億 430 万語のデータが格納されており、全サンプルの形態素解析（テキストを語に区切って品詞に分類すること）の精度も 98%を上回っている大規模日本語コーパスである。

日本語は膠着語的性格を持っていることや分かち書きをしないことなどの表記体系が複雑であるため、形態論情報付与作業が難しいとされる。例えば、「日本語」という語は「日本＋語」の 2 語としてみることも可能であり、 全体で 1 つの語としてみることも可能である。このような 2 つの解釈を考慮し、BCCWJ では「短単位」と「長単位」という 2 種類の言語単位を用いて形態素解析が施されている。BCCWJ における「短単位(short unit word)」とは、意味を持つ最小の単位が 1 回結合した単位を示す。また、「長単位(long unit word)」とは、短単位を組み上げたもので文節から付属語を取り除いた部分に相当するものを示す。具体的には以下のようである。

[7] Extensible Markup Language の略語であり、文書やデータなどの意味や構造を記述するためのマークアップ言語の 1 つである。BCCWJ における XML による文書構造の記述に関しては国立国語研究所コーパス開発センターのホームページを参照されたい。
参考 URL： http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/XML.html

(1)　a. 短単位：｜日本｜語｜を｜研究｜し｜て｜いる

b. 長単位：｜日本語｜を｜研究し｜ている

(小木曽他 2011, p. 43)

BCCWJ では、(1)のように「短単位」と「長単位」の 2 種類の形態論情報を98%を上回る精度で得られる。このことは日本語の言語的特徴からの難点を極力克服しようとした点から、BCCWJ の価値を高く評価できる部分であると考えられる。

また、BCCWJ では日本語テキストに形態論情報を付与するため UniDic という形態素解析電子化辞書を利用している。UniDic の主な特徴は、語彙素・語形・書字形・発音形の階層構造を持ち、表記の揺れや語形の変異にかかわらず同一の見出しを与えることができることである。これによって語種をはじめとする言語研究に有用な情報を付与することができ、詳細な品詞分析が可能になる[8]。図 3-1 は BCCWJ の WEB 検索ツールを用いた検索結果から得られる形態素分析の画面である。

図 3-1 の左から順番に、BCCWJ のサンプル ID、連番、書字形出現形、語彙素読み、語彙素、語彙素細分類、品詞、活用型、活用形、発音出現形、語種、原文出現形などが示されている。このように、形態素分析が正確に得られるため、検索したい語の出現形のみに頼らず、より詳細な検索が可能になり、コーパスの利用の幅がより広がると考えられる。

[8] UniDic は Ver.2.x 以降、完全なフリーソフトウェアとなっている。
出典 URL： http://sourceforge.jp/projects/unidic/

close

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| PN2m_00006 | 4710 | める | アル | 有る | | 動詞-一般 | ラ行 | 一般 | アル | 和 | める | 聞 | | 1 | | 913.8 |
| PN2m_00006 | 4720 | の | ノ | の | | 助詞-準体助詞 | | | ノ | 和 | の | 出版・新聞 | | 1 | | 914.9 |
| PN2m_00006 | 4730 | が | ガ | が | | 助詞-格助詞 | | | ガ | 和 | が | 出版・新聞 | | 1 | | 915.9 |
| PN2m_00006 | 4740 | 一般的 | イッパンテキ | 一般的 | | 形状詞-一般 | | | イッパンテキ | 漢 | 一般的 | 出版・新聞 | | 1 | | 918.7 |
| PN2m_00006 | 4750 | である | デアル | である | | 助動詞 | 五段-ラ行 | 終止形-一般 | デアル | 和 | である | 出版・新聞 | | 1 | | 921.7 |
| PN2m_00006 | 4760 | から | カラ | から | | 助詞-接続助詞 | | | カラ | 和 | から | 出版・新聞 | | 1 | | 923.8 |
| PN2m_00006 | 4770 | 、 | | 、 | | 補助記号-読点 | | | | 記号 | 、 | 出版・新聞 | | 1 | | 924.9 |
| PN2m_00006 | 4780 | 親 | オヤ | 親 | | 名詞-普通名詞-一般 | | | オヤ | 和 | 親 | 出版・新聞 | | 1 | | 925.9 |
| PN2m_00006 | 4790 | の | ノ | の | | 助詞-格助詞 | | | ノ | 和 | の | 出版・新聞 | | 1 | | 926.9 |
| PN2m_00006 | 4800 | 働く | ハタラク | 働く | | 動詞-一般 | 五段-カ行 | 連体形-一般 | ハタラク | 和 | 働く | 出版・新聞 | | 1 | | 928.8 |

図 3-1　前後文脈の形態論情報表示(長単位の場合)

さらに、BCCWJ は汎用の観点から収録するサンプルの長さを 2 種類に分けて設計されている。1 サンプルの長さが一定であれば、計量的な分析には向いているが、文章が途中で切れてしまう場合が多く、文脈を顧慮した分析には向かない。そのため、長さが異なる固定長サンプルと可変長サンプルの 2 種類に設計されたのである。

固定長サンプルとは、1 つのサンプルの長さを 1,000 字としたものである。1,000 字には句読点などの記号類は含まない。これに対し、可変長サンプルは、1 つのサンプルの長さを固定せず、節、章などの文章のまとまりを 1 サンプルと考えるものである。固定長サンプルは母集団からの抽出比率が統計的な意味を持つため、語意表や漢字表の作成に適している一方で、可変長サンプルはテキストの論理構造の把握やテキスト内での役割を持った要素の分析などに適している(山崎 2011, p. 14)。

そして、BCCWJ は文書構造に関するタグや精密な書誌情報などを含め、年齢、性別、母語などの書き手の社会的属性の情報も著作権処理済みで提供されており、メタ情報を利用した研究を行うにも非常に役に立つと考えられる。

| 表示番号 | 前文脈 | 検索文字列 | 後文脈 | 執筆者 | 生年代 | 性別 | メディア/ジャンル |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | とをもっている。しかも、一字一音一訓の原則がなりたたないのである。ということは、 | 日本語 | においては、漢字一個に対して、文字要素としては二個あるいはそれ以上の役わりがふり | 梅棹　忠夫(著) | 1920 | 男 | 書籍/0 総記 |
| 2 | here。日本語では，茫然自失して為す所を知らない，というのでしょうか，英語にも | 日本語 | にもlostという単語が入っているから，おもしろい．1920年代のアメリカではT | ロジャー・パルバース(著) | 1940 | 男 | 書籍/8 言語 |
| 3 | 人の張チョルホに訊いてみた。「おい、金髪姫ってどんな娘だったっけ？」 すると、 | 日本語 | 科出身の張チョルホは、「うん、彼女はもともと日本語科出身で、すなおな可愛い娘だ | 康　明道(著)/ 尹　学準(訳) | 1950/1930 | 男/男 | 書籍/3 社会科学 |
| 4 | からも統治は継続した。 その南洋群島でも他の植民地と同様に「国語教育」と呼ばれた | 日本語 | 教育が、占領直後の一九一四年から約三〇年間にわたって実施される。(1) 南洋群島 | 多仁　安代(著) | 1950 | 女 | 書籍/8 言語 |
| 5 | 組織要件具備証明書』(必要な人はトラベル・アフダビットも)をもらったら、これらを | 日本語 | に訳し(訳者の名前と印鑑付きで)次は役所へ行きます。 役所へは、『組織要件具備証 | 実著者不明 | | | 書籍/3 社会科学 |
| 6 | J「息」と意味幅が広い。その点では日本で言う「ことだま」と似ているかもしれない。 | 日本語 | で「ながいき」は「長息」であり「長生き」である。 一般に民族音楽においては、管楽 | 若林　忠宏(著) | 1950 | 男 | 書籍/7 芸術・美術 |
| 7 | をチェックしたり写真をプリントしたりする以外には、まだよく使いこなせない。OSが | 日本語 | 版でなく英語だったらもっと楽なのだろうが。最近は写真にも凝るようになり、ビデオカ | チャールズ・R・ジェンキンス(著)/ 伊藤　真(訳) | 1940/1960 | 男/男 | 書籍/2 歴史 |
| 8 | いった。大陸進出を本格化していくなかで「満洲国」は日本化され、これと歩調を合わせ | 日本語 | の普及も積極性を持ちだす。日本側は建国イデオロギーの一つの「五族協和」を言語政策 | 安田　敏朗(著) | 1960 | 男 | 書籍/8 言語 |

図 3-2　「小納言」の検索画面(ホームページ)

このような BCCWJ の膨大なデータから、必要な用例のみを検索することはとても重要な作業である。そのために国立国語研究所では BCCWJ の WEB 検索ツールとして「少納言」と「中納言」[9]を開発し、ホームページで公開している。ただし、「中納言」の使用には書面による申請が必要である。

「少納言」は、図 3-2 に示した通り、文字列検索(全文検索)が可能で、指定された文字列を含む全てのテキストが検索される。「表示番号」「前文脈」「検索文字列」「後文脈」「執筆者」「生年代」「性別」「メディア/ジャンル」「タイトル」「副題」「巻号」「編著者等」「出版者」「出版年」が表示される。「少納言」は専門的な知識がなくてもコーパスの検索ができることが長点であるが、それをダウンロードすることはできない。そのため、見たい用例のみを検索することに向いている。

一方で、「中納言」は、短単位・長単位・文字列の 3 つの方法によってコーパスに付与された形態論情報を組み合わせた高度な検索を行うことができる。

[9] 少納言のホームページ： http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/
中納言のホームページ： https://chunagon.ninjal.ac.jp

「中納言」のより詳しい説明は 3.4 節で述べることにする。

BCCWJ の完成・公開に伴い、現代日本語の多様な研究に用いられ始めている。多義語、類義語などにおける意味分布の研究(山崎 2011a、村中 2012 など)、複合動詞、複合名詞などの語義的特徴と構造分析の研究(山口他 2013 など)、日本語教育の観点からの教育用、指導用の教材作成の研究(堀 2013 など)、辞書編纂のためのコロケーションの研究(STRAFELLA 他 2013 など)などがある。

これに加えて、BCCWJ を用いた助詞、接続詞の使用環境と選択に関する研究も活発に行われ始めている。「から」と「ので」を含む接続助詞の形態的特徴を BCCWJ の各ジャンルの特徴と関連付けて分析する研究も見られ、小西(2010)や宮内他(2009)などがある。両研究は、「から」「ので」の意味機能を完全排除した数量的な観点から分析をしており、文法研究に新しい研究手法を取り入れた点で、コーパスを用いる記述文法に広い可能性が伺える意味のある研究である。

以上のように、BCCWJ は設計の段階から綿密な計画のもとで構築された大規模日本語コーパスである。この BCCWJ を用いて文法研究をすれば、従来では不可能であった広範囲における現代日本語の全般を調査することが可能になる。また、より客観的な観点で文法現象を観察することができることもコーパス利用の大きな長所であると考えられる。

### 3.1.2 BCCWJ のサブコーパス

BCCWJ における書き言葉の母集団には、言語生活と伝達過程の 2 つの側面から見た書き言葉がある。

具体的には、言語生活からみた書き言葉とは、新聞、雑誌、書籍などの「読む」ことに当てはまるものと、手紙、メール、メモなど「読む」ことも「書く」こともあるものを指す。その中で、母集団の範囲を決め難い手紙、メールなどは収録の対象とせず、「公共的書き言葉」として新聞、雑誌、書籍が母集団として選定された。ウェブ上のコンテンツも現代に書き言葉として重要であるが、技術的な面から特定のコンテンツのみが収録された。

表 3-1　BCCWJ の構成[10]

| サブコーパス(Sub Corpus) | | 媒体(Register) | サンプル数(個) | 語数(万語) |
|---|---|---|---|---|
| 生産実態 | 出版 SC | **書籍** | **11,212** | **2,954** |
| | | **雑誌** | **2,483** | **569** |
| | | **新聞** | **1,490** | **88** |
| 流通実態 | 図書館 SC | 書籍 | 11,242 | 3,005 |
| 特定目的 | 非母集団 SC | **白書** | **1,500** | **500** |
| | | 教科書 | 483 | 120 |
| | | 広報誌 | 355 | 400 |
| | | ベストセラー | 1,696 | 447 |
| | | **Yahoo!知恵袋** | **91,450** | **1,000** |
| | | **Yahoo!ブログ** | **52,680** | **1,000** |
| | | 韻文 | 253 | 15 |
| | | 法律 | 348 | 100 |
| | | **国会会議録** | **159** | **500** |
| 合計 | | | 175,351 | 10,698 |

伝達過程から見た書き言葉とは、市場に出回る商品としての性質を持っており、生産、流通、受容という「書き言葉の実態」のことを指す。

書き手によって生産された書き言葉が読み手に届くまでの過程に注目し、これらに関わる書物が「生産」と「流通」として収録された。

表 3-1 は BCCWJ の 3 つのサブコーパスと各母集団に属する媒体ごとに分け、これらの長単位構成の詳細を示したものである。各媒体は代表性を有す

[10] 山崎他(2011, p. 150)によるものであり、今後著作権処理の問題で変動の可能性はある。より詳しい BCCWJ の長単位語数の情報は以下の URL を参照されたい。
参考 URL:
https://maro.ninjal.ac.jp/wiki/index.php?BCCWJ%2F%E9%95%B7%E5%8D%98%E4%BD%8D%E8%AA%9E%E6%95%B0#notefoot_1

るように集められた資料であり、その総数は 1 億語を突破している。
この中から本研究で研究対象として使用した媒体には太字と色つけで示し、その詳細は 3.1.3 節で述べることにする。ここでは、本研究の調査対象として選定しなかった媒体について概観し、その理由を示す。

まず、図書館サブコーパスの「書籍」は、1986 年から 2005 年までの 20 年間に発行された書籍のうち、東京都内の 13 自治体以上で共通に所蔵されている 335,721 冊を選定したものである。また、非母集団サブコーパスの「ベストセラー」は、各年のベストセラーとして上位 20 位までに挙げられた書籍 951 冊から成っている。これは、出版サブコーパスの「書籍」とデータが重なる可能性が非常に高い。そうすると 1 つの文が数度カウントされ、検索結果に影響が出る可能性が高いため対象から除外した。

次に、特定目的サブコーパスの中では調査対象とした媒体の他の 5 つの媒体について、以下のような理由で対象資料から除外した。「教科書」は、小・中・高校の各学習指導要領に基づき、2005 年度から 2007 年度に実際に使用された検定教科書が対象になっている。しかし、出現用例のほとんどが数学と科学の数式の説明であるため、調査対象から除外した。「広報紙」は、全国から 100 の自治体で 2008 年度に発行された広報紙が収録されているものであるが、「から」「ので」の用例のほとんどが「−から/ので、−てください。」の形式であるため、対象外とした。また、「韻文」は、俳句、短歌、詩で構成されており、一般的に散文を指す書き言葉の文体ではないことから対象外とした。最後に、「法律」は 1976 年から 2005 年までの 30 年間に公布され、2009 年時点で施行されている 718 の法律から 348 サンプルが収録されている。しかし、本研究で検索対象とする前接形式を伴う「から」「ので」の出現用例数が非常に少ないという理由で調査対象から除外とした。

### 3.1.3　本研究の対象媒体

上記に示した表 3-1 の中から本研究で研究対象とするサブコーパスについて、その詳細と選定理由について述べる。

第 4 章では、出版サブコーパスの「雑誌」「新聞」、非母集団サブコーパスの

「Yahoo!知恵袋」「Yahoo!ブログ」を、第 5 章では出版サブコーパスの「書籍」を対象とする。第 6 章の研究対象は、「書籍」「Yahoo!知恵袋」「国会会議録」「白書」の 4 つの媒体である。

本研究における調査対象であるそれぞれの媒体の特徴については以下の通りである。

まず、生産実態に着目した出版サブコーパスには「書籍」「雑誌」「新聞」が属されている。

出版サブコーパスの「書籍」は書き言葉が生み出される出版の実態に着目したものであり、2001 年から 2005 年の間に国内で発行されたものが対象である(山崎 2011)。出版サブコーパスの「書籍」の母集団の選定は、国立国会図書館の蔵書目録を電子化した「J-BISC」をもとに選定され、NDC(日本十進分類法)と発行年ごとに層別されたものである。写真集、図画集のような言語表現が主体でないものや絵本のような文字数が極端に少ないものなど、書き言葉設計趣旨に照らし、適切ではないものは母集団から除外された。「雑誌」は「雑誌新聞総かたろぐ(メディア・リサーチ・センター発行)」に掲載されている雑誌の中から母集団が選定された。「新聞」は「全国新聞ガイド(社団法人日本新聞協会発行)」などを参考に全国紙、ブロック紙、地方紙の中から選ばれた。

次に、特定目的の非母集団サブコーパスの中では「白書」「知恵袋」「ブログ」「国会会議録」を調査対象とした。「白書」は、1976 年から 2005 年までの 30 年間に発行された政府系刊行物「白書」1,006 冊からランダムサンプリングで抽出された 1,500 サンプルが入っている。安全、外交、科学記述、環境、教育、経済、国土交通、農林水産、福祉の 9 ジャンルの内容が収録されており、日本の中央省庁の編集による刊行物のうち、政治社会経済の実態及び政府の施策の現状について国民に周知させることを主眼とするものである。政府の施策についての現状分析と事後報告を中心とした公表資料であり、統計、図表、法令などのデータ集は含まれない。「Yahoo!知恵袋」と「Yahoo!ブログ」はヤフー株式会社より提供されたデータから成るもので、「Yahoo!知恵袋」は 2005 年、「Yahoo!ブログ」が 2008 年に投稿されたデータから抽出した記事が収録

されている。「Yahoo!知恵袋」の 1 つのサンプルは 1 つの質問とそれに対するベストアンサーからなっており、15 個のカテゴリー、82 個の中カテゴリー、279 個の小カテゴリで構成されている。「Yahoo!ブログ」は各記事を 15 個のカテゴリー、54 個の中カテゴリー、316 個の小カテゴリーで構成されており、これらは「Yahoo!知恵袋」のカテゴリーとは別のものである。「国会会議録」は 1976 年から 2005 年までの 30 年間の国会会議録である。国立国会図書館より提供された第 77 国会から 163 回国会まで開かれた 32、986 会議の会議録データの中から、約 500 万語分に相当する 159 会議を抽出したものである。

以上のように、各媒体によって母集団選定の趣旨が異なっており、それぞれの媒体が現代日本語を代表できるように集められた資料の種類であるという特徴を持っている。この 7 つの媒体は本研究の本論である第 4 章の丁寧さと「から」「ので」の区別、第 5 章の「から」「ので」と共起するモダリティ表現、第 6 章の推量表現の各種と「から」「ので」の共起関係を調べるため、各章における調査対象として使用される。これらの媒体には、年代ごとに層別化[11]した場合、ほぼ均等にデータが収容されており、データの年代差に大きな隔たりが見られない媒体であることが本研究の調査対象として選定した理由である。そうすることで、より客観的で正確な調査結果が得られ、本研究の目的である現代日本語における「から」「ので」の使い分けに関する使用傾向と両者の異同を究明するという目的に適合すると考えられる。

次節では、このような媒体から接続助詞「から」と「ので」を取り出す方法と手順を紹介する。

[11] 参考 URL：
https://maro.ninjal.ac.jp/wiki/index.php?BCCWJ%2F%E7%9F%AD%E5%8D%98%E4%BD%8D%E8%AA%9E%E6%95%B0#ka75f31b

## 3.2　研究方法

### 3.2.1　『中納言』

3.3.1 節で触れたように、「中納言」は、短単位・長単位・文字列の 3 つの方法によってコーパスに付与された形態論情報を組み合わせた高度な検索を行うことができるオンラインツールである。「中納言」では、検索結果を KWIC 形式[12]で表示し、区切りテキストの形式でダウンロードすることができる。中納言のホームページの画面上では 500 件までが表示されるため、検索された用例が多い場合には検索結果をダウンロードし、全ての用例を観察することが可能である。

次のページに示す(2)と(3)には、「中納言」から検索レジスターを出版サブコーパス「新聞」に設定した場合の接続助詞「から」と「ので」の長単位検索式である。(2)と(3)の検索式は、「キーに示した長単位の語彙素と品詞あるいは活用形を、出版サブコーパスの新聞の中から、長単位で、キーから前後 50 語を表示し、可変長と固定長の両方で検索せよ」という意味である。これらの検索式について、実際に「中納言」で検索条件を入力した画面が図 3-3 と図 3-4 である。

「中納言」の検索式において「キー」は、検索したい言葉の情報のことを示し、キーの情報は 10 種類に指定することができる。キーの情報は、「書字形出現形」、「語彙素」、「語彙素読み」、「語形」、「品詞」、「活用型」、「活用形」、「書字形」、「発音形出現形」、「WHERE 句」であり、「中納言」の画面から直接文字列を入力するか、「大/中/小分類」による選択式となっている。

[12] Keyword in Context の略語である。キーワードに指定した表現の出現位置とその前後の文脈を表示する方式である。

(2)「から」-

キー: (語彙素 = "から" AND 品詞 = "助詞-接続助詞") IN (registerName="出版・新聞" AND core="true") OR (registerName="出版・新聞" AND core="false") WITH OPTIONS unit="2" AND tglWords="10" AND limitToSelfSentence="0" AND endOfLine="CRLF" AND tglKugiri="|" AND encoding="UTF-8" AND tglFixVariable="2"

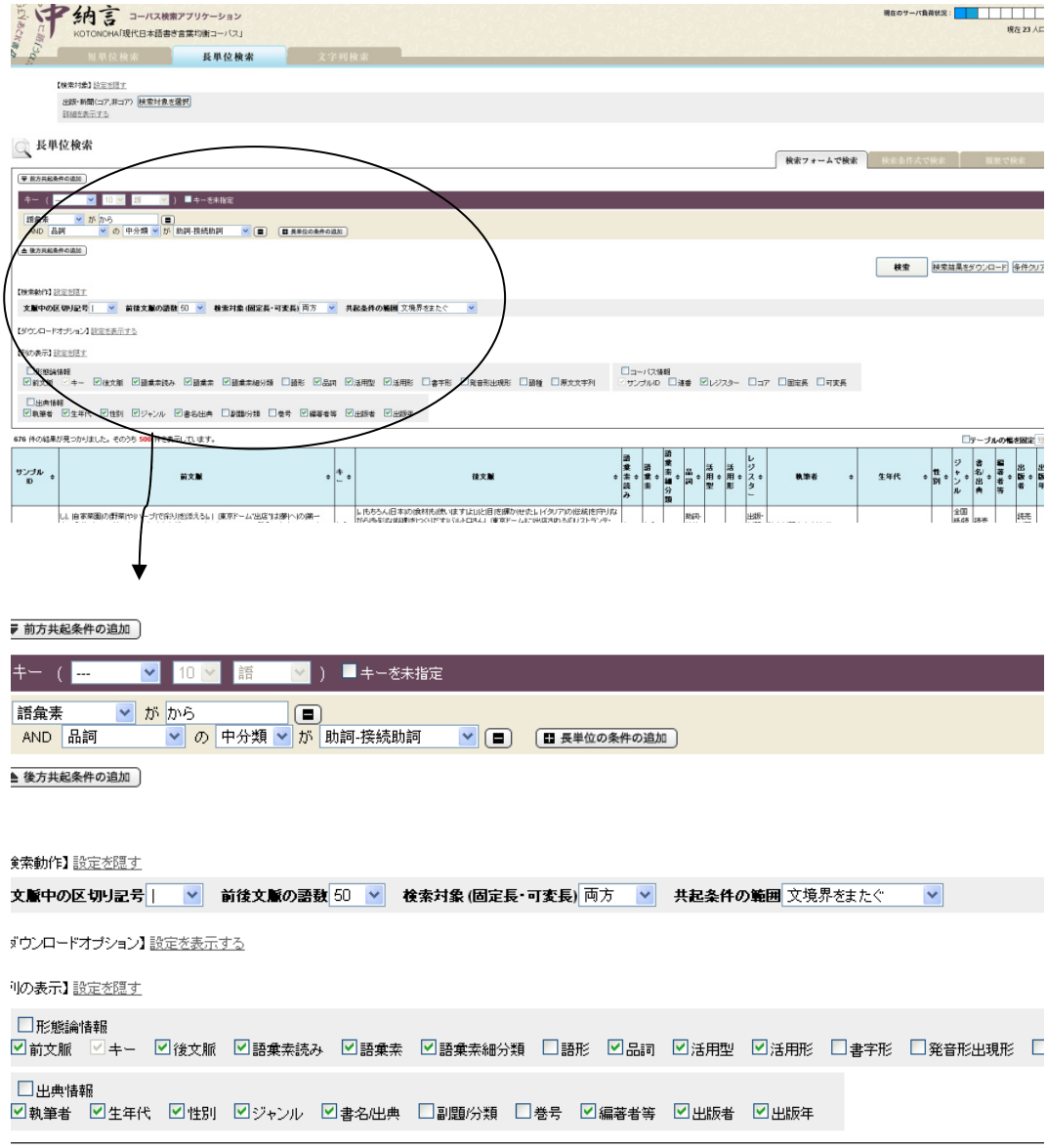


図 3-3 「中納言」における「から」の検索画面(一部分)

(3) 「ので」-

キー: (語彙素 = "のだ" AND 活用形 = "連用形-一般") IN (registerName="出版・新聞" AND core="true") OR (registerName="出版・新聞" AND core="false") WITH OPTIONS unit="2" AND tglWords="10" AND limitToSelfSentence="0" AND endOfLine="CRLF" AND tglKugiri="|" AND encoding="UTF-8" AND tglFixVariable="2"

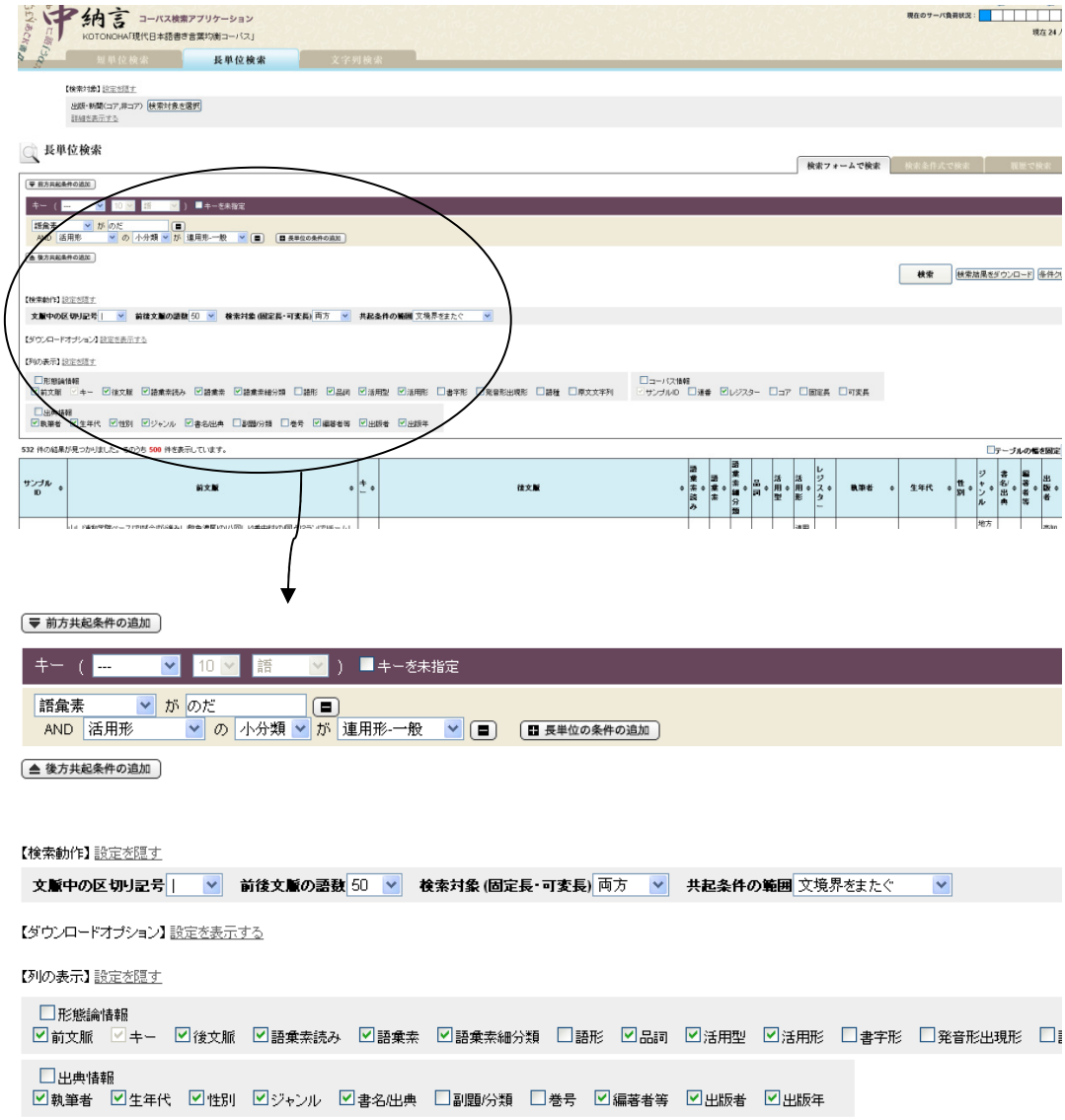


図 3-4 「中納言」における「ので」の検索画面(一部分)

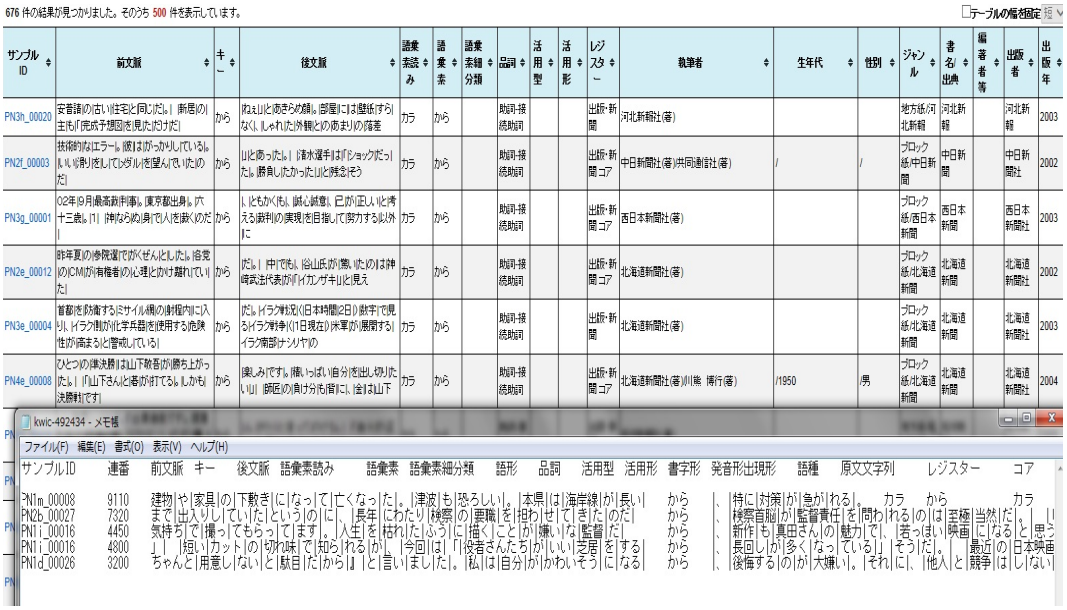

図 3-5　「中納言」と KWIC 形式による検索結果表示(一部分)

「中納言」に、(2)と(3)の検索式を適用して調べた結果は、図 3-5 のように KWIC 形式で得られる。図 3-5 の上半分はキーを「から」にした場合の前後文脈とコーパス情報及び出典情報であり、下のメモ帳の部分は「中納言」の検索結果をダウンロードした場合の KWIC 形式の画面である。

### 3.2.2　調査対象の抽出

接続助詞としての「から」と「ので」を抽出するために、前節で示した(2)と(3)の検索式と方法を用いて検索した。その検索結果から手作業による確認を行い、以下に示す「から」「ので」の用法の 4 点を本研究の対象外とした。

① 1 つの文の中に「から」と「ので」が重複して使用されているもの。
② 「～から、私は…」のように後件が現れていないもの。
③ 「～は～からだ。」、「～からだと」のように倒置の形式であるもの。
④ 「～からといって」、「からって」などの複合辞であるもの。

①～④は、文の意味を判断し難いものと「から」「ので」の接続助詞としての使用が認められない場合であり、用例のすべてについて目視による確認作業

を行い、上記に相当するものを排除した。以下の表 3-2 は、3.1.2 節の表 3-1 に示した BCCWJ の総語数から上記の 4 つの除外対象を除く作業の結果をまとめたものである。本研究の分析対象となるのは、BCCWJ の 7 つの媒体とそれに収録されている接続助詞としての「から」42,435 件、「ので」91,733 件である。このような両者のデータ数のジャンル別分布を図 3-6 に示した。

表 3-2　BCCWJ における「から」「ので」の出現件数

| 媒体（レジスター） | | から | ので | 合計 |
|---|---|---|---|---|
| 出版 ＳＣ | 書籍 | **14,307** | **21,415** | **35,722** |
| | 雑誌 | **2,941** | **4,294** | **7,235** |
| | 新聞 | **238** | **400** | **638** |
| 非母集団 ＳＣ | 白書 | **91** | **546** | **637** |
| | Yahoo!知恵袋 | **9,867** | **35,039** | **44,906** |
| | Yahoo!ブログ | **9,177** | **22,714** | **31,891** |
| | 国会会議録 | **5,814** | **7,325** | **13,139** |
| 総出現数 | | **42,435** | **91,733** | **134,168** |

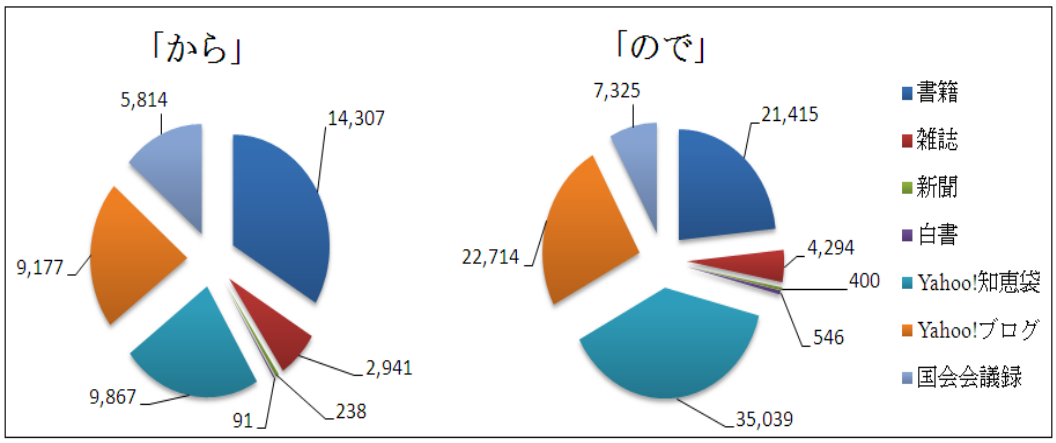


図 3-6　「から」「ので」のジャンル別使用分布

本論文における出現件数とは、「から」と「ので」をキーとして設定し、その前後 50 語以内にまとまる 1 つの文を 1 としてカウントした数字である。表 3-2 をはじめ、次の 4 章以降の調査結果で示す数字は件数であり、すべての統計結果も件数を基準とする。そして、媒体、レジスターのことを本論文では便宜的に「ジャンル」と呼ぶことにする。

以上の手順で得られた BCCWJ における「から」と「ので」の検索結果から、「から」と「ので」複文の形態的な特徴に注目し、実際の使用傾向を基に両者の使い分けと用法を明らかにしていく。

以下の章では、BCCWJ を用いて検索した「から」と「ので」の出現例からさらに詳しい検索条件を加え、「から」「ので」の接続文体、前件末のモダリティ表現との接続、推量助動詞との共起を各章にわたって考察していく。

# 第 4 章　「から」「ので」と接続文体

## 4.1　はじめに

第 3 章で述べたように、「から」と「ので」は、前件と後件を原因結果の関係として結びつける接続助詞である。先に理由を述べ、後件に結果を述べる際に用いられる。その点から両者の機能において類似点が多く、置き換えが可能な場合が多い。しかし、その使用は必ず置き換えが可能なわけではなく曖昧、または不可能な場合もある。

このような「から」「ので」の使い分けの基準の一つとしてあげられているのは、「ので」の丁寧さによる待遇的な機能である。「から」にはない「ので」の特徴であるとされる待遇的な機能に関する議論は永野(1952)の言及から始まった。永野(1952)は、「ので」の性質について「主観を押し付けない」「丁寧なやわらかい表現」であり、それは対者的な待遇においての性質であるとしている。そのため、「ので」は客観的な表現の多い文章、対者的な配慮が見られる丁寧な文体をとる傾向があると述べている。つまり、「ので」と丁寧な文体との共起は「ので」の持つ待遇的特徴に起因するものであり、丁寧さは「から」「ので」の使い分けの基準のひとつとして影響を与えると考えられる。

そこで、本章では BCCWJ の出版サブコーパスの「新聞」「雑誌」と非母集団サブコーパスの「Yahoo!知恵袋」「Yahoo!ブログ」の 4 つのジャンルを対象に「から」「ので」複文の文体を調査する。「ので」の接続文体は普通体より丁寧体のほうが選好される傾向があるかについて「から」の接続文体と比較を行い、その原因には「ので」の待遇的な性質による影響があるかを考察する。

## 4.2.　背景と目的

### 4.2.1　背景

永野(1952)は、「ので」に比べて「から」のほうが拒否の態度が強く感じられると述べており、一般的に丁寧体の場合には「ので」のほうを多く使うとして

いる。例えば、(1a)が拒否の態度が強く感じられ、断る根拠を「から」によって強くきわ立たせている一方で、「ので」は角の立たないニュアンスであるため、(1a)より(1b)のほうが丁重に感じられると述べている。

(1) a. 聞いておりませんから、わかりかねます。
b. 聞いておりませんので、わかりかねます。

(永野 1952, p. 40)

また、尾方(1993)は丁寧さに対する「から」と「ので」の相違点について次のような例をあげて説明している。

(2) a. 今日はクラス会があるので、早退させて下さい。
b. 大変危険ですので窓から手をださないで下さい。

(尾方 1993, p. 859)

尾方(1993)は、(2)のように聞き手に対して自己の正当性をあまり強く主張したくないという待遇的事情を考慮する場合には「ので」を用い、その後件は丁寧体の表現になることが多いと述べている。

さらに、日本語記述文法研究会編(2008)は「ので」のほうが丁寧な文とよくなじむとしている。

(3) a. 危険なので、お手を触れないでください。
b. 危ないから、あっちへ行け。

(4) a. 用事がありますので、先に帰ります。
b. 忙しいから、帰るよ。

(日本語記述文法研究会編 2008, p. 126)

日本語記述文法研究会編(2008)は(3)(4)のように主節が行為要求や意志・希

望を表す場合、丁寧な文体では「ので」が現れやすく、ぞんざいな表現では「から」が現れると述べている。

このほかにも、今尾(1991)は相手に対する働きかけの強さや丁寧度が「ので」の選択に関与していることは確かであると述べ、益岡(2000)は「です」「ます」という「丁寧さ」を表す機能を含んでいることが「ので」節の一つの特徴であるとした。

一方で、「から」「ので」の接続文体について BCCWJ を用いた研究も行われており、宮内他(2009)はその 1 つである。宮内他(2009)は、「から」「ので」を含む接続表現形式の BCCWJ のジャンルごとの出現傾向をもとに、個々の接続表現形式の特徴をとらえた研究である。BCCWJ の「白書」「新聞」「書籍(文学以外)」「書籍(文学)」「Yahoo!知恵袋」において 11 種類の接続表現形式の使用傾向を調べた結果、「ので」は専門性が高いと考えられる白書や新聞ではほとんど用いられないが、丁寧で対者的な配慮が見られる「Yahoo!知恵袋」では多用されていることを明らかにした。その調査結果から、「ので」は対者的な配慮という点で話し言葉的な性質が強いと述べている。

しかし、宮内他(2009)は大規模コーパスを用い、「から」「ので」の相違点について定量的な観点から考察していることは高く評価できる部分ではあるが、「から」「ので」が持つ本来の機能より、BCCWJ のジャンル的な性質をより重視して両者の相違点を考察している。そのため、「ので」の丁寧さという性質は「ので」の機能の 1 つとして認めることができるかについては明確に言及されていない。

以上、「から」「ので」と共起する接続文体に関する先行研究を概観した。上記に述べた先行研究に共通しているのは、「ので」には待遇的な機能があり、その機能に起因して丁寧な文体には「ので」が共起されやすい一方で、強い言い方のニュアンスである「から」はぞんざいな文体によく用いられるという主張である。このような主張から、本章では「から」「ので」と共起する接続文体を調査し、「ので」の待遇的な機能に起因する丁寧体との共起傾向は実際の使用にも当てはまるかを検証する。また、「ので」の待遇的な機能は「から」「ので」の接続文体と関連があるかを考察し、両者の使い分けに影響を与えてい

るかを明らかにする。

### 4.2.2　目的

本章は、接続助詞「から」と「ので」と最も共起する接続文体を検証し、「ので」が持つとされる待遇的な機能が両者の使い分けに影響を及ぼすのかを明らかにすることが目的である。「ので」の持つ待遇的な機能が接続文体と関連があり、そのために両者の接続文体に異なる傾向が現れるのであれば、接続文体は「から」「ので」を使い分ける一つの基準になり得ると考えられる。

前節で概観した先行研究の主張は以下のようにまとめられる。(5)のような丁寧体の場合は、(5a)の「から」より(5b)の「ので」のほうが丁重に感じられるため多用されることになる。また、それとは逆に(6)のような普通体の場合は、(6b)の「ので」より(6a)の「から」のほうがよく用いられる。

(5)　a. 用事がありますから、5 時に出かけてきます。
　　b. 用事がありますので、5 時に出かけてきます。

(6)　a. 用事があるから、5 時に出かけてくる。
　　b. 用事があるので、5 時に出かけてくる。

さらに、「から」を用いた表現は強い口調のようなニュアンスになるため、(5a)や(6a)は相手に理由を押し付けるようなことになる。話し手は使用場面と聞き手を考慮し、丁寧体と普通体に文体を分け、「から」と「ので」を使い分けている。その結果、「ので」は丁寧体とよくなじむ一方で、「から」は普通体と共起されやすいということになる。

しかし、「ので」は待遇的な機能による丁寧体との使用がよく見られる他にも、(6b)のような普通体と共起する文も実際の使用において違和感なく使われている。また、(5a)の丁寧体と「から」の共起についても実際の使用において用いられ得る。それにも関わらず、先行研究では「ので」と丁寧体との共起のみが注目されており、「から」「ので」の接続文体の全般傾向についてはほと

んど言及されてない。そのため、日本語初級教科書などでは両者の接続文体について「から＋普通体」、「ので＋丁寧体」が固定的な接続文体であるかのように記述されている（小西 2010, p.132）。これの原因として、「から」「ので」の接続文体に関する客観的な使用傾向が調査されていないために「ので」の待遇的な機能に起因する丁寧体との共起のみが優先されてしまうことが考えられる。

このようなことから、本章では実際の使用における「から」「ので」はどのような接続文体と主に共起するかを BCCWJ を用いて検証する。両者の最も典型的な接続文体を明らかにし、その接続文体における「から」「ので」の使い分けと相違点を考察する。

そこで、本章では「から」「ので」の使い分けと文体との関係に関する以下の 4 つの予測を立てる。

第一に、「ので」の待遇的な機能と接続文体に関連があるのであれば、丁寧体である文の場合、「から」に比べて「ので」の使用が多いと予想される。つまり、以下に示した(7a)に比べて(7b)のような丁寧体と接続している文の出現頻度が高い。

(7) a. 寒いですから、熱いコーヒーを飲んでいます。
b. 寒いですので、熱いコーヒーを飲んでいます。

第二に、普通体である文の場合、「ので」より「から」との共起が多いと考えられる。つまり、前・後件が普通体の文では(8a)のような文のほうが(8b)よりも多用される。

(8) a. 寒いから、熱いコーヒーを飲んでいる。
b. 寒いので、熱いコーヒーを飲んでいる。

第三に、もし、「ので」の機能の拡張であるとされる待遇的な性質と接続文体との間に関連がないのであれば、「から」「ので」は本来の接続形式と最も共

起すると考えられる。横森・下村(1989)によれば、「普通体/丁寧体＋から」、「普通体＋ので」のような文体が両者の典型的な接続文体である。このことから、「ので」の待遇的な機能と接続文体が関連しないのであれば、上記のような文体の出現数が多いと予測する。

第四に、接続文体が「ので」の待遇的な機能に影響されない場合、使用されるジャンルの特徴に適合する接続文体が用いられると予想される。山崎(2011)によると、「新聞」「雑誌」は文字数や紙幅の制約がある一方で、「Yahoo!知恵袋」「Yahoo!ブログ」は比較的自由な言語使用が可能でユーザー同士でやり取りが可能であることが特徴である。このことから、「新聞」「雑誌」では「普通体　から、普通体」が選好される一方で、「Yahoo!知恵袋」「Yahoo!ブログ」では「丁寧体　ので、丁寧体」のような文体の使用が多いと考えられる。

以下ではこれらの予測について大規模日本語コーパスを用いて検証し、「ので」の待遇的機能は接続文体に影響を与えており、「から」「ので」の使い分けの基準の一つとすることが有意義であるという結論が得られることを論じる。

## 4.3　調査の概要

### 4.3.1　調査対象

本章の調査対象は BCCWJ の「新聞」「雑誌」と「Yahoo!知恵袋」「Yahoo!ブログ」の 4 つのジャンルである。各ジャンルの詳細は 3.1.3 節に述べた通りである。

BCCWJ の出版サブコーパスには 2001 年から 2005 年の間に日本国内で発行された「書籍」、「雑誌」、「新聞」が含まれている(山崎 2011, pp.14-15)。

「新聞」「雑誌」は、BCCWJ の出版サブコーパスに、「Yahoo!知恵袋」「Yahoo!ブログ」は、特定目的サブコーパスという異なる性質を持つジャンルにそれぞれ属されている。「新聞」「雑誌」は公的で言語使用における制約が統制的であり、校閲・校正があるジャンルであるのに対し、「Yahoo!知恵袋」「Yahoo!ブログ」のようなウェブ上のコンテンツは比較的私的な要素を持っており、

言語使用においては比較的自由なジャンルである。

このようなジャンル的性質の相違点から、これらのジャンルでは多様な使用場面と文体が用いられており、「から」「ので」と使用文体を観察するのに適合していると判断し、本章の調査対象として「新聞」「雑誌」「Yahoo!知恵袋」「Yahoo!ブログ」の 4 ジャンルを選定した。

調査の対象とした接続文体は、蓮沼・有田・前田(2001)の文体の丁寧度を参考にし、作成した。蓮沼・有田・前田(2001)によれば、後件が丁寧体である場合の前件の丁寧度は(9)のようである。

(9) かけこみ乗車は a. 危険ダカラ やめましょう。 (低)
b. 危険ナノで (中)
c. 危険デスカラ (中)
d. 危険デスノデ (高)

(蓮沼・有田・前田 2001, p. 110)

(9)の文の場合、丁寧度は「普通体＋から」が最も低く、「丁寧体＋ので」が最も高い。このことから、「から」と「ので」が接続される普通体と丁寧体を前件と後件に組み合わせた場合、想定できる以下の 4 つの文体を本章の調査対象とする。

(10) a. 丁寧体　から/ので、丁寧体 (丁　から/ので　丁)
例) 今日は寒いですから/ので、手袋が必要です。

b. 普通体　から/ので、丁寧体 (普　から/ので　丁)
例) 今日は寒いから/ので、手袋が必要です。

c. 丁寧体　から/ので、普通体 (丁　から/ので　普)
例) 今日は寒いですから/ので、手袋が必要だ。

d. 普通体　から/ので、普通体 (普　から/ので　普)

例) 今日は寒いから/ので、手袋が必要だ。

(10)に示した各文体は(9)の丁寧度を参考にすると、(10a)が最も丁寧な文体であり、(10d)が最もぞんざいな文体になる。この中で(10c)の「丁寧体　から/ので、普通体」のような文体は、実際の使用上の許容度が低い文であると考えられるが、BCCWJ の四つのジャンルにおけるの全数調査を行うことから除外としない。3.2.2 節の表 3-2 に示した「新聞」「雑誌」「Yahoo!知恵袋」「Yahoo!ブログ」の 4 つのジャンルに対し、上記の(10)に指定した「から」「ので」の 4 つの文体の使用傾向を調査する。具体的な調査方法は次節で述べる。

### 4.3.2　調査方法

本調査では、「から」「ので」と文体との関連を調査するために、検索ツール「中納言」の長単位検索を用いて「から」と「ので」をキーワードとし、全数調査を行った。その結果から、以下の通りの前方共起の条件を指定した。次に示す表 4-1 は、丁寧体と普通体についての詳細をまとめたものである。

表 4-1　「丁寧体」と「普通体」の詳細

| 文体 | 種類 |
|---|---|
| 丁寧体 | 「です」「でした」「でしょう」<br>「ます」「ました」「ません」 |
| 普通体 | 「コピュラ(だ)」「形容詞(～い)」「形状詞(～な)[13]」<br>「動詞終止形」「助動詞[14]」 |

[13] 学校文法では「形容動詞」、日本語教育では「ナ形容詞」と称するが、本研究では BCCWJ の品詞分類に従う。

[14] 検索ツール「中納言」で指定可能なの品詞分類の中から「ない」「らしい」「みたい」「だろう」「たい」「まい」「ん」「や」の助動詞を調査対象とした。

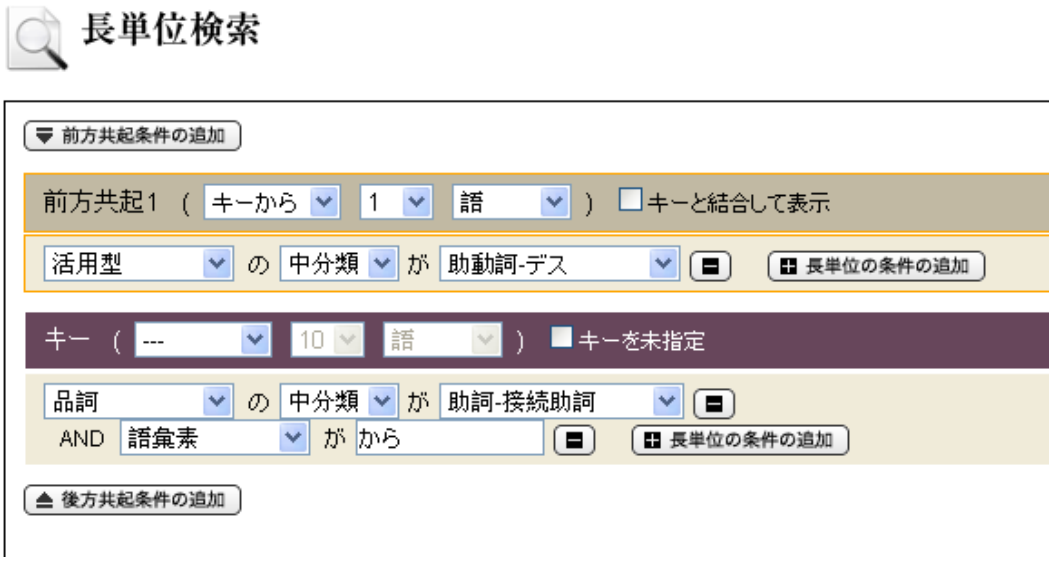


図 4-1. 「中納言」の検索例(一部分)

本章では、表 4-1 に示した各活用形を用い、「丁寧体」と「普通体」を分け、前方共起の条件を各活用形に指定し、形式ごとに検索を行った。この検索条件を「中納言」に適用した場合の実例を図 4-1 に示す。

図 4-1 のように「中納言」の前方共起条件を指定し、「から」「ので」の KWIC データを収集した。その結果から目視による確認作業を行い、丁寧体と普通体と共起している「から」「ので」の複文のみを整理し、本章のデータとした。次節では、以上の検索手順から得られた検索結果を述べる。

### 4.3.3 調査結果

表 4-2 は 4.3.1 節の(9)で示した 4 つの文体を調べた結果をまとめたものである。各文体の全体的な使用傾向を観察するために総出現数と、その詳細を示した。

前節で述べた丁寧体の各活用形、普通体の各終止形とその他の「助動詞」の出現数を前件と後件の文体形式にまとめて表示した。

表 4-2　「から」「ので」の文体ごとの出現件数と調整頻度

| 文形式 / ジャンル | 丁 | 丁 | 普 | 丁 | 丁 | 普 | 普 | 普 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | から | ので | から | ので | から | ので | から | ので |
| 新聞 | 11 | **13** | 20 | **99** | **3** | 0 | 204 | **288** |
| (638) | (17.24) | **(20.38)** | (31.35) | **(155.17)** | **(4.70)** | (0.00) | (319.75) | **(451.41)** |
| 雑誌 | **448** | 187 | 480 | **1470** | **102*** | 11 | 1911 | **2626** |
| (7235) | **(61.92)** | (25.85) | (66.34) | **(203.18)** | **(14.10)** | (1.52) | (264.13) | **(362.96)** |
| 知恵袋 | 3383 | **5864** | 3863 | **26854** | 174 | **222** | **2447** | 2099 |
| (31891) | (75.34) | **(130.58)** | (86.02) | **(598)** | (3.87) | **(4.94)** | **(54.49)** | (46.74) |
| ブログ | 1092 | **2511** | 1610 | **13541** | 160 | **184** | 6315 | **6478** |
| (44906) | (34.24) | **(78.74)** | (50.48) | **(424.60)** | (5.02) | **(5.77)** | (198.02) | **(203.13)** |
| 出現総数 | 4934 | **8575** | 5973 | **41964** | **439** | 417 | 10877 | **11491** |
| | (188.7) | **(255.5)** | (234.2) | **(1381)** | **(27.7)** | (12.2) | (836.4) | **(1064.2)** |
| | $\chi^2(1)=981.34, p<.001$ | | $\chi^2(1)=27021.97, p<.001$ | | $\chi^2(1)=0.57, p<.05$ | | $\chi^2(1)=16.85, p<.001$ | |
| 割合(%) | 5.83 | **6.94** | 7.05 | **49.56** | **0.52** | 0.49 | 12.85 | **13.57** |

括弧の中は 1,000 件あたりの調整頻度を示す。

色付けした数字の*は $p<.05$、無標示は $p<.001$ の有意水準である。

検索結果には、「ので」の口語形である「んで」も調査し「ので」の結果に合わせて示し、出現数の下の括弧の中に出現数を 1,000 件あたりの調整頻度[15]に計算した数字を示した。

調整頻度を示した理由は、以下の通りである。3.2 節の表 3-2 から分かるように、対象ジャンルにおける「から」「ので」の総件数が異なっている。そのため、検索された実数、つまり粗頻度(raw frequency)の単純比較のみでは使用数の多少が正確に比較できないが、この調整頻度によって、母集団の規模が異なるジャンルにおいても検索件数の多少が正確に分析できる。調整頻度について、コーパスの研究では一般的に「100 万語あたり(per million word;

[15] 本論文で示す調整頻度は、石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠(2010)『言語研究のための統計入門』の付属ソフト CD を用いた結果であり、カイ二乗検定は、SPSS statistics, ver.16 を用いた結果である。

PMW)」が使用されるが、元のサイズを越えて基準値を設定することはデータが本来持つ情報量を過大解釈することにつながるため好ましくない(石川 2012, p. 115)ことから、本研究では基準値を 1,000 に設定した。さらに、「から」「ので」総出現数のカイ二乗検定結果を調整頻度の下に示した。

また、3.2.2 節に述べた通り、本研究では「語」を対象にするのではなく、複文を対象とするため「文」の数を数えている。したがって、本研究で示す単位は「件」であり、調整頻度の基準値は「1,000 件あたり」に設定する。

出現総数のセルには 4 つのジャンルにおける文体それぞれの出現件数を合わせて表示し、その下の割合のセルは 4 つのジャンルの「から」「ので」の総件数に対する割合を示した(総件数については 3.2 節の表 3-2 を参照)。検索結果から各文体における「から」「ので」の使用の多少を比較するためそれぞれ独立性検定を行った。その結果、出現件数が多いほうを太字に、そのうち有意差が観察されたものには色付けをして示した。

## 4.4 考察

### 4.4.1 文体の全体的傾向

表 4.1 に示した調査の結果から各文体の「から」と「ので」の使用傾向を観察する。

各ジャンルにおける総出現件数(粗頻度)が「から」より「ので」のほうが多いため、実際の出現数を比較するのではなく調整頻度を示し、カイ二乗検定の結果で多少を判断する。以下は調査結果の詳細である。

一番目に、4 つのジャンルから検索された「から」は総出現数 22,223 件、「ので」は総出現数 62,447 件で、「ので」のほうが 3 倍近く頻度が高く、その使用に有意差が観察された($\chi^2(3)=11509.07$, $p< .001$)。また、それぞれの文体における「から」と「ので」の使用の多少を比較した結果、3 つの文体において「から」より「ので」の使用が多かった(各カイ二乗検定結果は表 4-2 を参照)が、「丁寧体+普通体」でのみ「ので」より「から」のほうが多く使用された($\chi^2(1)=0.57$, $p<.05$)。

二番目に、「から」の使用に関して、「から」の使用が最も多い文体は、「普から、普」の文体であり、総出現数 10,877 件、1,000 件当たり 836.4 回使用された。これは、「から」が用いられた文体の中で圧倒的に多い使用が見られ、全体の 12.85%を占めている。一方で、最も使用が少ない「から」の文体は「丁から、普」で総出現数 439 件、1,000 件当たり 27.7 回の使用であった。

三番目に、「ので」の使用に関して、「ので」の使用頻度が最も高い文体は「普　ので、丁」であり、8 つの文形式において半数に近い 49.56%を占めている。一方で、「丁　ので、普」の文体は「ので」の使用が最も少なく、文形式全体の 0.49%の使用に留まる結果であった。

四番目に、両者の使用数が最も多い文体を比べると、「から」は「普　から、普」の文体に圧倒的に使用数が集中しているのに対し、「ので」は「普　ので、丁」と「普　ので、普」の 2 つの文体の使用が多く見られた。ここから、「ので」に比べて「から」が用いられる文体は固定化されていることが示唆される。

以上の調査結果から「から」「ので」と接続する文体について次のような全体的傾向が明らかになった。

先行研究による主張に基づき、「ので」は「から」に比べて丁寧体との共起が多いと予測した。これに関して BCCWJ の 4 つのジャンルを対象に調査した結果、「ので」は丁寧体のみならず普通体とも「から」に比べて共起が多く見られ、予測とは異なる結果が得られた。また、普通体の文においては「ので」に比べて「から」のほうが好まれると予測したが、「ので」の使用が多く使用され、この点に関しても予測と相反する結果となった。

調査結果から分かるように、「ので」が主に使用される文体は「普　ので、丁」と「普　ので、普」の文体である一方で、「から」は「普　から、普」の文体である。このような結果は、両者共に接続する前件末の文体に普通体が選好されていることを示しており、前件の文体が両者の使い分けに関与するとは言えない。

庵他(2000)によると、「から」「ので」は共に前件の接続文体において「普通体」と「丁寧体」と接続することができるが、「から」は後件が丁寧体である場合はその前件も丁寧体のほうがより自然である。しかし、「ので」の場合、後

件が丁寧体である場合であっても前件に普通体が違和感なく使え、前・後件が丁寧体であれば、より丁寧な表現になる(庵他 2000, pp. 210- 213)。つまり、「から」を用いて丁寧な表現をする場合は「丁　から、丁」、「ので」を用いる場合は「普　ので、丁」も自然であるが、「丁　ので、丁」がより丁寧な表現になる。本研究の調査では、前・後件が丁寧体である場合は「から」より「ので」のほうが選好されており(表 4-2 参照、$\chi^2(1)=981.34$, $p< .001$)、「普通体+丁寧体」の場合も「ので」のほうが選好されている($\chi^2(1)=27021.97$, $p<.001$)。このように丁寧体との共起において「丁寧体+丁寧体」の場合は「から」より「ので」のほうが多く用いられることは、従来の研究の通り「から」にはない「ので」の丁寧さが関連していることを示していると考えられる。

以上、BCCWJ の性質の異なるサブコーパスから 4 つのジャンルを対象に「から」「ので」複文の前・後件の接続文体を調査し、その出現頻度を比較し、全体的な傾向を考察した。次節では、各ジャンルにおける「から」と「ので」の使用傾向を考察する。

### 4.4.2　ジャンルとの関連

表 4-2 の結果から各ジャンルにおける「から」と「ので」の使用傾向を述べていく。

まず、「新聞」「雑誌」では「普　から、普」、「普　ので、普」「普　ので、丁」「普　から、丁」の順で使用頻度が高かった($p< .001$)。

一方で、使用数が最も少ない文体は「丁寧体+普通体」を除いて両ジャンルともに「丁寧体+丁寧体」である。「新聞」と「雑誌」は出版サブコーパスに属しており、紙面などの量的制限が強いジャンルであるため文を簡潔にまとめる必要がある。また、記事によっては自分の主観が介入しないように叙述する場合が多いため、このような文体が選好されると考えられる。

次に、特定目的サブコーパスに属する「Yahoo!知恵袋」と「Yahoo!ブログ」の文体使用は両者の間で異なる傾向が観察された。「Yahoo!知恵袋」では「普ので、丁」の文体が最も使用され、全体の 60%を占めている。それに対し、「Yahoo!ブログ」では「普　ので、丁」「普　ので、普」「普　から、普」の 3 つの

文体がおよそ 60%を占めている。これは、宮内他(2009)が指摘した通り、「Yahoo!知恵袋」は、質問者が不特定のユーザーから必要な回答を得るために他者への配慮の見える丁寧な文体をとるためであると考えられる。一方、「Yahoo!ブログ」は不特定のユーザーに向けて発信することは同様であるが、相手からの返答を求めるものではない。むしろ、自身の近況や主観的なことを主な題材とし、相手に対する配慮は「Yahoo!知恵袋」ほど必要ではない。そのため、最もカジュアルな文体の使用が多く、「ので」より「から」を選好すると考えられる。

以上、各ジャンルの性質から「から」「ので」の共起文体を考察した。各ジャンルにおける「から」「ので」との接続文体の分布について、各ジャンルにおける割合を基準に棒グラフ化したものを次の図 4-2 に示す。

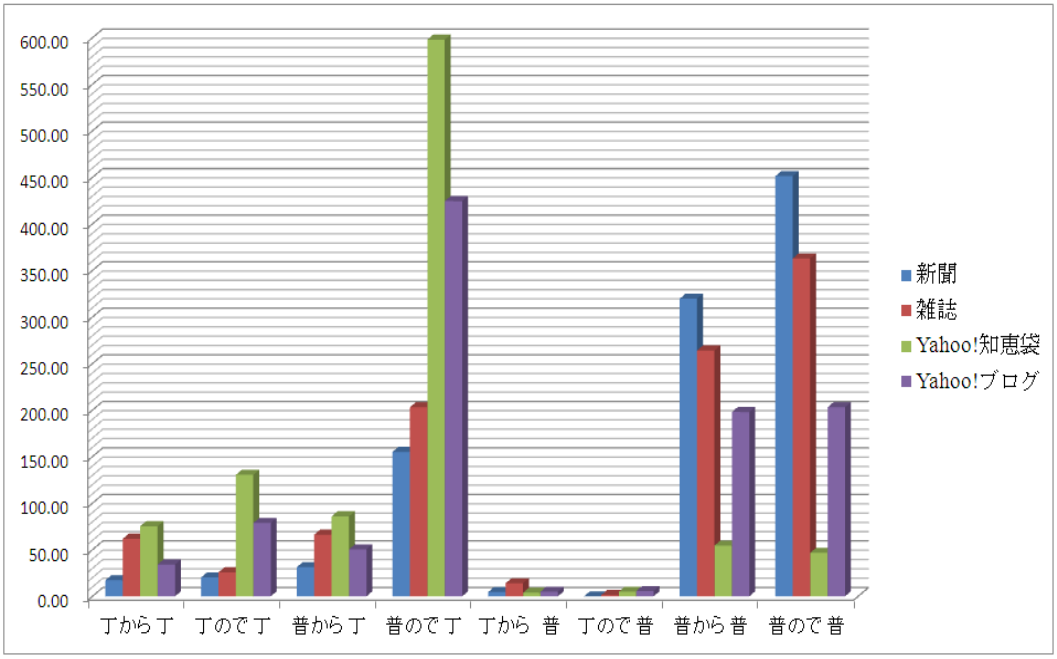


図 4-2　4 つのジャンルにおける文体の使用分布

図 4-2 から、「新聞」「雑誌」において「から」「ので」の使用文体はほぼ同一分布であるが、「Yahoo!知恵袋」と「Yahoo!ブログ」の間では異なる傾向であることが分かる。その原因として、サブコーパスの性質に応じて、書き手もしくは発信者の目的によって相手に対する配慮が必要な「Yahoo!知恵袋」では「普ので、丁」の文体が最も多く使用され、相手への配慮を考慮に入れない「Yahoo!ブログ」では「普　ので、丁」「普　から/ので、普」の 3 つの文体が用いられることが考えられる。

このようなことから「ので」は丁寧さ、待遇的な性質を一つの機能として持っていることは確かであり、その機能により各ジャンルにおける使用文体が決まると考えられる。つまり、書き手、話者、もしくは発信者の目的に符合する文体と主観的な感情による「から」「ので」の使い分けであると考えられる。

次節では、「から」と「ので」の各々の使用場面について詳しく考察していく。

### 4.4.3 「ので」の接続文体と使用傾向

本章の調査から「ので」は、丁寧体のみならず普通体とも「から」より選好される傾向があることが明らかになった。本章の調査における「ので」の使用は全体の 70.56%を占める割合で、「から」より使用頻度が高かった。以下では、「ので」が用いられる各文体の使用場面を考察していく。

使用頻度が最も高い「普通体＋ので」の文体は、全体の 63%を占める割合で使用されている。この結果は、前原・菊池(2005)が提案する日本語初級教育における「plain form＋ので」の先行指導という考え方を支持する結果となった。この結果から前件に関しては「普通体＋ので」が典型的な接続文体であると言える。さらに、「ので」の後件に関しては「ので＋普通体」より「ので＋丁寧体」の使用が多く観察された。

上記のことから、「ので」の前件は「普通体」が、後件には「丁寧体」が主に使用されており、「普通体　ので、丁寧体」が「ので」の主な接続文体であると言える。(11)はその実例である。

(11)　a. 絶対まだ間に合うと思うので、諦めずにアタックあるのみです！

(OC09_06173)[16]

b. 私にとっては、非常に常識から外れた、行動だったので、呆れてしまいました。

(OC11_00533)

(11a-b)の前件は話し手の自身の考えを根拠にし、自身の決意、感想を表す後件に結び付け、文全体において個人的な考えを話し手の観点から述べている。その際、後件における自身の考えや主張によって相手に負担をかけないよう、和らいだ話し方として「から」より「ので」を選択していると考えられる。話し手による感情的な判断である前件に応じて後件が現れ、前件と後件の結びつきが強いと言える。言い換えると、「ので」は、前件での判断に起因してこそ起き得る後件を述べる文の場合に選好されると考えられる。

また、「普　ので、丁」の文体の前・後件末の詳細を観察すると、前件の普通体には「動詞終止形」、後件の丁寧体には「ます」の活用形が最も多く共起されている。中でも、後件には「-と思います。」「-しましょう。」「-をお勧めします。」のような請願する表現が「ので」と多く使われていた。相手に行動の勧誘や要求を表す文において「から」より「ので」を選好すると言える。つまり、「ので」は待遇的な性質を持っているゆえに行動の呼びかけをする場面において相手に押しつけるような印象を極力与えないよう、柔らかい伝え方が好まれる場合に用いられると考えられる。このようなことから、「ので」の待遇的な機能は文体との関連があることが認められ、使用される場面によって「から」と「ので」の使い分けに関与すると言える。

さらに、「ので」の使用頻度が二番目に高い「普通体+普通体」の文体につい

[16] 括弧内の数字は BCCWJ のサンプル ID を示す。最初の 2 文字はジャンル(PN: 新聞、PM: 雑誌、OC: Yahoo!知恵袋、OY: Yahoo!ブログ)を表し、その横の数字は BCCWJ におけるデータ番号である。

て、「Yahoo!知恵袋」における「ので」と「から」の使用数が僅差であったため独立性検定を行い、その有意性を検証した。その結果、「Yahoo!知恵袋」における「普　から、普」と「普　ので、普」の文体の間で有意差が観察されなかった($\chi^2(1)= .485$, $p= .486$, ns)。これについて、「Yahoo!知恵袋」の実例を観察すると、主に質問する側が「ので」を用い、返答をする側が「から」を用いる傾向があることが原因として考えられる。そして、「Yahoo!ブログ」における「普から、普」と「普　ので、普」の文体の使用頻度にも有意差が見られなかった($\chi^2(1)= .062$, $p=.803$, ns)。両ジャンルにおける「普通体+普通体」の使用は自身の感情や周辺の事柄を述べる私的な内容が多いジャンルであり、(12)のように書き手がある情報の提供を目的とする読者、もしくは読み手を想定し、親しみのある書き方をしている場合、「ので」を用いる傾向があると言える。

(12)　ウニ味噌ラーメン因みに、ラーメンの好き嫌いは個人差が激しいので、あまり参考にしないでねー

(OY03_04821)

以上、BCCWJ の 4 つのジャンルにおける「ので」の使用傾向を検討した。「ので」は、普通体や丁寧体に拘らず「から」より多く使用され、多様な場面においてより広いフレキシブルな使い方が可能であることが分かった。また、「ので」の丁寧さ、待遇的な機能が作用し、「から」「ので」と接続文体の選択に関与している。「ので」の使用には話者もしくは書き手の意志、意向など個人的な考えを伝達するという使用場面が重視されており、その際に相手に負担をかけない、自身の主張を相手に強く押し付ける必要がない場合に選好される考えられる。

#### 4.4.4 「から」の接続文体と使用傾向

4.3.3 節に示した表 4-1 の通り、「から」が用いられる文体は全体の 26.24%を占めており、各文体における「ので」の使用に比べて少ない頻度である。「から」が使用される文体の中で最も使用頻度が多い文体は「普通体＋普通体」

であり、10,877 件、1,000 件あたり 836.4 回使われ、全体の 12.85%を占めている。二番目に使用が多い文体は、「普通体＋丁寧体」であり、5,973 件、1,000 件あたり 234.2 回使用され、全体の 7.05%を占める。「から」は「普通体＋普通体」の使用が「普通体＋丁寧体」の 2 倍以上に達しており、「から」は主に「普通体　から、普通体」のような形式で使用されると言える。このような調査結果は、接続助詞「から」は丁寧体より普通体と共起が多いという予測と合致する結果となり、「から」の使用は待遇的な機能を持っていないため丁寧体より普通体と共起されやすく、「ので」と異なる傾向を持つことを示す。以下に普通体との共起がもっとも多くみられた「Yahoo!ブログ」における「から」の使用例をあげる。

(13)　今年も上野公園とかで集まるのかな。非常に混むから場所がないんだよな。

(OY03_10404)

(13)の「今頃上野公園は非常に込む」ように「から」は、後件についての説明や根拠の提示を表す前件の場合に主に使用されると考えられる。

また、前件が普通体である「から」の使用例の中で、コピュラ形式との接続がもっとも多かったことから、「から」は話し手の判断を要しない、説明が必要でない事柄を述べる場合に好まれると考えられる。

そして、調査対象のほとんどの文体において「から」よりも「ので」の使用が多い中で、「雑誌」における「丁　から、丁」の形式は「ので」の使用を上回っている。「雑誌」における「丁　から、丁」の使用は 448 件、1,000 件あたり 61.92 回使用され、「丁　ので、丁」より 2 倍ほど使用頻度が高かった($\chi^2(1)=14.727$, $p<.001$)。

一方、「雑誌」における「丁　から、丁」は、主にインタービューなどで話された「です」「ます」の文末形をそのまま用いられる場合が多く観察され、「～ですから、～です/ます。」の文形式が最も多かった。これに比べて「ので」の使用は「～ますので、～て下さい/しましょう。」のような文形式が多く見ら

れた。「雑誌」は、「新聞」と同じサブコーパスであり、相互のコミュニケーションではなく一方的な情報発信であり、待遇的な機能をそれほど要しないジャンルであるため「から」の使用が多いと考えられる。

さらに、両者の使用頻度がもっとも少ない文体は実際の使用上において許容度が低いと言える「丁寧体＋普通体」である。この文体について、本研究の調査ではその使用が 0 ではない。「から」は 439 件、「ので」は 417 件の使用があった。これは調査対象である各ジャンルの性質に起因する結果であると考えられる。公共的で校閲がある「新聞」「雑誌」と異なり、「Yahoo!ブログ」「Yahoo!知恵袋」は比較的自由な言語使用と私的な性質を持つジャンルであるため、使用上の許容度が低い文体であっても使用可能性が高いと考えられる。「Yahoo!ブログ」「Yahoo!知恵袋」では「から」に比べて「ので」のほうが接続されやすく、比較的自由な文体の使用が可能なためではないかと考えられる。

以上のように、接続助詞「から」は、4 つの調査対象ジャンルにおける使用割合が 26.24%を占め、もっとも使用される文体は「普　から、普」である。特に、「普　から、普」の文体において使用頻度が非常に高いことから、「から」には固定的な接続文体が存在することが明らかになった。さらに、「から」は前件末に、主にコピュラの使用を伴う例が多いことから、話し手の感情を排除した事実の伝達の文である場合に多用されると考えられる。また、確実であるとされる事柄に対し、感情的な説明が不要な場合にも「から」の使用が多いことが分かった。

## 4.5　まとめ

本章では、接続助詞「から」と「ので」の使い分けについて「ので」の独自の機能であるとされる丁寧さに注目し、接続文体の使用傾向を調べた。「から」と「ので」の相違点である丁寧さ、待遇的機能が両者に影響を与え、「から」「ので」を使い分けているかについて考察した。

「ので」が持つ待遇的機能は、「から」「ので」の使い分けと選好する接続文体と関連があるかを明らかにするために、BCCWJ の 4 つのジャンルを対象に

「から」「ので」の前・後件の接続文体の出現数と 1,000 件あたりの使用頻度を調べた。その調査結果から両者の接続文体に対する相違点について以下のようなことを明らかにした。

第一に、全体的な傾向は「ので」が「から」に比べて使用数と出現頻度が高い。具体的には、「丁寧体＋普通体」を除く 3 つの文体において「から」より「ので」の使用が多く、「ので」は丁寧体のみならず普通体との共起頻度も「から」に比べて高く、理由節の接続助詞として幅広く使用されていることが分かった。

第二に、「から」は「普　から、普」の文体が最も多用された。「から」の使用頻度は、他の 3 種の文体に比べ「普　から、普」の文体に大きく偏っており、この文体が「から」が使用される典型的な文体であることが明らかになった。

第三に、ジャンル別傾向について、調査した 4 つのジャンルにおいて「から」より「ので」のほうが多用されていることが分かった。出版サブコーパスの「新聞」「雑誌」では、「普　ので、普」が選好されるのに対し、特定目的サブコーパスの「Yahoo!知恵袋」「Yahoo!ブログ」は、「普　ので、丁」が主に使用されることが分かった。これは、公共的言語使用で書き方に制約がある「新聞」「雑誌」では「普　ので、普」が用いられ、WEB を通して書き手と読み手が直接やり取りすることが可能であるため丁重な表現をする必要がある「Yahoo!知恵袋」「Yahoo!ブログ」では「普　ので、丁」が主に使用されると考えられる。

第四に、コーパス調査の結果得られた用例を個別に考察した結果、「から」は感情的な付加説明が不要である場合やありのままの事実を話者の感情を排除して淡々と述べる場合に主に選好される一方で、「ので」は自身の意向や意志など個人的な考えを伝達する時に選好され、相手に押しつける印象を与えたくないときに主に用いられることが明らかになった。

以上のことから、次のように結論付けられる。「ので」は普通体、丁寧体とも幅広く使用されているが、特に「普通体＋丁寧体」の文形式が最も多用されている。このことから「ので」の持つ丁寧さ、待遇的な性質は「から」「ので」の使い分けに関与していると言える。一方で、「から」は「普通体＋普通体」という文体的な典型性を持ち、主に普通体と共起する。

# 第 5 章　モダリティ表現との共起関係

## 5.1　はじめに

本章では、「から」「ので」の使い分けに関する議論の中で中心的な論点になっている両者の「主観的」「客観的」な性質について論じる。

「から」「ので」の「主観/客観」に関する議論は、「から」「ので」が前件と後件を結び付ける際に、両者の間で異なる意味的結び方をすることに起因する。永野(1952)によれば、「から」は主観的に、「ので」は客観的に前件と後件を結びつける。この永野(1952)の主張以来、両者の相違点に関する議論が「から」「ので」の研究の中心になっているといっても過言ではない。

しかし、これまでに多くの研究が行われているにも関わらず、「から」「ので」の「主観/客観」の議論については、未だ明確な結論が出ていないのが実状である。その理由について岩崎(1995)は以下の 2 つの問題点を指摘している。

①主観/客観の現象問題：
前件・後件の結びつきが主観的/客観的というのはどういうことを意味するのかがはっきりされてないためノデ/カラに関するあらゆる現象がその特徴づけに帰されてしまうこと。

②主観/客観の区別問題：
主観的/客観的の区別の意味するところが漠然であるため拡大解釈でき、永野論文以降の研究の主観/客観の区別の代案の多くが主観/客観の概念の区別に還元されてしまうこと。

(岩崎 1995, pp. 509- 510)

以上のように、「主観/客観」の規定に関する曖昧さと、それによる「主観/客観」の本質的な区別の問題によって「から」「ので」の性質の議論は未だ一致されていない。

このような岩崎(1995)の指摘を踏まえ、本章では「から」「ので」の「主観/客観」の問題について従来とは異なる着眼点で論じる。その着眼点とは、前件末に用いられるモダリティ表現と「から」「ので」の共起関係である。

モダリティ表現は話者の心的態度を表す表現であり、様々なコミュニケーションの場において話者の判断によって適切な表現が選ばれ、使われる。言い換えると、話者が表現しようとする「依頼」「要請」「願望」などの意を、様々な条件を考慮し、多数の表現の中から最も適切な表現を見つけ出して使用することである。つまり、モダリティ表現は、表現者の発話時の意図を表す述べ方である。表現者の意図の述べ方、心的態度を表す表現には多様な種類があり、表現者のみに関わる表現であるか、それとも表現者とその相手、事態などに関わる表現であるかによって分類される。

本章では、モダリティの各表現を機能によってグループ化し、各表現が表す意図と「から」「ので」の「主観的/客観的」という議論と関連付けて考察する。「から」「ので」の使用に「主観的/客観的」という性質が作用するのであれば、主に共起されるモダリティ表現には両者の間で異なる使用傾向が現れると考えられる。

本章では、BCCWJ の出版サブコーパスの「書籍」を調査データとして、表現者の心的態度を表すモダリティ表現と「から」「ので」の共起様相から両者の「主観/客観」という性質について考察する。その結果から、「から」は後件の結果に対する前件の根拠が確実であると判断される場合に主に用いられる一方で、「ので」は話し手の個人的な考えを反映して前件と後件を結ぶ際に主に用いられることを主張する。

## 5.2 「から」「ので」と「主観/客観」

### 5.2.1 先行研究

「から」「ので」の「主観性/客観性」に関する議論の始発点となった永野(1952)は以下のように述べている。

「から」で結びつけられる前件・後件は元来二つのものであって、それが話し手の主観によって原因結果・理由帰結の関係で結び付られる。これに対して「ので」は事がらのうちにすでに因果関係にたつ前件・後件が含まれていて、ありのままに客観的に描写する場合に使われる。つまり、「から」は話し手の主観が充分の責任を持つという意味の一方で、「ので」は主観の責任がないということになる。

(永野 1952, pp. 37-38)

上記のように、永野(1952)は「から」は話し手の責任のもとで前件と後件を主観的な因果関係で結ぶのに対し、「ので」は客観的に結んでいるため話し手の責任が無いと述べている。以下の(1a)のような例をあげて、「ので」を「から」に置き換えると不自然な言い方になるか、「ので」よりもしっくりしない感じのものになると説明しており、ありのままの事実が原因であるために主観的な「から」とは相応しくないというのである。

(1) a. 山に近いので昼間はひどく暑いが、 (永野 1952, p. 36)
b. ?山に近いから昼間はひどく暑いが、 (筆者による改変)

つまり、(1)では、前件の「山に近い」という客観的な事実が原因となり、後件の「昼間はひどく暑い」という結果が生じているため、客観的に因果関係を捉える「ので」のほうが相応しいと考えられる。

この永野説による「から」「ので」と「主観/客観」との対応関係は、その根拠の妥当性について山田(1984)、趙(1988)による疑問が呈されたのをはじめ、主張において付け加えはあるものの概ね永野に同意する立場である森田(1989)や、「から」は中立的で「ので」は客観的であるとする今尾(1991)、尾方(1993)などによって活発に議論されてきた。

これらに対し、国広(1992)は永野説とは逆の考え方を示している。すなわち、「のだ」の意義素と語のスコープという概念を用いて、「ので」は命題を主観的に、「から」は客観的にとらえるものとしている。国広(1992)は、(2)の例

文について、(2a)は前件の内容を主観的に判断して、私は後件のように思うということを表しているのに対し、(2b)は後件が前件の帰結として生じることを客観的事実として提出し、そのことについてまったく疑いを抱いていないという含みが感じられると述べている。

(2)　a. 当地は海岸に近いので健康によい。
　　b. 当地は海岸に近いから健康によい。

(国広 1992, p.32)

永野(1952)の(1)と国広(1992)の(2)の前件は類似した事柄を原因にしているが、「から」「ので」に関する両者の判断は非常に異なる論理である。

以上のように「から」「ので」の「主観性/客観性」に関しては学者によってそれぞれ異なっており、「から」「ので」「主観/客観」の議論はまとまっていない。

### 5.2.2　目的

本章では、大規模日本語コーパスを用いる定量的な方法で「から」「ので」の使用様相を観察し、「から」「ので」の「主観/客観」の対応に関して再考する。具体的には、BCCWJ の出版サブコーパス「書籍」を対象にモダリティ表現と「から」「ので」の共起関係から考察を行う。

日本語文法におけるモダリティ表現とは、文の構造の 1 つの側面であり、客観的な事柄についての話し手(言語主体)の表現時の態度を表す文法形式であると広く同意されている。さらに、1.2 節にも述べた通り、伊藤(2005)はその話し手の態度を「陳述的側面」と言い、複文の前件にも適用されるとしている。

上記のことから、「から」「ので」を含む複文において前件に現れるモダリティ表現は、後件に結果を導く場合の話し手の態度を表す文の述べ方であり、文全体にも影響力があると考えられる。したがって、「から」「ので」が持つ「主観」「客観」に関する性質に応じて、前件に主に用いられるモダリティ表現形式との共起関係に相違点が存在すると考えられる。

そこで、本章では、「から」「ので」の「主観/客観」という性質について、「から」「ので」複文の前件に使用されるモダリティ形式の使用頻度を調査することで、従来とは異なる観点からの考察も可能であることを示す。

## 5.3　データの収集と分類

### 5.3.1　調査対象

本章では、「から」「ので」とモダリティ表現との共起関係について、BCCWJ の出版サブコーパスの「書籍」を対象に、検索ツール「中納言」を用いて調査した。

出版サブコーパスの「書籍」は書き言葉が生み出される出版の実態に着目したものであり、2001 年から 2005 年の間に国内で発行されたものが対象である(山崎 2011)。

「書籍」の性質に関して鄭他(2009)は、「書籍」に含まれている小説の会話文は近似的な音声言語と判断されるなどのことから、「書籍」は複数の要素が混在した広範囲のジャンルと捉えるのが妥当であるとしている。このようなことから、「書籍」は文字言語に近い類ではあるが、地の文と会話文が混ざっており、広範囲で多様な使用場面が存在していることが利点である。さらに、出版サブコーパスの「書籍」は図書館サブコーパスの「書籍」と共に BCCWJ の構成ジャンルの中で最も多い語数を占めており、BCCWJ の中核となるジャンルであると言える。そのため、「から」「ので」とモダリティ表現との共起関係を調べるのに十分なサンプル数と語数が確保できると判断し、本章の調査対象とした。

### 5.3.2　検索方法

出版サブコーパスの「書籍」を対象にし、「から」と「ので」をキーワードとして設定し、長単位検索で全数調査を行った。検索条件の詳細は 3.2 節に述べた通りである。

本調査では、出版サブコーパスの「書籍」のコア、非コアデータ[17]のすべてを対象としてKWICデータを収集し、目視による確認作業を行った。

本章におけるモダリティ表現については、モダリティ表現そのものの機能の相違や客観化を許すものとの区別を図るわけではないことを断っておく。また、本調査におけるモダリティ表現の詳細な機能は益岡(1991)、森山・安達(1996)、益岡・田窪(1992)に委ねることにする。

モダリティ表現の分類法については学者によって異なるが、本章では主に森山・安達(1996)による分類法を参考にしている。森山・安達(1996)は、表現者の意図に応じた様々なタイプの述べ方について、類似した表現を中心に次の 5 つのグループにまとめている。第 1 類は「条件」の表現、第 2 類は「不確かなことを表す」表現、第 3 類は「疑問」と「確認」を表す表現、第 4 類は「意志」の表現、第 5 類には「命令」の表現である。この中で、第 3 類の「疑問」と「確認」を表すの表現は主に疑問形の形式であるため複文の前件には用いられないことから本章の分類項目からは除外とする。

出版サブコーパスの「書籍」における「から」「ので」複文の総出現数から前件末にモダリティ表現が用いられた文を抽出した後、その結果から森山・安達(1996)による分類法を援用し、モダリティ表現のグループに分類した。

本調査は、「から」「ので」の前件末に共起するモダリティ表現は両者の間で相違点が存在することを想定し、そのモダリティ表現の使用傾向の相違から両者の「主観/客観」について考察を行うことが目的である。そのため、出版サブコーパスの「書籍」の全データに対して実数調査を行い、実際に使用されたモダリティ形式とその数をカウントしている。その結果には、漢字表記(と思っている)、かな表記(とおもっている)などを区別せず、同じ表現として扱い、合わせて表示した。

[17] コアデータとは、形態素解析システム等の学習用データとするため、自動形態素解析結果に人手修正を加え、99%以上の精度としたデータである。非コアデータは人手修正を加えてないデータである。

## 5.4　分析

### 5.4.1　「から」「ので」とモダリティ表現の共起形式と頻度

次のページに示す表 5-1 と表 5-2 は、BCCWJ の出版サブコーパス「書籍」において接続助詞として使われた「から」複文 14,307 件、「ので」複文 21,415 件の中から前件末にモダリティ表現が使用された文の出現数を最も多い順から示したものである。表 5-1 と表 5-2 には、出現数が 1 件のみである形式まで全て表示した。また、正確な出現件数を把握するために「しなければならばい」「しなければいけない」など類似している表現については出現数を合わせずそれぞれの出現数を示し、それを 1,000 件当たりに計算した調整頻度も示した。

表 5-1 から分かるように、出版サブコーパスの「書籍」に出現する「から」複文 14,307 件中、前件末にモダリティ表現が用いられた文は 1,219 件であった。「から」複文全体において「モダリティ表現＋から」の形式は 1,000 件あたり 85.20 回の頻度で用いられている。

一方、表 5-2 に見られるように「ので」は、「書籍」における「ので」複文 21,415 件中、モダリティ表現と共起される文は 914 件使われ、1,000 件当たり 42.68 回の出現頻度である。

「書籍」の中でモダリティ表現と共起される「から」は、「から」複文全体の 8.52%を占めるのに対し、「ので」は、「ので」複文全体の 4.26%を占める結果である。両者の総出現数を比較した結果から、前件末にモダリティ表現を伴う文の使用は、「ので」より「から」のほうが多いことが明らかになった($\chi^2(1)=43.612, p< .001$)。

表 5-1　「から」の前件末のモダリティ表現

| 「から」 | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 順番 | 表現 | 出現数 | 調整頻度 | 順番 | 表現 | 出現数 | 調整頻度 |
| 1 | わけだ | **366** | **300.25** | 24 | すればいい | **7** | **5.74** |
| 2 | だという | **147** | **120.59** | 25 | しなくてはならない | **6** | **4.92** |
| 3 | わけではない | **59** | **48.40** | 26 | してはいけない | **5** | **4.10** |
| 4 | たい | **58** | **47.58** | | と思われる | **5** | **4.10** |
| 5 | はずだ | **56** | **45.94** | | しそうにもない | **5** | **4.10** |
| 6 | ようだ | **47** | **38.56** | 27 | みたいだ | **4** | **3.28** |
| 7 | と思っている | **39** | **31.99** | 28 | しないといけない | **3** | **2.46** |
| 8 | そうだ(伝聞) | **36** | **29.53** | | しなくちゃいけない | **3** | **2.46** |
| 9 | と思う | **35** | **28.71** | | かもわからない | **3** | **2.46** |
| 10 | しそうだ | **34** | **27.89** | 29 | しかねない | **2** | **1.64** |
| 11 | しようとする | **32** | **26.25** | | に違いない | **2** | **1.64** |
| 12 | ということだ | **31** | **25.43** | | てほしい | **2** | **1.64** |
| 13 | することだ | **29** | **23.79** | 30 | するべきだ | **2** | **1.64** |
| 14 | してもいい | **28** | **22.97** | | するつもりはない | **1** | **1.09** |
| 15 | かもしれない | **27** | **22.15** | | しちゃいけない | **1** | **1.09** |
| 16 | たくない | **26** | **21.33** | | 方がいい | **1** | **1.09** |
| 17 | らしい | **18** | **14.77** | | しないつもりだ | **1** | **1.09** |
| 18 | しなくてもいい | **15** | **12.31** | | するべきではない | **1** | **1.09** |
| | しなければならない | **15** | **12.31** | | するほかない | **1** | **1.09** |
| 19 | って言う | **14** | **11.48** | | ってことだ | **1** | **1.09** |
| 20 | するといけない | **12** | **9.84** | | せざるをえない | **1** | **1.09** |
| 21 | するつもりだ | **11** | **9.02** | | とのことだ | **1** | **1.09** |
| 22 | わけにはいかない | **9** | **7.38** | | って思う | **1** | **1.09** |
| | しなければいけない | **9** | **7.38** | | てほしくない | **1** | **1.09** |
| 23 | せねばならない | **7** | **5.74** | | 総出現数 | **1,219** | **85.20** |

表 5-2 「ので」の前件末のモダリティ表現

| 「ので」 | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 順番 | 表現 | 出現数 | 調整頻度 | 順番 | 表現 | 出現数 | 調整頻度 |
| 1 | たい | **94** | **102.96** | 23 | せざるを得ない | **7** | **7.66** |
| 2 | と思う | **87** | **95.29** | | しないといけない | **7** | **7.66** |
| 3 | わけではない | **83** | **90.91** | | っていう | **7** | **7.66** |
| 4 | しなければならない | **82** | **89.81** | | してはいけない | **7** | **7.66** |
| 5 | しそうだ | **57** | **62.43** | 24 | するつもりだ | **6** | **6.56** |
| 6 | だという | **54** | **59.15** | 25 | するといけない | **5** | **5.47** |
| 7 | ようだ | **44** | **48.19** | | しなくてもいい | **5** | **5.47** |
| 8 | と思っている | **36** | **39.43** | | そうだ(伝聞) | **5** | **5.47** |
| 9 | しようとする | **35** | **38.34** | | とのことだ | **5** | **5.47** |
| 10 | たくない | **30** | **32.86** | | てほしい | **5** | **5.47** |
| 11 | と思われる | **29** | **31.76** | | しそうに(も)ない | **5** | **5.47** |
| 12 | わけにはいかない | **29** | **31.76** | | みたいだ | **5** | **5.47** |
| 13 | ということだ | **29** | **31.76** | 26 | 方がいい | **4** | **4.38** |
| 14 | すればいい | **23** | **25.19** | | に違いない | **4** | **4.38** |
| 15 | かもしれない | **23** | **25.19** | 27 | せねばならない | **2** | **2.19** |
| 16 | はずだ | **18** | **19.72** | 28 | しないとならない | **1** | **1.09** |
| 17 | することだ | **15** | **16.43** | | しなくちゃならない | **1** | **1.09** |
| 18 | らしい | **14** | **15.32** | | してはならない | **1** | **1.09** |
| 19 | しかねない | **11** | **12.04** | | するべきだ | **1** | **1.09** |
| 20 | してもいい | **10** | **10.94** | | するつもりはない | **1** | **1.09** |
| 21 | わけだ | **9** | **9.85** | | しない方がいい | **1** | **1.09** |
| 22 | しなければいけない | **8** | **8.75** | | したつもりだ | **1** | **1.09** |
| | しなくてはならない | **8** | **8.75** | 総出現数 | | **914** | **42.68** |

### 5.4.2　モダリティ表現を伴う「から」「ので」の使用傾向

表 5-1 と 5-2 からモダリティ表現形式の詳細を比較すると、「から」「ので」と共起するモダリティ表現には次のような相違点が見られた。

第一に、「ので」より「から」のほうが前件末においてモダリティ表現との共起数が多い。出版サブコーパスの「書籍」全体における理由節には、「ので」のほうが多く使用されるが、前件末にモダリティ表現を伴う形式は「ので」より「から」のほうが 2 倍ほどの頻度で多く使用されている。これは、「ので」に比べて「から」のほうが、単独で使用されるより他の形式を伴って使われやすいことを示唆する。その理由として、「から」は前件で述べる自身の主張を相手に押し付けるようなニュアンスがあるとされているため、モダリティ表現のような形式を用いることで押し付けるニュアンスを和らげると考えられる。

第二に、「から」「ので」と共起されたモダリティ表現を観察すると、「から」と最も共起頻度が高いモダリティ表現には「わけだ」、「だという」のように一般的に受け入れられている事柄や外からの情報を伝達する時に用いられる表現が多かった。それに対し、「ので」の場合は「たい」、「と思う」のように述べる事柄に対する話し手の個人的な考えや不確かなことを表す際に用いられる表現が多かった。

第三に、「から」の複文では上位の 3 つのモダリティ表現形式が全体の半数を占めており、使用されるモダリティ表現に偏りがあることが分かる。それに対し、「ので」は「から」に比べて上位の表現形式に偏重される傾向は見られない。このことから、「から」は主に選好使用されるモダリティ表現があるのに対し、「ので」は特定の表現を主に選好するのではないことが分かる。

第四に、「から」と主に共起されるモダリティ表現は、出現数が多い上位のものから観察すると、大きく 2 つのグループにまとめることができる。それは伝達を表す表現と不確かなことを表す表現のものである。一方で、「ので」は上位の表現のほとんどが自身の考え、願望を述べる話者中心の表現である。

以上のことから両者のモダリティ表現との共起には異なる様相があることが明らかになった。

以下では、表 5-1、5-2 の結果を各モダリティ表現の機能によって分類を行

う。モダリティ表現の機能の分類は益岡(1991)の「モダリティのカテゴリー」と森山・安達(1996)を参照にし、機能を大きくグループ化した。グループ化したモダリティ表現の各機能を中心に「から」「ので」が選好するモダリティ表現の全体的使用傾向を観察し、両者の相違点を考察する。

## 5.5　考察

### 5.5.1　機能別にみたモダリティ表現と「から」「ので」

次のページに示す表 5-3 は、「から」「ので」と共起するモダリティ表現を機能別にグループ化したものである。

表 5-3 では、5.4.1 節で示した表 5-1 と 5-2 のモダリティ共起形式を機能によって分類し、同じグループに属する表現の出現件数をまとめて表示した。また、出現件数の下の括弧の中には「から」「ので」のそれぞれの総出現件数である 1,219 件と 914 件において、各グループが占める割合を表示した。表 5-3 の第 3 類に属するものは複文の前件には接続され難いため、本調査では対象外とした。さらに、森山･安達(1996)では「たい」「たくない」について言及はなかったが、加藤(2006)では希求を表すモダリティ助動詞として分類してあるため第 4 類に含めた。

表 5-3 の分類を観察すると、「から」は「ので」に比べ、前件にモダリティ表現を用いる頻度が高く、「から」との共起頻度が高いモダリティ表現形式は出来事の確からしさを述べる「伝え聞き」の表現形式(第 2 類)である。中でも、「わけだ」、「という」、「そうだ」などの表現は、モダリティ表現と共起している「から」全体の半数を占める 53.69%の割合で用いられている。これは「わけだから」、「というから」、「そうだから」のように、前件の事柄、もしくは命題がある確かな情報源から得られたものであることを説明する場合に、「わけだ」、「という」、「そうだ」などのモダリティ表現で限定した後、その事柄について話し手の主観を交えずに後件の帰結に連結する際に「ので」より「から」が選好されることを示している。

表 5-3　機能別モダリティ表現の「から」「ので」選好傾向

| 区分 | 機能 | 分類 | 共起表現 | 「から」 | 「ので」 |
|---|---|---|---|---|---|
| 第1類 | 動きに対する評価 | 必要 | しなければらない　しなければいけない　しないとならない<br>しないといけない　せねばならないし<br>なくちゃならない　しなくちゃいけない　しなくてはならない | 43<br>(3.53%) | **109<br>(11.94%)** |
| | | 許可 | してもいい　しなくてもいい<br>方がいい　すればいい<br>しない方がいい | 51<br>(4.18%) | 43<br>(4.71%) |
| | | 義務 | するべきだ　するべきではない<br>することだ　せざるをえない<br>するほかない | 33<br>(2.71%) | 23<br>(2.52%) |
| | | 禁止<br>望ましくない | わけにはいかない　してはいけない<br>してはならない　するといけない<br>しちゃいけない | 27<br>(2.21%) | **42<br>(4.60%)** |
| 第2類 | 出来事の確からしさ | 不確かなこと | かもしれない　かもわからない<br>と思う　しかねない　に違いないって思う　と思われる<br>と思っている | 114<br>(9.35%) | **190<br>(20.81%)** |
| | | 状況からの判断 | はずだ　ようだ　みたいだ<br>らしい　しそうだ<br>しそうに(も)ない　しそうではない | 164<br>(13.45%) | 143<br>(15.66%) |
| | | 伝え聞き確実 | わけだ　わけである　わけではない<br>だという　っていう　ということだ<br>とのことだ　ってことだ<br>そうだ(伝聞) | **655<br>(53.69%)** | 192<br>(20.92%) |
| 第3類 | 疑問/確認 | 尋ねる/疑う | だろう?、のか、もんか、じゃないか、でしょう? | | |
| | | 確認 | 終助詞、ね、よね、じゃないか、でしょうなど | | |
| 第4類 | 意志/勧め | 話し手の意志的な動作 | しようとする　つもりだ(意志)<br>つもりはない　しないつもりだ<br>したつもりだ(主語の考え、思い込み) | 45<br>(3.69%) | 43<br>(4.71%) |
| | | 話し手の希望 | たい　たくない | 84<br>(6.89%) | **124<br>(13.58%)** |
| 第5類 | 依頼/命令 | 聞き手の行動を要求 | てほしい　てほしくない | 3<br>(0.25) | 5<br>(0.55) |
| 総出現数(件) | | | | **1,219<br>(57.1%)** | **914<br>(42.9%)** |

また、益岡(1991)で言う「価値判断モダリティ」に属する「許可」「義務」(共に第 1 類)の表現では、「から」と「ので」の間で有意な差は観察されなかった($\chi^2(1)= .281$, $p= .596$, ns; $\chi^2(1)= .077$, $p= .782$, ns)。「許可」「義務」に関するモダリティ表現は、一般的に許容される範囲の中で望ましいことや必要だと認められることへの許可と義務の意を表しており、それに対する後件には前件から考えて当然な帰結や必要性を表す事柄がつながる。そのような際に「から」と「ので」が使われると、両者は前件と後件との妥当性をより強調する役割をすると考えられる。

一方で、「ので」は特定のモダリティ表現に偏らず、多様な表現と共起している。これは「から」より「ので」のほうが多様な場面と話し方に包括的に対応できる機能を持っているためと考えられる。

### 5.5.2　モダリティ表現と「から」「ので」の共起使用傾向

モダリティ表現と「から」「ので」の共起形式の中でどの形式が有意に多く用いられるかを調べるために調整済み残差を比較し、その結果を表 5-4 にまとめた。

残差分析とは、クロス集計表においてカイ二乗検定の結果が有意であった場合に、どのセルがこの有意性に貢献したのかを判定するものである。
観測値が期待値に比べて有意に大きいか小さいかを判定するものであり、絶対値が 1.96 以上であれば有意に貢献していると言える[18]。

表 5-4 の結果から、BCCWJ の出版サブコーパス「書籍」において各モダリティ表現は「から」「ので」の選択と関連があると言える($\chi^2(9)= 278.228$, $p< .001$)。この結果から、共起する形式が多様である「ので」に着目し、グループにまとめると、「必要」「不確実」「希望」「禁止」、「状況判断」「意志」「行動要求」「許可」、「伝え聞き」「義務」の 3 つのグループに分けられる。

[18] 一般的に調整済み残差は 1.96(2.0)の基準では 5%水準で有意であることを示し、2.57(2.6)の基準では 1%水準で有意であることを示す。

表 5-4　モダリティ表現と「から」「ので」の使用詳細

| 分類 / 機能 | から | ので | 合計 | 調整済み残差 | |
|---|---|---|---|---|---|
| | 1,000 件当たり調整頻度 | | | から | ので |
| 必要 | 43<br>(35.27) | **109**<br>**(119.26)** | 152<br>(154.5) | -7.5 | **7.5** |
| 許可 | 51<br>(41.84) | 43<br>(47.05) | 94<br>(88.9) | -0.6 | 0.6 |
| 義務 | 33<br>(27.07) | 23<br>(25.16) | 56<br>(52.2) | 0.3 | -0.3 |
| 禁止 | 27<br>(22.15) | **42**<br>**(45.95)** | 69<br>(68.1) | -3.1 | **3.1** |
| 不確実 | 114<br>(93.52) | **190**<br>**(207.88)** | 304<br>(301.4) | -7.5 | **7.5** |
| 状況判断 | 164<br>(134.54) | 143<br>(156.46) | 307<br>(291) | -1.4 | 1.4 |
| 伝え聞き | **655**<br>**(537.33)** | 192<br>(210.07) | 847<br>(747.4) | **15.3** | -15.3 |
| 意志 | 45<br>(36.92) | 43<br>(47.05) | 88<br>(84) | -1.2 | 1.2 |
| 希望 | 84<br>(68.91) | **124**<br>**(135.67)** | 208<br>(204.6) | -5.1 | **5.1** |
| 行動要求 | 3<br>(2.46) | 5<br>(5.47) | 8<br>(7.9) | -1.1 | 1.1 |
| 合計 | **1219** | 914 | 2,133 | | |
| $\chi^2$ 値 | $\boldsymbol{\chi^2 = 278.228, df = 9, p < .001}$ | | | | |

「ので」の前件に共起されるモダリティ表現の中で最も多く用いられるのは「必要」と「不確実」の表現であり、第 2 類の不確かなことを表すモダリティ表現との共起が最も多い。これらのモダリティ表現は益岡(1991)の「真偽判断モダリティ」に属するものであり、確信を持って言い切れない場合に何らかの形式を用いて断定を保留する表現である(益岡 1991 p.110)。ある事柄に対して断定を保留する場合とは、話し手が何らかの理由で確定的な言い方を避けていることである。このような話し手の不確かなことに関する判断を「かも知れない」、「はずだ」、「みたいだ」などの共起形式を用いて表しており、その前件の不確かな事柄に対して話し手自身が主観的にとらえるのが「ので」の機能であると言える。さらに、「ので」は「必要」「禁止」の表現(共に第 1 類)、「希求」の表現(第 4 類)にも「から」よりも選好される傾向が見られる。

これに対し、「から」は「伝え聞き」において最も強い関連性が観察されており、他のモダリティ表現との使用は「ので」よりほとんど少ない結果である。これは、推量表現と「から」の共起には伝聞形式が前接することが典型的な使用傾向であると言える。

以上をまとめると次のようになる。「から」は特定のモダリティ表現との共起が顕著であり、これは「から」が事柄をそのまま伝える場合に主に使用され、その根拠となる事柄に対してより妥当性を強調する機能を持つためであると考えられる。

一方、「ので」は多様なモダリティ表現と幅広く共起しており、中でも話し手自身の直感的な判断による感覚で前件と後件を接続する機能を持つと言える。

### 5.5.3　モダリティ表現と「から」

「から」と共起数が多い上位のモダリティ表現の中で注目すべき点は事柄の確かさを述べる「わけだ」というモダリティ表現との共起である。「わけだから」の形式は調査した表現の中でもっとも多い 366 件(1,000 件当り 300.25 回)使用されていた。益岡(1991)によると「わけだ」は、説明モダリティの範疇に属するものであり、「わけだ」の使用においてはその文に対する帰結を得るた

めにはその命題が話し手と聞き手が共有する一般的な知識によるものでなければならない。言い換えると、「わけだ」が使用されるためには、話し手のみが知っている知識に根拠を置くのではなく、その知識について双方が承知している事柄である必要があることである。このようなモダリティ表現と共起する「から」は一般的な事柄を事実として受けて後件の結果のほうに当然な成り行きで導く役割を持つ。つまり、話し手と聞き手の相互が承知している前件の事柄を「わけだ」というモダリティ表現を使用することでより客観化し、「から」と共起させることで確信を持って説得的に提示している。

(3) a. 次に、効果的な接待の仕方を考えること。接待は相手に喜んでもらうためにするわけだから、相手の好みに合わせることが必要だ。

(PB13_00699)[19]

b. 接待は相手に喜んでもらうためにするから、相手の好みに合わせることが必要だ。

(筆者による改変)

「相手の好みに合わせることが必要だ」という後件の理由を述べる場合において、モダリティ表現を伴う(3a)に比べて、モダリティ表現を使わない(3b)のほうが「接待というのは相手に喜んでもらうために当然するべきものである」というような強い口調に感じられる。このように、「わけだ」というモダリティ表現を用いて一般化させた前件を受ける際には「ので」より「から」を主に用いる。「から」は前件に対する後件の事柄の妥当性を高める役割をする。

次に、共起頻度が二番目に高いのは「だという」の形式である。ある情報が自分の考えではなく、第三者から得た情報である場合、自分の考えを加えずにそのまま伝える際に用いるモダリティ形式である。

[19] PB は出版サブコーパスの「書籍」を表し、その横の数字は BCCWJ におけるデータ番号である。

(4)　a. その討論会では近畿代表に選ばれ、東京まで行ったというから、半端じゃない。

(PB32_00231)

b. 川釣り専門で、年に何回か休みをとっては、世界中の川を釣り歩いていたというから優雅なもんだ。

(PB29_00723)

(4)の例は前件で述べる外からの情報をそのまま受け入れて後件で述べる判断の根拠とする例である。「だという」のモダリティ表現を用いて前件の事柄を一般化し、「から」が後接することで前件の事柄から考えると一般的にそう思われるという意を後件が表している。しかし、(4)の例における「というから」を「というので」に置き換えると、前件が提示する根拠を受けた後件の当然性が、「から」の場合に比べて落ちることになり、話し手のみの感覚を表す感じになる。

以上、「から」と共起するモダリティ表現の中で使用頻度が最も高い「わけだ」、「だという」の二つの形式を考察した。両形式は前件で提示したことによって後件の事柄が必然的に導かれることに納得する意を表し、主に「ので」より「から」が選好して用いられる。この際、「から」は前件の根拠をより客観化する役割を持ち、後件で述べる事柄が一般的な当然性を持つことを表す。

本研究の調査から得られた結果は、従来の研究における「から」は主観的に前件と後件を結びつけるという主張とは異なる結果であると言える。

### 5.5.4　モダリティ表現と「ので」

「ので」は多様なモダリティ表現と共起される傾向であるが、中でも最も共起数が多いモダリティ表現は「たい」、「と思う」、「わけではない」の 3 つの表現である。

まず、「と思う」は第 2 類の不確かなことを表す表現であり、「ので」との共

起数が最も多いグループである。このような表現はその場の証拠や状況における事柄について、それが個人的な考えで確実だとは言い切れない場合に使われる。直前に述べた事柄について、直感的に知覚・認識した判断内容を自分の意見として示す、または自分の感覚や感情を示してその気持ちを自然に感じる場合に用いるモダリティ表現である。

(5) a. ･･･ 高回転域になった時に回転が重くなるっていう結果が出たんだよ。みんなも興味があると思うので、もう少し詳しく話をすると、七千五百回転を過ぎたあたりで重くなる。

(PB4n_00003)

b. みんなも興味があると思うから、もう少し詳しく話をすると、七千五百回転を過ぎたあたりで重くなる。

(筆者による改変)

(5a)の前件の「みんなも興味があると思う」というのは話し手自身の考えであり、あくまでも自身の感覚として主観的に捉えている。(5b)のように前件と後件を「から」を用いて接続すると、「みんなが興味を持つのは当然のことである」という言い方に捉えられる。

次に、「たい」は希求を表すモダリティ表現として分類され、話し手の行動や状態についての希望を表すものである。森田(1980)によると、「たい」を用いて第三者の希望を表すためには「彼は水が飲みたいのだ/飲みたがっている」のような言い方をしなければならない。したがって、「たい」というモダリティ表現は話し手自身の希望を表しており、正に主観的な表現であると言える。

(6) a. まさに「子は親の鏡」。私は子どもの笑顔を見たいので、部屋のあちこちに鏡をつるして、そこに自分の顔がうつる度に笑顔を作るように努力をしています。

(PB13_00234)

b. 私は子どもの笑顔を見たいから、部屋のあちこちに鏡をつるして、そこに自分の顔がうつる度に笑顔を作るように努力をしています。

(筆者による改変)

(6a)の「私は子どもの笑顔を見たい」という前件はモダリティ表現「たい」を用いて話し手の本人にのみ当てはまる事柄として提示されており、「どうして部屋のあちこちに鏡をつるすか」という後件の理由として前件のように考えるのも話し手のみの主観的な感覚である。一方で、(6b)のように「見たいから」に置き換えると同じく「たい」というモダリティ表現を用いているが、「子どもの笑顔を見るために部屋のあちこちに鏡をつるすという行為は一般的に皆が行っていること」という異なる感じになる。言い換えると、(6b)ではそうすることは当然であるという前件の事柄に対する判断を一般化してしまうようなニュアンスである。つまり、(6a)のように「ので」は前件と後件を主観的に接続する一方で、(6b)のように「から」を用いると話し手は客観的な命題として捉えらることになるのである。

以上のようなモダリティ表現の機能から分かるように主観的であるというのは、第三者もしくは聞き手を想定に入れずに表現すること、またはある命題についてそれに関する情報が話し手のみのものになることであると言える。話し手が述べる事柄が一般的に同意されていることではない場合や、ある情報が予め聞き手と共有されていない場合は主観的な事柄になり、「ので」が選好される。その一方で、一般的に容認されているか、その情報が聞き手も承知しているのであればそれは客観的な事柄であり、「から」が選好されると言える。

## 5.6 まとめ

本章では、永野(1952)以来度々論じられてきた「から」の主観的、「ので」の

客観的という性質について、話し手の心的態度を表す前件のモダリティ表現との共起関係からその関連性を考察した。BCCWJ の出版サブコーパス「書籍」を対象にして、モダリティ表現を用いる文が前件に現れた際の「から」「ので」との共起様相を調べた。その分類結果から「から」と「ので」が前件と後件をどのように接続するかを考察し、以下のような結論が得られた。

第一に、「から」は「ので」に比べてモダリティ表現との共起数は多いが、共起するモダリティ表現には偏りがあり、その使用が限定されている。一方で、「ので」は多様な機能のモダリティ表現と共起しており、「から」より包括的な範囲で使用することが可能である。

第二に、「から」は「わけだから」、「だというから」、「そうだから」など、話し手が前件の事柄をそのまま伝える際に最も使用される。その場合、話し手は前件の事柄に対する確信が高いことをモダリティ表現を用いて提示し、「から」は前件をより客観化させて一般的な当然の成り行きの結果として接続する機能を持つと考えられる。

第三に、「ので」は「たいので」、「と思うので」、「かもしれないので」など、話し手自身の希望や事柄に対する直感的な感覚を表すモダリティ表現と主に共起する。この場合、「ので」は前件の事柄が話し手の意思に近いことをモダリティ表現で際立たせたうえで、前件と後件を主観的にとらえる機能をすると言える。

以上、BCCWJ の出版サブコーパス「書籍」を対象にした本研究の調査結果は、「から」「ので」の「主観/客観」の議論に関する永野(1952)の主張とは異なる結果となった。前件末のモダリティ表現と「から」「ので」の共起関係から考えると、国広(1992)が述べる両者の性質に関する主張を支持する結果となった。すなわち、モダリティ表現と共起する「から」と「ので」は、前件のモダリティ表現の影響を受けて後件に作用している。その際、「から」は話し手の個人的な感情や意見を介入しないモダリティ表現と主に使用され、前・後件を「客観的」にとらえる働きをしている。その一方で、「ので」は話し手の個人的な見解を交えて述べるモダリティ表現と主に共起され、前・後件を「主観的」にとらえる機能をしていると言える。

# 第 6 章　推量助動詞との共起関係

## 6.1　はじめに

本章では、「から」と「ので」の相違点の 1 つであるとされる推量表現との共起可否について考察する。先行研究によれば、「から」「ので」に対する推量表現の前接可否について、両者の間では明確な違いが存在する。具体的には、永野(1952)によると、推量や未来の意を表す前件である場合、その前件は「から」とは接続可能であるが、「ので」とは接続することができない。「ので」はあくまでも客観的な事実を述べる役割であるため、確実に決まってない未来のことを表すには不適切である。このような永野(1952)の主張は、その以降の森田(1980)などの研究においても支持されてきた。

本章では、「ので」と推量表現の共起不可に関する永野(1952)や森田(1980)の主張について、BCCWJ の 4 つのジャンルを対象にして検証を行い、その結果から次のことを主張する。

まず、推量表現と「ので」の共起不可は日本語の推量表現全般において当てはまるわけではなく、一部の推量表現との共起に見られる傾向である。

次に、推量表現と「から」「ので」の共起使用には、使用場面に最も符合する「から」「ので」の機能が選択されるため、推量表現と共起する「から」「ので」の形式に相違点があることである。

さらに、これらの原因として考えられるのは、複文における前件と後件を「から」は主観的に、「ので」は客観的に結び付けるためであるより、「から」「ので」の共起形式が用いられる使用場面による影響が大きいことにある。

以上の 3 点について大規模コーパスを用いた検証の結果から考察していく。

## 6.2　背景と目的

### 6.2.1　先行研究

「から」「ので」の相違点の 1 つとして、推量表現との接続可否が関与するという主張は永野(1952)によって初めて議論された。

永野(1952)によると、「ので」は、推量や未来の言葉につきにくいため、「でしょうので」、「だろうので」、「あろうので」などとは言えない。これは、将来のことを判断や推論の根拠とすることはできても、まだ事実として存在するわけではないため、「から」は使えるが、「ので」で条件づけることはできないのである。また、(1a)(2a)のように、「から」は話し手の不確かで主観的な判断による推量表現である「だろう」の前件に使えるが、(1b)(2b)のように「ので」に置き換えることは不可能であると述べている。

(1)　a. 次第に偏見は是正されるでしょうから、七十円代の日東は買い物です。

(永野 1952, p. 37)

b. **??** 次第に偏見は是正されるでしょうので、七十円代の日東は買い物です。

(筆者による改変)

(2)　a. 社長もあさって頃は帰って来るだろうから、社長の意見もちょっと訊いてみることにしよう。

(永野 1952, p. 37)

b. **??** 社長もあさって頃は帰って来るだろうので、社長の意見もちょっと訊いてみることにしよう。

(筆者による改変)

これに関して森田(1980)も「ので」は話し手の主観を越えて外にある事実

としてを客観的に眺める態度であるため、「…らしい/…かもしれない/…だろう/…まいので」など、推量で受けるあいまいな言い方をすると不自然になると述べている。

さらに、類語例解辞典(1997)では、前件が推量表現である場合に接続する用法は「ので」にはないと明記されており、「から」/「ので」の使い分けに関する事項の 1 つとすると記述されている。以下の(3)はその例である。

(3)　a. 明日は晴れるだろうから洗濯をした。

(類語例解辞典 1997, p. 1124)

b. **??** 明日は晴れるだろうので洗濯をした。

(筆者による改変)

以上の先行研究では、「ので」は客観的な前件を好むため、まだ実在しない未来のことを予想して述べる「だろう」「でしょう」「まい」などの推量表現と共起し難いと一致した見解を述べている。

しかし、先行研究で言及されている推量表現のほとんどは「だろう」「でしょう」「まい」のみであり、その他の推量表現との共起については述べられていない。

加藤(2008)によると、推量や推測を表す日本語認識助動詞には「らしい、ようだ、そうだ、みたいだ、かもしれない、だろう、はずだ」などがある。これらの表現は機能によってさらに細分できる。ナロック(2006)によれば、「だろう」「かもしれない」「はずだ」は認識的(epistemic)タイプに分類でき、「ようだ」「みたいだ」「らしい」は証拠的(evidential)タイプに分類できる。このように「だろう」と「でしょう」の他に同様の役割を持つ推量表現が存在する。また、これらの表現と「ので」の共起形式に関しては、本研究の 5 章において検証した通り、「ようなので」「はずなので」のような形式が用いられている。

このことから、「ので」は、「だろう」「でしょう」以外の同じ機能を持つ推量表現との共起関係において「??だろうので」と同様の傾向を持つとは言い難い

と考えられる。このような「だろう」「でしょう」の以外の推量表現との共起可否について言及している研究は筆者の管見の限り見当たらない。

本章では、BCCWJ を用い、「だろう」「でしょう」以外の推量表現と「ので」の共起可否について検証を行い、その結果から「から」「ので」の相違点を考察する。

### 6.2.2 目的

本章では、推量表現との共起可否が「から」「ので」の使い分けの 1 つの基準にすることができるかを検証するため、「だろう」「でしょう」と同様に推量や推測を表す認識助動詞が「から」「ので」に前接する文形式を調べる。そして、その結果から「だろう」「でしょう」以外の推量表現においては、「から」「ので」との共起傾向が「だろう」「でしょう」と同じではないことを指摘し、推量表現との共起可否は「から」「ので」の使い分けの 1 つの基準として認め難いことを主張する。具体的には、「だろう」「でしょう」と同様に話し手の推量を表す認識助動詞である「らしい」「ようだ」「みたいだ」「かもしれない」「はずだ」の 5 つの表現と「から」「ので」との共起頻度を調べ、推量表現と「ので」の共起不可能は推量表現全般に当てはまるとは言い難いことを主張する。また、推量表現と「ので」との共起が不自然なのは、「ので」の客観性という性質が原因であるのではなく、使用場面に最も符合する推量表現と「から」「ので」の機能によるものであることを主張する。

そこで、本章では「ので」の客観性が影響し推量表現とは共起しないという永野(1952)と森田(1980)の主張について、実際の使用頻度情報に基づく考察を行う。推量表現に後接する「から」「ので」について、どのような形式が、どのような場面において、どのような頻度で使用され、その使用が全体的にどのような傾向になるのかを大規模コーパスを用いて検証し、「から」「ので」と前接する推量助動詞にはそれぞれ主に選好される形式が存在すること明らかにする。

## 6.3　調査の概要

### 6.3.1　調査対象

本章における調査対象は、BCCWJ の「国会会議録」「書籍」「Yahoo!ブログ」「Yahoo!知恵袋」である。本調査は推測・推量表現と「から」「ので」の共起関係を検証するために行うものであり、このような共起関係が現れ得るジャンルを調査対象として選定した。

「国会会議録」は 1976 年から 2005 年までの 30 年間の国会会議録である。これは、国会会議で発話されたものを文字化したものである。そのため、実際の使用例を観察すると、1 文の中に「-ですが/-けれども」などの接続詞が重ねて現れ、文が長くなる話し言葉的な言い方が多いのが特徴である。

「書籍」は 5.3.1 節に記述した通り、2001 年から 2005 年の間に国内で発行された書物である。「書籍」には多様な使用場面が存在し、地の文、会話文が混ざっている。様々な場面における推量表現と「から」「ので」の使用傾向が観察できると考えられるため、本章の調査対象に選定した。

そして、「Yahoo!ブログ」「Yahoo!知恵袋」については 4.3.1 節の記述の通り、「Yahoo!知恵袋」は 2005 年、「Yahoo!ブログ」が 2008 年に投稿されたデータから抽出した記事が収録されている。これらはインターネットを通じて不特定の読み手に発信するものであり、書き手と読み手はあることに対する質問や自身の意見を書き込みながら共有する。この両ジャンルは書き言葉的な性質が強いが、書き込みの内容としては専門的なものから私的な内容まで非常に多様な場面が含まれている。

このようにそれぞれのジャンル的性質を考慮し、BCCWJ の中から上記の 4 ジャンルを選定した。

### 6.3.2　推量表現

本章では「らしい」「ようだ」「みたいだ」「かもしれない」「はずだ」の 5 つの表現について「から」「ので」との共起可否を検証する。これらの表現は、推量を表す認識助動詞の範疇に属するが、その使われ方には若干の相違点が見られる。

森田(2007)によると、「らしい」は外在する情報を手掛かりとしたかなり客観的な推量判断である一方で、「ようだ」は自身のその時の感覚に基づく直感的な判断である。言い換えると、「らしい」は根拠に基づいたかなり確実性のある推量の言い方であり、「ようだ」は直感による印象であるため不確かさを残した言い方である。

田野村(1991)も森田(2007)と同じ見解を示している。「らしい」はある根拠に基づく推定を表すものであるため、その推定の表現の前後に根拠となることがらが表現されている一方で、「ようだ」は外見や印象がどのようであるかをいわば短刀直入に表現するものであると言う。

また、庵他(2000)によれば、「みたいだ」は「ようだ」「らしい」と同じ役割をするが、「みたいだ」のほうがよりくだけた話し言葉で使われる。

これらに対し、「かもしれない」「はずだ」はある根拠に基づく表現ではなく、話し手自身の考えに基づく表現である。「かもしれない」は、ある事柄が正しい可能性があるという考え方を述べる表現であり、「はずだ」は自分の考えで確信している事柄を表す表現である(庵他 2000)。

以上の 5 つの表現を先行研究に従いそれぞれの性質によって整理したものが表 6-1 である。表 6-1 の各表現の横の括弧は、それぞれの表現の中心的な役割を示す。「かもしれない」は、話し言葉と書き言葉の両方の性質を持っているため中央に示した。

表 6-1　推量表現の性質分類

<table>
<tr><th></th><th>話し言葉</th><th>書き言葉</th></tr>
<tr><td>証拠的<br>(外からの情報)</td><td>らしい(確信度が高い)<br>みたいだ(くだけた表現)</td><td>ようだ(改まった表現)</td></tr>
<tr><td>認識的<br>(内からの感覚)</td><td colspan="2">かもしれない(主観的思考)</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>はずだ(論理的思考)<br>だろう(論理的思考)</td></tr>
</table>

表 6-1 に示したように、各推量表現には機能の相違が見られるため、これらの表現では「だろう」「でしょう」と「ので」の共起不可能という関係とは異なる傾向が見られると想定する。「だろう」の他に同じ機能を持つ認識助動詞との共起関係を調べることで、「ので」は推量表現と共起不可能であるという理論が検証できると考えられる。

### 6.3.3　検索形式

本章の検索対象は「から」と「ので」が接続助詞として用いられ、「らしい」「ようだ」「みたいだ」「かも知れない」「はずだ」が前接している形式である。その詳細を表 6-2 に示す。

各推量表現は「辞書形」「丁寧形」「過去形」の 3 つの活用形を対象にし、前接形式ごとに検索した。さらに、「ので」の口語である「んで」、「かもしれない—かも知れない」のように一部に漢字表記がある場合も調査し、その結果は該当形式にまとめて表示した。

表 6-2 に示した形式に「から」「ので」が後接する表現形式を「中納言」の文字列検索で調査した。

表 6-2　前接形式の分類

| 形態 | 検索表現 |
|---|---|
| 辞書形 | らしい、ようだ、みたいだ(な)<br>かもしれない、はずだ(な) |
| 丁寧形(です) | らしいです、ようです、みたいです<br>かもしれないです、はずです |
| 過去形(~タ) | らしかった、ようだった、みたいだった<br>かもしれなかった、はずだった |

図 6-1　中納言の文字列検索(一部分)

本章の調査では表現形式が具体的であり、不必要な表現が検索結果に表示されることは少ないと考え、長単位検索ではない文字列検索を行った。
先に示した図 6-1 は、「Yahoo!知恵袋」における「らしいですから」の「中納言」の文字列検索の画面である。キーワードを含む文脈を抽出し、その中から「から」「ので」が接続助詞として使われ、推量表現が前接している文形式のみを分析データとした。図 6-1 に示した 11 件の検索結果から接続助詞として使われていない例を除くと、サンプル ID「OC09_11918」「OC05_00628」「OC08_00997」の 3 例が本調査のデータとなる。

また、調査結果には「らしい」の中に「小憎らしい」「めずらしい」などが、「ようだ」の中に「国民性がおうよう(鷹揚)だ」のような表現も抽出されたため、目視で確認を行った。3.2 節で述べた通り、「～は～からだ。」のような倒置の形式、「～からだと」のような終助詞的な用法の形式、「というので」の慣用句、「からといって、からって」などの複合辞は対象外とした。

## 6.4 分析

### 6.4.1 全体的な使用傾向

表 6-3 は「から」「ので」に前接する各表現形式の出現数を示したものである。各推量表現の出現数は延べ語数で数え、「丁寧形」「過去形」の出現数を「辞書形」にまとめて示した。本調査では、「だろうので」「でしょうので」も調査したが、すべてのジャンル及び形式において出現数が 0 であったため表 6-3 には示してない。以下からは、「だろう」「でしょう」の形式を除いた結果について論じることにする。

表 6-3 に示した出現数の下の括弧の中には 1,000 件あたりの調整頻度を示し、さらにその下にはそれぞれの表現形式が占める割合を表示した。

表 6-3　表現別「から」「ので」の使用数

| 区分 / 表現 | から | ので | 合計 | 調整済み残差 | |
|---|---|---|---|---|---|
| | (1,000 件あたり調整頻度) | | | から | ので |
| | 割合 | | | | |
| らしい | 55<br>(118.79)<br>3.3% | **221**<br>**(180.56)**<br>**13.1%** | 276<br>(299.3)<br>16.4% | -3.1 | **3.1** |
| ようだ(な) | 161<br>(347.73)<br>9.5% | **547**<br>**(446.90)**<br>**32.4%** | 708<br>(794.6)<br>42.0% | -3.7 | **3.7** |
| みたいだ(な) | **74**<br>**(159.83)**<br>**4.4%** | 180<br>(147.06)<br>10.7% | 254<br>(306.9)<br>15.1% | 0.7 | -0.7 |
| かもしれない | 50<br>(107.99)<br>3.0% | **174**<br>**(142.16)**<br>**10.3%** | 224<br>(250.1)<br>13.3% | -1.8 | 1.8 |
| はずだ(な) | **123**<br>**(265.66)**<br>**7.3%** | 102<br>(83.33)<br>6.0% | 225<br>(349.0)<br>13.3% | **9.8** | -9.8 |
| 合計 | 463<br>27.4% | **1,224**<br>**72.6%** | 1,687<br>100.0% | | |
| $\chi^2$ 値 | **$\chi^2(4)= 102.750, p< .001$** | | | | |

「から」と「ので」の総出現数にカイ二乗検定を施した結果、各推量表現と「から」「ので」の使い分けには有意差が確認された($\chi^2(4)= 102.750, p< .001$)。この検定結果を基に、各形式における「から」「ので」の選好傾向を観察するために残差分析を行った結果も示した。残差分析は、5.5.2 節で述べた通りクロス集計表においてカイ二乗検定の結果が有意であった場合に、どのセルがこ

の有意性に貢献したのかを判定するものである。観測値が期待値に比べて有意に大きいか小さいかを判定するものであり、絶対値が 1.96 以上であれば 5%の水準で有意に貢献していると言える。

残差分析の結果、「らしい」「ようだ」が「ので」のほうに有意に偏っていることが観察された。一方、「から」は「はずだ」との共起選好が観察された。残差分析の 5%水準の有意差 1.96 を基準に「ので」と推量表現の共起に着目すると、「らしいので」「ようなので」、「かもしれないので」「みたいなので」、「はずなので」という 3 つのグループが見出される。この 3 つのグループは各ジャンルにおける各推量表現と「ので」の関連性が高い順から低い順を表す。

また、表 6-3 には「から」と「ので」の間で 1,000 件当たりの調整頻度が高いほうを太字で表示し、かつ有意差が見られた場合は色づけをして示した。表 6-3 から推量表現と「から」「ので」の接続関係について以下の結果が得られた。

第一に、推量表現と「から」「ので」の共起使用に関する全体的な傾向は、次のようである。「ので」が全体の 72.6%を占めるのに対し、「から」は 27.4%の共起使用が見られた。推量表現との共起使用率が「から」より「ので」のほうが 2 倍以上高い結果から、実際の使用において調査した 5 つの推量表現は「から」より「ので」のほうを選好すると言える。

第二に、「から」「ので」の共起使用について推量表現別に分類すると、「ので」は「らしい」「ようだ」の表現において「から」より使用が多く見られた。一方で「から」は「はずだ」の表現において「ので」より使用が多く観察された。

第三に、「から」に前接する推量表現においては、「ようだ」が最も多く、「はずだ」「みたいだ」「らしい」「かもしれない」の順で共起数が少なくなる。「ので」においては「から」と同様に「ようだ」との共起が最も多く、「らしい」「みたいだ」「かもしれない」「はずだ」の順で共起数が少なくなることが観察された。

BCCWJ の 4 つのジャンルを対象に調査した結果、「ので」は調べた 5 つの推量表現と共起使用が観察されており、推量表現と共起しないという従来の研究とは合致しない結果となった。また、先行研究で挙げられた「だろう」と「でしょう」においても調査を行ったが、本研究の調査においても「だろう」

「でしょう」と「ので」との共起数は 0 であった。これに関しては従来の研究と同様な結果が得られた。

しかし、本調査の 5 つの推量表現と「ので」の共起使用が見られることから、「だろう」「でしょう」と同様に、まだ起きてない未来のことを推量・推測して述べる役割を持つ他の推量表現においては、「だろうので」と共起様相が異なることが明らかになった。

このような結果は、「ので」が前件と後件を客観的に結び付ける機能に起因して推量表現と「ので」の共起使用が不自然であるという従来の理論に対し、推量表現と「ので」の共起使用に関する異なる原因が存在することが示唆される。

次節では、BCCWJ のジャンル別に各推量表現の機能と「から」「ので」の使い分けの傾向について考察する。

### 6.4.2 BCCWJ のジャンルにおける使用傾向

「から」「ので」と推量表現の共起は、BCCWJ のジャンルにおいてどのような使用傾向が見られるかを調べるために、調査対象である BCCWJ の 4 つのジャンル別に細分した。その結果をまとめたものが以下の表 6-4 である。

表 6-4 には 4 つのジャンルにおける「から」「ので」の出現数を文体別に示し、その総出現数を表示した。また、各出現数の下の括弧の中には 1,000 件当たりの調整頻度を示した。各ジャンルにおける表現形式の「から」と「ので」の出現数に対してカイ二乗検定を施し、有意差が見られたセルに太字と色づけをして示した。

さらに、各ジャンルにおける「から」「ので」の総出現数についてカイ二乗検定を用いて有意差を観察した結果、調査対象の「国会会議録」「書籍」「Yahoo!ブログ」「Yahoo!知恵袋」の全てにおいて各推量表現と「から」「ので」の間に有意差が確認された(順に $\chi^2(4)= 10.106$, $p< .05$; $\chi^2(4)= 11.207$, $p< .05$; $\chi^2(4)= 43.244$, $p< .001$; $\chi^2(4)= 60.973$, $p< .001$)。

表 6-4　ジャンル別「から」「ので」の使用文体分布

| ジャンル / 表現 | 国会会議録 | | 書籍 | | Yahoo!ブログ | | Yahoo!知恵袋 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | から | ので | から | ので | から | ので | から | ので |
| らしい | 0 (0) | 1 (83.33) | 18 (116.88) | **13 (128.71)** | 20 (183.49) | **95 (232.27)** | 17 (116.44) | **112 (159.54)** |
| ようだ (な) | **46 (851.85)** | 8 (666.67) | 47 (305.19) | **44 (435.64)** | 26 (238.53) | **195 (476.77)** | 42 (287.67) | **300 (427.35)** |
| みたいだ(な) | 2 (37.04) | 0 (0) | 6 (38.96) | 3 (29.70) | **37 (339.45)** | 67 (163.81) | **29 (198.63)** | 110 (156.70) |
| かもしれない | 1 (18.52) | 2 (166.67) | 27 (175.32) | **23 (227.72)** | 13 (119.27) | 42 (102.69) | 9 (61.64) | **107 (152.42)** |
| はずだ (な) | 5 (92.59) | 1 (83.33) | **56 (363.64)** | 18 (178.22) | **13 (119.27)** | 10 (24.45) | **49 (335.62)** | 73 (103.99) |
| 総出現数 | **54** | 12 | **154** | 101 | 109 | **409** | 146 | **702** |
| $\chi^2$値 | 10.106* | | 11.207* | | 43.244*** | | 60.973*** | |
| **Cramer's V** | **0.391** | | 0.210 | | 0.289 | | 0.268 | |

*は p< .05, ***は p< .001 の有意水準を示す。

そして、Cramer's V(クラメールの連関係数)[20]の結果により、BCCWJ のジャンルにおける推量表現形式と「から」「ので」の使用の関連の強さが確認できる。クラメールの連関係数は、クロス集計表における表側データと頭側データの 2 方向の要因の関連の強さを示すものである。クラメールの連関係数の結果から、他のジャンルに比べて「国会会議録」における推量表現と「から」「ので」の使用には最も強い関連性があると言える一方で、「書籍」における推量表現と「から」「ので」の使用は弱い関連である結果となった。

上記のことから、各ジャンルにおける「から」「ので」と推量表現の共起傾向について以下のようなことが明らかになった。

第一に、推量表現と「から」「ので」の共起使用は、「Yahoo!ブログ」と「Yahoo!知恵袋」において最も多く見られる一方で、「国会会議録」では両者の共起が最も少なかった。これは、国会の会議において、ある事実に基づき自身の意見を披露する、または相手に反論を提示する「国会会議録」というジャンルの性質上、曖昧で不確かなことを述べる推量表現の使用が避けられるためであると考えられる。

第二に、「から」と推量表現の共起使用が最も多く見られたジャンルは「書籍」であるのに対し、「ので」と推量表現の共起使用は「Yahoo!ブログ」と「Yahoo!知恵袋」において最も多かった。この結果は、「から」「ので」の使用はそれぞれのジャンルによって選好傾向が異なっており、両者の使い分けには何らかの相違点が存在することが示唆される。ただ、クラメールの連関係数

---

[20] 絶対値の基準は各分野によって異なるが、一般的にはクロス集計表における 2 方向の要因の値が低い数字を基準とする。本調査では 5×2 であるため 2 を基準とする。

| 意味 / 要因の値 | V 値 | | |
|---|---|---|---|
| | ←関連が弱い | | 関連が強い→ |
| **2** | **.10** | **.30** | **.50** |
| 3 | .07 | .21 | .35 |
| 4 | .06 | .17 | .29 |

出典：이학식・임지훈(2009)『SPSS 16.0 매뉴얼』p. 179.

の「書籍」に関する結果から分かるように、推量表現による「から」「ので」の使い分けは、ジャンルの性質によって全て決まるとは言い難く、両者の使用場面などと関連付けられて決定されると考えられる。

第三に、推量表現と共起する「から」「ので」の使用の詳細を見ると、「から」「ので」の選好使用は「書籍」「Yahoo!ブログ」「Yahoo!知恵袋」で類似した傾向が見られる。3 つのジャンルでは「らしいので」「ようなので」「みたいだから」「かもしれないので」のような形式で用いられている。しかし、「国会会議録」では異なる使用傾向が見られた。これは、多様な話題による使用場面と、書き手と読み手が存在する特徴を持つ「書籍」「Yahoo!ブログ」「Yahoo!知恵袋」とは異なり、「国会会議録」は場面や話題が限定されているためではないかと考えられる。

第四に、各ジャンルにおいて推量表現を伴う「ので」は、主に「らしいので」「ようなので」のような形式で使用される。その一方で、「から」は「はずだから」「みたいだから」の推量形式で主に使用されている。このように「から」と「ので」に前接する推量表現が異なることには、両者の前件の事柄に関する情報としての話し手の信頼度の高低が異なるため、各推量表現の本来の機能が影響を及ぼしているのではないかと考えられる。

以上で見てきたように、推量表現と「から」「ので」の共起は、「ようなので」「らしいので」「はずだから」のように主に使用される共起パターンがある。そのような使用傾向の違いには、BCCWJ のジャンルが関連しているというより、使用場面や各推量表現の本来の機能が深く関連しているためである。

次節では、6.4.1 節において「ので」と推量表現の共起使用を 3 つにグループ化したものを中心に「から」「ので」の使用をについて考察する。

## 6.5　考察

### 6.5.1　「ようだ」「らしい」と「から」「ので」

既に述べたように、BCCWJ の 4 つのジャンルにおける調査では、推量表現と「から」「ので」の全体的な共起使用は、「から」より「ので」のほうが多い結

果であった。本調査で調べた 5 つの推量表現の中では、「はずだ」を除いた「らしい」「ようだ」「みたいだ」「かもしれない」の 4 つの推量表現において「ので」との共起が「から」より多く観察された。その中でも「ようなので」の形式は最も使用頻度が高く 1,000 件当たり 446.90 回使用されており、「ので」全体の使用の中で最も高い 32%を占めている。さらに、「から」「ので」の使用を合わせて考えると、「ようだ」は全体使用数の 41.5%の割合で用いられている。これは、「ようなので」の形式は「推量表現＋理由節」の範疇では典型的な形式であると言える結果である。

ジャンル別に見ると、「ようなので」は「Yahoo!知恵袋」と「Yahoo!ブログ」において使用数が最も多く、両ジャンルにおける「推量表現＋ので」形式の全体使用の半分に近い使用が観察された。「Yahoo!知恵袋」「Yahoo!ブログ」における「ようなので」の実例を(4)と(5)にそれぞれ示す。

(4) a. 目なども日焼けするようなので、やはり炎天下の時間帯はなるべく室内がいいのでしょうね。

(OC10_01678[21])

b. テレビの見すぎは言語の遅れが見られるようなので、少し注意して下さいね。

(OC10_02300)

(5) a. さて明日は、新年最初の駅伝練習をするようなので、気合で早起き頑張るぞー！！

(OY03_07950)

b. 病気に強いピーマンに、赤や黄色のパプリカを接木します。

[21] OM は、媒体である「国会会議録」を示し、その横も数字は BCCWJ におけるサンプル ID を表しており、他のジャンルも同様である。PB は「書籍」、OC は「Yahoo!知恵袋」、OY は「Yahoo!ブログ」を示す。

明日も明後日も天気が悪いようなので、今回もうまくいくと思います。

(OY01_04254)

「Yahoo!知恵袋」「Yahoo!ブログ」では、ジャンル的な性質から主にある事柄に関する話し手の個人的な話題が多いと考えられる。(4)と(5)では、外にある情報源からの前件の事柄を根拠にし、話し手の判断を「ようだ」を用いて限定している。その上、「ので」を使用することで、前件に基づいて述べる後件が話し手の個人的な判断であることがより明確に反映されている。「ようなので」の後件には主に「-たい」「-と思います」のような自信の願望を表す表現や話し手の意志を表す表現が使用される例が多く見られた。

一方、「国会会議録」では、「ようだから」の使用が「ようなので」の使用を上回っている。「ようだから」の実例を確認すると、ほとんどの場合において「ようですから」という丁寧体が用いられている。以下に示す(6)は「国会会議」という話し手の現在の状況に基づいて判断をする場合に、改まったニュアンスを持つ推量表現である「ようだ」を使用する例である。「ようだ」の後に「から」を後接することで、前件で述べた自身の判断をより強めていると考えられる。

(6) a. 委員長（名尾良孝君）他に御発言もないようですから、両案の質疑は終局したものと認めます。

(OM45_00006)

b. 質問者の御了解が得られぬようですから、政府側は重ねて御答弁を願います。

(OM15_00003)

「ようだ」と同様の使用傾向が観察される「らしい」は、外からの情報に基づく推量表現である点は「ようだ」と同様の機能を持っている。しかし、「らし

い」は「ようだ」に比べて情報に対する話し手の確信が高いことと、主に話し言葉的な性質である点で「ようだ」と異なっている。このような「らしい」の使用においては、「から」より「ので」との共起使用が多く見られた。以下の(7)において、話し手は前件の事柄についてその情報源が確かであると考え、「らしい」を選択し、「ので」を後接している。ここで「ので」を用いることは、後件における話し手自身の個人的な判断や行動が、前件から起因されたことであり、前件との因果関係をより強調する役割であると考えられる。

(7) a. ブログにも紹介されていた清正井(きよまさのいど)は結構有名なパワースポットらしいのであまりそういうのを感じない私だけど行ってきました。

(OY15_11259)

b. 天才的作家君臨！ですね、本の内容と、また違った脚本らしいのでどう違うか比較出来るのが今から楽しみです♪

(OY13_03365)

その一方、「らしいから」は「らしいので」に比べ使用数が非常に少なく、「国会会議録」では 0 件、「Yahoo!知恵袋」「Yahoo!ブログ」においても「らしいので」の 4 分の 1 程度の使用に留まっている。その理由として、外から得られた事柄に対して話し手の信頼が高いことを表す「らしい」の後に「から」が後接されると、話し手の信頼度が高い前件の事柄こそが、後件を引き起こす原因として作用すると聞き手や読み手に強く強調されてしまう印象を与えるためであると考えられる。次の(8)に示すように、「らしいから」の使用は前件で述べる「金持ちであること」「年々女子が少なくなる」という事柄のみが後件の原因としてあり得るようなニュアンスになる。

(8) a. 「つまり、アリバイありってわけね」

「そうとうな金持らしいから、人を使って殺させることもでき

ないわけじゃないが」

(PB59_00001)

b. 年々女子が少なくなっているらしいから、いずれは男女共学になるのだろう。

(PB29_00382)

### 6.5.2 「みたいだ」「かもしれない」と「から」「ので」

「みたいだ」と「かもしれない」は全体的な使用頻度においては両方とも「ので」との共起が多いが、ジャンル別には異なる傾向が見られる。「みたいだ」は「Yahoo!知恵袋」「Yahoo!ブログ」において「から」との共起頻度が高かった。「かもしれない」は「書籍」「Yahoo!知恵袋」において「ので」との共起頻度が高かった。これは「みたいだ」と「かもしれない」の機能と各ジャンルの性質による相違点であると考えられる。「みたいだ」は外からの情報を根拠とする証拠的な性質を持つ推量表現であり、「ようだ」「らしい」に比べて話し言葉におけるくだけた言い方によく用いられる。それに対し、「かもしれない」は内からの感覚による根拠を重視する認識的な性質を持つ表現で、他の形式に比べ事柄に対して確実さが低いと判断される場合に用いられる表現である。このような本来の性質から、「みたいだ」は「Yahoo!知恵袋」の例の中でも専門性を要しない質問の場合に対し、カジュアルな答えをする時に使用され、「Yahoo!ブログ」ではある事柄に対する話し手の個人的な話題に対する感想を述べる場合に用いられると考えられる。すなわち、以下の(9)に示す通り、カジュアルな使用に向いている「みたいだ」の形式には丁寧さを持つ「ので」との共起は好まれない。したがって、(9)の「みたいだから」を「みたいなので」に置き換えると、「ので」の丁寧さによる影響で文の意味とあまり調和しなくなる。

(9) 今年弟は高校受験だし、頭もあまり良くないみたいだから、色々大変なのは分かるんだけど、それでもこんな家庭は、ちょっと淋しいよね・・・。

(OY13_00418)

(9)’　今年弟は高校受験だし、頭もあまり良くないみたいなので、色々大変なのは分かるんだけど、…

これに対し、「かもしれない」は推量表現の中で最も確実性が低いことから、「から」の押し付けるニュアンスが好まれないと考えられる。話し手がある事柄の原因・根拠としてとらえている情報が話し手自身の主観的な思考によるものであり、聞き手に強く主張することを控えなければならないような場合に「ので」を用い、不確実な事柄に対する聞き手や読み手の了解を求めている。これも同じく「ので」の丁寧さから起因するものであると考えられる。以下の(10)で示す例は、「かもしれない」と「ので」の共起使用に関する典型的な使用例であると言える。

(10)　a. 精神的ストレスがたまっていて吠えるのかもしれないのでワンちゃんのために少し時間を作ってコミュニケーションをとってもらえませんか…

(PB36_00177)

b. 私のメッキはいぶし銀になりましたが、・・・物によっても違うかもしれないので、責任はもてませんが…

(OC09_00474)

### 6.5.3 「はずだ」と「から」「ので」

「から」は、調査対象である 5 つの推量表現の中で「はずだ」との共起使用が最も多く用いられ、「はずだから」の共起形式は「から」の機能を特徴付ける形式であると言える。また、「はずだから」は、調査した 4 つのジャンル全てにおいて「はずなので」より使用頻度が高い結果となった。「はずだ」は、話し手自身がある事柄に対し、最も確信的であると考える際に使われる表現である。

さらに、話し手の論理的な思考による推量で、書き言葉で主に使用される。このような機能から「はずだ」の前件は、話し手の主張や論理的な考えを表す事柄の場合が多く、「から」を用いることで後件を引き起こす前件の理由・原因を際立たせる役割をし、話し手の主張に説得力を持たせる。(11)に示す例のそれぞれの前件である「メモリーが見える」「妻子は東京都内にいる」「私心のないことを知っている」という事柄について話し手は「はずだ」を用いて確信的であることを述べる。さらに、「から」を選択し、後件の妥当性を主張する。

(11) a. 開けれたらメモリーが見えるはずですから、抜いて差し込むだけです。

(OC02_08026)

b. 妻子はおそらく東京都内にいるはずだから、私は都内全域の交番にポスターを掲示してくれるように頼んだ。

(PB29_00034)

c. 譚の神だけは、わたしの私心の無いことを知っているはずだから、他人に理解してもらおうなどとは思わないのである。

(OY13_00073)

## 6.6 まとめ

本章では、永野(1952)と森田(1980)の説に基づいて推量表現と「ので」の共起可否を検証し、前件の推量表現との共起様相から「から」「ので」の相違点を明らかにした。永野(1952)と森田(1980)によれば、「ので」は、前件と後件を客観的に結び付ける機能をするため、まだ起きてない不確かなことを述べる推量表現が前接することができない。その例として、「だろうので」「でしょうので」があげられている。

しかし、「ので」と上記以外の推量表現との共起についても、「だろう」「でしょう」と同様の共起不可能という共起傾向が現れるかどうかは言及されていない。

そこで、実際の使用における推量表現と「から」「ので」の共起可否と使用傾向を調べるために、BCCWJ の「国会会議録」「書籍」「Yahoo!ブログ」「Yahoo!知恵袋」を対象にし、使用数と頻度を調査した。外からの情報に起因する「らしい」「ようだ」「みたいだ」と話し手自身の感覚による「かもしれない」「はずだ」の 5 つの推量表現について、「から」「ので」との共起傾向を使用数と頻度から調べ、以下のことを明らかにした。

第一に、「だろう」「でしょう」以外の推量表現との共起においては「から」より「ので」のほうが使用頻度が高かった。つまり、「ので」は全ての推量表現と共起しないわけではなく、先行研究の「ので」と推量表現との共起不可という主張は「だろう」「でしょう」との共起においてのみ妥当であることを示す。さらに、「ので」が「だろう」「でしょう」以外の推量表現と高い使用頻度で共起するという結果は、「から」「ので」の区別には推量表現との共起可否とは異なる原因があることを示唆する。これについて本調査の結果は先行研究の主張とは異なっており、「から」「ので」の区別には、前件と後件を客観的に結び付けるか否かより、「から」「ので」の使用場面が影響を及ぼしていると言える。

第二に、推量表現との共起において、「から」は「はずだから」の形式の使用が最も多く見られる一方で、「ので」は「らしいので」「ようなので」の形式の使用が最も多く見られており、これら 3 つの形式が「から」「ので」の典型的な使用形式であることが分かった。「から」「ので」の間で推量表現との使用形式に相違点が存在する理由は、前件に対する情報としての信頼度が両者の間で異なっているためであると考えられる。「から」は、前件で述べる事柄に対し話し手自身がほぼ確定的にとらえており、情報としての信頼が非常に高い場合に「はずだ」を用いて限定したあと、前件で述べる事柄自体を強調する場合に使用される。その一方で「ので」は、前件で述べる外からの情報に対する話し手の信頼が低く、「らしい」「ようだ」と「ので」を伴って用いることで事柄に対する責任を避ける場合に用いられると考えられる。

第三に、本章で調査した BCCWJ の「国会会議録」「書籍」「Yahoo!ブログ」「Yahoo!知恵袋」の 4 つのジャンルと推量表現に対する「から」「ので」の共起選好の間には有意な関連があることが分かった。つまり、「国会会議録」では「から」の使用が多く、その理由として「から」は話し手自身の信頼の高い前件の事柄を根拠に話し手自身の主張を強める役割をするためであると考えられる。一方で「Yahoo!知恵袋」「Yahoo!ブログ」「書籍」においては「ので」の使用が最も多く、話し手自身の主張の強調より、聞き手や読み手を考慮した丁寧さを持つ言い方をするためであると考えられる。

以上で見てきたように、接続助詞「から」「ので」の使い分けに関して推量表現との前接関係を中心に BCCWJ の 4 つのジャンルを調査した結果を基に考察した結果から、「から」「ので」と推量表現との共起には、前件の事柄に対する話し手の信頼度が係わっており、それは使用ジャンルとも関連がある。つまり、話し手の情報に対する信頼度に基づいて推量表現が選ばれたあと、前件と後件の結びつきに対して話し手自身の主張を強めるかそれとも前・後件の因果関係を強調するのかによって、「から」「ので」が使い分けられていることを論じた。

# 第 7 章　結論

本研究では、複文の前件と後件を原因結果関係に結びつける代表的な接続助詞「から」「ので」を研究対象とし、大規模日本語コーパスを用いて現代日本語における両者の使用傾向と用法について分析を行った。

「から」「ので」の用法は類似点が多いため、両者の同異点に関する研究が現在に至るまで数多く行われてきた。中でも、永野(1952)は「から」「ので」について 7 つの相違点を挙げ、両者に生じる相違点は前件と後件の関係が「から」は主観的に、「ので」は客観的に成されるためであると主張した。

この永野(1952)をはじめとする先行研究で主張されている「から」「ので」の相違点を考察するために、本研究では大規模日本語コーパスを対象とし、「から」「ので」の使用実例に対する定量的な分析を行った。具体的には、「から」「ので」複文の前件を中心に「丁寧体と普通体との共起」、「モダリティ表現との共起」、また、モダリティ表現の中でも「推量表現との共起」という 3 つの観点から両者の使用傾向と相違点を分析した。つまり、3 つの観点とは、「ので」の丁寧さに拘る問題に注目した両者の接続文体における相違点、話し手の心的態度を表すモダリティ表現に注目した「から」「ので」の主観性/客観性の問題の再解析、未定や不確かなことを表す推量助動詞とは共起し難い「ので」の使用可否に関する実在証明を行うことである。このような観点から、接続助詞「から」「ので」の実際の使用傾向を分析し、両者の使い分けを形態的な側面から考察した。

本研究では、現代日本語の書き言葉の全体像を把握することを目的に構築された BCCWJ に収録された 7 つのジャンルを調査し、その中から接続助詞として用いられた「から」の用例 42,435 件、「ので」の用例 91,733 件を抽出した。その調査データを基に現代日本語における「から」「ので」の使用傾向と使い分けに関するいくつかの特徴を明らかにした。以下に、本研究で考察した 3 つの観点ごとに、その調査概要と結果についてまとめる。

まず、「から」「ので」と「丁寧体」「普通体」との共起に関する調査(第 4 章)で

は、「から」「ので」の使い分けの 1 つとして挙げられる「ので」の待遇的な機能に着目した。

永野(1952)などでは、「ので」は待遇的な機能を持っており、そのため客観的な表現の多い文章、対者的な配慮が見られる丁寧な文体をとる傾向があると主張されている。つまり、「ので」の性質について「主観を押し付けない」「丁寧なやわらかい表現」であり、この「丁寧さ」が「から」「ので」の使い分けに影響を与えているとのことである。そこで、BCCWJ の出版サブコーパスの「新聞」「雑誌」と非母集団サブコーパスの「Yahoo!知恵袋」「Yahoo!ブログ」の 4 つのジャンルを対象に「から」「ので」複文の文体を調査し、その結果から以下の点について論じた。

第一に、全体的な使用傾向について、「ので」が「から」に比べて使用数と出現頻度が高かった。具体的には、「丁寧体＋普通体」を除く「丁寧体＋丁寧体」「普通体＋丁寧体」「普通体＋普通体」の 3 つの文体において「から」より「ので」の使用が多く見られ、「ので」は丁寧体のみならず普通体との共起頻度も「から」に比べて高かった。これは、「から」より「ので」のほうが使用できる発話範囲が幅広いことを示唆している。

第二に、「から」は「普通体　から、普通体」の文で最も多用された。「から」の使用頻度は、「丁寧体＋丁寧体」「普通体＋丁寧体」「丁寧体＋普通体」の 3 種の文体に比べ、「普　から、普」の文体に大きく偏っており、これが「から」の最も典型的な使用文体であると言える。

第三に、ジャンル別傾向を観察すると、調査対象にした BCCWJ の「新聞」「雑誌」「Yahoo!知恵袋」「Yahoo!ブログ」の 4 つのジャンルにおいて、「から」より「ので」のほうが多用されていることを明らかにした。出版サブコーパスの「新聞」「雑誌」では、公共的言語使用をすることと紙幅の制限などがある(山崎 2011)ため、「普　ので、普」が選好される。また、特定目的サブコーパスの「Yahoo!知恵袋」「Yahoo!ブログ」は WEB を通して書き手と読み手が直接やり取りすることと私的で自由な言語使用をすることから丁重な表現をする必要があるため、「普　ので、丁」が主に使用されることが分かった。

第四に、調査結果の実例の考察から、「から」は感情的な付加説明が不要で

ある場合やありのままの事実を話者の感情を排除して淡々と述べる場合に主に選好されるのに対し、「ので」は自身の意向や意志など個人的な考えを伝達する時に選好され、相手に押しつける印象を与えたくない場合に主に用いられることを主張した。

次に、モダリティ表現との共起に関する調査(第 5 章)では、「から」「ので」の「主観的」「客観的」な性質について論じた。

「から」「ので」と「主観/客観」に関する議論は、永野(1952)によってその関連性が初めて論じられた以来、「から」と「ので」の相違点に関する研究の中心となっているといっても過言ではない。そこで、永野(1952)などで論じられている「から」は「主観的」、「ので」は「客観的」に前件と後件を接続するという主張を検証するために、「から」「ので」を含む複文の前件末に用いられるモダリティ表現と「から」「ので」の共起関係を考察した。BCCWJ の出版サブコーパスの「書籍」を調査データとし、モダリティ表現を用いる文が前件に現れた際の「から」「ので」との共起様相を調べ、その結果から「から」と「ので」は前件と後件をどのように接続するかについて以下のような結論が得られた。

第一に、「から」は「ので」に比べてモダリティ表現と共起される文の総数は多いが、使用される表現には偏りがあり、主に用いられる表現が限定される傾向があることが調査から明らかになった。一方で、「ので」は多様な機能のモダリティ表現と共起しており、「から」より包括的な範囲で使用されていることを示した。

第二に、「から」は「わけだから」、「というから」、「そうだから」など、話し手が前件の事柄をそのまま伝える際に最も使用されていることが分かった。その場合、話し手は前件の事柄に対する確信が高いことをモダリティ表現を用いて提示する。その際、「から」はその前件をより客観化させて一般的な当然の成り行きの結果として接続する機能を持つ。

第三に、「ので」は「たいので」、「と思うので」、「かもしれないので」など、話し手自身の希望や事柄に対する直感的な感覚を表すモダリティ表現と主に共起する傾向が強いことが分かった。この場合、「ので」は前件の事柄が話し手の意思に近いことをモダリティ表現で際立たせ、前件と後件を主観的にと

らえる機能を持つ。このような本研究の調査結果は、永野(1952)の主張とは異なり、「から」と客観性、「ので」と「主観性」との関連を示唆するものとなった。これは、国広(1992)で主張されている「から」の性質を支持する結果と言える。

さらに、第 3 の観点である推量表現との共起に関する調査(第 6 章)では、モダリティ表現の中でも特に推量表現に焦点を当て、「から」と「ので」との共起傾向について考察した。

「ので」はその客観性のために推量表現とは共起しないことが永野(1952)らによって主張されているが、その議論は「だろう」「でしょう」との共起に関するもののみであり、他の推量表現と「から」「ので」との共起傾向については述べられていない。

そこで、BCCWJ の「国会会議録」「書籍」「Yahoo!知恵袋」「Yahoo!ブログ」の 4 つのジャンルを対象に、「だろう」「でしょう」と同様に推量を表す「らしい」「ようだ」「みたいだ」「かもしれない」「はずだ」の 5 つの表現について「から」「ので」との共起傾向を検証した。その結果、推量表現と「から」「ので」の共起使用の傾向について以下のような結論が得られた。

第一に、「だろう」「でしょう」以外の推量表現との共起に関して、「から」より「ので」のほうが高い使用頻度を示すことを明らかにした。つまり、先行研究の「ので」と推量表現との関係に関する主張について、「ので」は全ての推量表現と共起しないわけではなく、「だろう」「でしょう」との共起においてのみ該当することである。この結果は、従来の推量表現と「ので」との共起が不自然であるという主張について、「ので」の客観性という性質が原因であるわけではなく、使用場面に最も符合する推量表現と「から」「ので」の機能によるものであることを示唆する。

第二に、推量表現との共起において、「から」は「はずだから」の形式の使用が最も多く見られる一方で、「ので」は「らしいので」「ようなので」の形式の使用が最も多く見られており、「はずだから」「らしいので」「ようなので」が「から」「ので」の典型的な使用形式であることが分かった。話し手は、前件の事柄に対する信頼性が非常に高い場合に「はずだ」を用い、前件の事柄自体を後

件に対する原因として強調する場合に「から」を使用する。その一方で、「ので」は、外からの情報に対する話し手の信頼性が低い前件に「らしい」「ようだ」と共に用いられ、それによって前件の事柄に起因された結果である後件に対する責任を避け、単なる因果関係であることを示す役割をしている。

第三に、BCCWJ の「国会会議録」「書籍」「Yahoo!ブログ」「Yahoo!知恵袋」の 4 つのジャンルと推量表現に対する「から」「ので」の共起選好の間には有意な関連があることが分かった。「から」は「国会会議録」での使用が多い一方で、「ので」は「Yahoo!知恵袋」での使用が多かった。この傾向は、「から」は話し手自身の信頼の高い前件の事柄を根拠に話し手自身の主張を強める役割をするためであると考えられる。また、「ので」は、話し手自身の主張の強調より、聞き手や読み手を考慮した丁寧さを持っているためであると考えられる。

以上のように、BCCWJ を用いた本研究の 4,5,6 章の考察の結果を基に、現代日本語における接続助詞「から」と「ので」の使い分けに関する相違点と使用傾向について 4 つの観点から次のことを明らかにした。

第一の観点は、「から」「ので」複文の接続文体という観点における相違点である。「から」は、「普通体＋普通体」の形式にその使用が大きく偏っていることから、この形式が「から」の典型的な形式であると言える。一方、「ので」は、前・後件の文体に拘らず幅広く使用されている。しかしながら、「ので」が用いられた文体の中では、「普通体　ので、丁寧体」が共起頻度が最も高いことから、文体の丁寧さと「から」「ので」の使い分けには関連があると言える。

第二の観点は、本調査で得られた個別の例を観察した結果、前件末のモダリティ表現との共起の観点における相違点である。本調査で得られた個別の例を観察した結果、モダリティ表現と共起する「から」と「ので」は、前件のモダリティ表現の影響を受けて後件に作用していると考えられる。その際、「から」は話し手の個人的な感情や意見を介入しないモダリティ表現と主に使用され、前・後件を「客観的」に捉える働きをしている。その一方で、「ので」は話し手の個人的な見解を交えて述べるモダリティ表現と主に共起され、前・後件を「主観的」にとらえる機能をしていると言える。

第三の観点は、不確かなことを述べる推量表現と「ので」の共起可否の観点

である。推量表現を含む発話では、話し手の情報に対する信頼度の高低に基づいて推量表現が選ばれる。その後、前件と後件の結びつきに対し、話し手自身が高く信頼する前件の事柄自体を強調する場合は「から」、前・後件の因果関係を強め、前件に対する責任を回避する場合は「ので」が使用される。

第四の観点は、「から」「ので」が主に使用されるレジスターに関する観点である。「から」は公共的な性質を持つ「新聞」「雑誌」「書籍」、制限された場における発話が中心である「国会会議録」のようなレジスターにおける使用が多いが、それは話し手の個人的な感情を介入しない明確な根拠である前件を好み、自身の主張を強める性質を持つためである。一方で、「ので」は、比較的自由な言語表現と話題による情報伝達をすると考えられ、そのため話し手自身の見解や個人的な考えを根拠にすることが多い「Yahoo!知恵袋」「Yahoo!ブログ」「書籍」のようなレジスターにおいて主に使用される。

本研究における調査結果の考察から得られた「から」「ので」の相違点と使用傾向を表 7-1 にまとめた。

表 7-1　前件接続形式別「から」「ので」の使用傾向

| | から | ので |
|---|---|---|
| 接続文体 | 「普通体　から、普通体」 | 「普通体　ので、丁寧体」 |
| 丁寧さの傾向 | 弱 | 強 |
| 共起するモダリティ表現 | 「わけだから」「というから」:<br>話し手の個人的感情が介入しない確実な事柄、伝聞 | 「と思うので」「たいので」:<br>話し手の希望：話し手の見解が交じる |
| 共起する推量表現 | 「はずだから」:<br>事柄への信頼度が高い、<br>事柄自体を強調 | 「ようなので」:<br>事柄への信頼が低い、<br>前・後件の因果関係を強調 |
| 主な使用レジスター | 「新聞」「雑誌」「書籍」<br>「国会会議録」 | 「書籍」「Yahoo!知恵袋」<br>「Yahoo!ブログ」 |

大規模書き言葉均衡コーパスを用いた本研究の結果より、接続助詞「から」「ので」の使い分けに関する相違点について、今まで「主観的」「客観的」という二分法によって漠然と行われていた区別をより多様な側面から明確にすることができた。

本研究で行った現代日本語の縮図であると言える BCCWJ を用いた研究手法は「から」「ので」以外の文法事項の区別にも応用可能であり、さらなる文法研究に役に立つ。大規模な研究資料から得られる頻度情報を用いて語彙研究、多角的な語法(usage)研究、言語使用域のような談話環境を考慮に入れた文法研究など、その使用範囲は極めて広く応用することができる。

さらに、非母語話者による文法研究の可能性をより広げることにも寄与できると考えられる。ある言語現象に対し、一定の条件を与えて大規模コーパス資料を調べると、コミュニケーション上の使用の多少による言語特徴や語彙のコロケーションの状況による語彙の特性などが母語話者でなくても容易に把握できる。このような点で日本語の文法研究に新しい観点からの分析も期待される。

上記のことから、本研究は日本語文法研究及び発展しつつあるコーパス日本語学に対して大きく貢献すると考えられる。

最後に、本研究で得られた調査結果を踏まえ、今後の課題について述べる。本研究では主に「から」「ので」複文の前件を中心とした接続形式という側面から考察を行った。複文の前件は後件を引き起こす原因となる部分であり、それによる結果の部分である後件の表現形式については扱わなかった。また、統語的な観点から岩崎(1994)が指摘する「から」「ので」節のテンスに関する理論や「から」「ので」の意味機能の中で理由を表さない、いわゆる言いさし文(南 1993、白川 1995)の理論なども視野に入れた分析の可能性も残っている。これらは、いずれも期するところの課題である。

# 参考文献

池上嘉彦(1999)「日本語らしさの中の<主観性>―日本語の文の主観性をめぐって・その 1」『月刊言語』28:1, pp. 84-94, 大修館書店.

――――― (2008)「〈主観的把握〉－認知言語学から見た日本語話者の一側面」『言語教育・コミュニケーション研究』3, pp. 1-6, 昭和女子大学大学院.

庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘(2000)『初級を教える人ための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.

――――・――――・――――・――――― (2001)『中・上級を教える人ための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.

石川慎一郎(2012)『ベーシックコーパス言語学』ひつじ書房.

――――・前田忠彦・山崎誠(2010)『言語研究のための統計入門』くろしお出版.

伊藤勲(2005)『条件法研究-いわゆる接続助詞をめぐって』近代文芸社.

市川保子編(2010)『日本語誤用辞典：外国人学習者の誤用から学ぶ日本語の意味用法と指導ポイント』スリーエーネットワーク.

井上和子編(1989)『日本文法小事典』大修館書店.

今尾ゆき子(1991)「カラ、ノデ、タメ―その選択条件をめぐって―」『日本語学』10:12, pp. 78-89, 明治書院.

岩崎卓(1994)「ノデ節、カラ節のテンスについて」『国語学』179:1, pp. 114-103, 国語学会.

――――― (1995)「ノデとカラ―原因・理由を表す接続助詞」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(下)』pp. 506-513, くろしお出版.

大塚悦三(1934)『助詞と助動詞の研究』大倉廣文堂.

尾方理恵(1993)「『から』と『ので』の使い分け」松村明先生喜寿記念会編『国語研究』pp. 844-861. 明治書院.

小木曽智信・中村壮範・鈴木泰山・八木豊・山崎誠・前川喜久雄(2011)「コー

パス検索システム『中納言』デモンストレーション」『現代日本語書き言葉均衡コーパス完成記念講演会予稿集』pp. 43-46.
尾上圭介(1999)「文の構造と“主観的”意味―日本語の文の主観性をめぐって・その 2」『月刊言語』28:1, pp. 95-105, 大修館書店.
加藤重広(2006)『日本語文法入門ハンドブック』研究社.
神尾昭雄(2002)『続・情報のなわ張り理論』大修館書店.
上林洋二(1991)「理由を表す接続詞補稿―『から』と『ので』―」『東海大学紀要留学生教育センター』12, pp. 23-27, 東海大学紀要留学生教育センター.
菊池康人(2000)「『ようだ』と『らしい』―『そうだ』『だろう』との比較も含めて―」『国語学』51:1, pp. 46-60, 国語学会.
北原保雄(1981)『日本語助動詞の研究』大修館書店.
――― (1991)「表現主体の主観と動作主の主観」『国語学』165, pp. 15-25, 国語学会.
国広哲弥(1989)「意味と用法」玉村文郎編『講座日本語と日本語教育第 6 巻日本語の語彙・意味(上)』pp. 211-235, 明治書院.
――― (1992)「『のだ』から『のに』・『ので』へ―『の』の共通性―」カッケンブッシュ寛子編『日本語研究と日本語教育』pp. 17-33, 名古屋大学出版会.
グループ・ジャマシイ(1998)『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版.
小磯花絵・小木曽智信・小椋秀樹・宮内佐夜香(2009)「コーパスに基づく多様なジャンルの文体比較 - 短単位情報に着目して - 」『言語処理学会第 15 回年次大会発表論文集』pp. 594-597.
国立国語研究所(1951)『現代語の助詞・助動詞: 用法と実例』国立国語研究所.
――― (1981)『日本語教育指導参考書 5 日本語の文法(下)』国立国語研究所.
小西円(2010)「『から』『ので』の形態的特徴と使用ジャンル―日本語教育に

おける類義表現の扱いを考える」『特定領域研究「日本語コーパス」平成 21 年度公開ワークショップ(研究成果報告会)予稿集』pp. 131-138.
後藤斉(1993)「『神話』の比喩的用法について―コーパス言語学からのアプローチ―」『東北大学言語学論集』2, pp. 1-16, 東北大学言語学研究会.
――― (1995)「言語研究のデータとしてのコーパスの概念について―日本語のコーパス言語学のために―」『東北大学言語学論集』4, pp. 71-87, 東北大学言語学研究会.
――― (1996)「コーパスとしての新聞記事テキストデータ―終助詞『かしら』をめぐって―」『東北大学言語学論集』5, pp. 37-46, 東北大学言語学研究会.
――― (2001)「日本語コーパス言語学と語の文体レベルに関する予備的考察」『東北大学文学研究科研究年報』50, pp. 201-214, 東北大学文学研究科.
――― (2002)「慣用句と自由な語結合の間－『博する』を例にして－」『東北大学言語学論集』11, pp. 1-8, 東北大学言語学研究会.
――― (2003)「言語理論と言語資料―コーパスとコーパス以外のデータ」『日本語学』22: 5, 4 月臨時増刊号, pp. 6-15, 明治書院.
――― (2007)「コーパス言語学と日本語研究」『日本語科学』22, pp. 47-58, 国立国語研究所.
定延利行(2011)「コミュニケーション研究からみた日本語の記述文法の未来」『日本語文法』11:2, pp. 3-16, 日本語文法学会.
白川博之(1995)「理由を表さない『から』」仁田義雄編『複文の研究(上)』pp. 189-219.
STRAFELLA Elga Laura・松本裕治(2013)「日伊コロケーション辞書の作成を目指す『現代日本語書き言葉均衡コーパス』からのコロケーションの検出と分析」『第 4 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』pp.325-330, 国立国語研究所言語資源研究係・コーパス開発センター.
高梨信乃(2006)「評価のモダリティと希望表現―タ形の性質を中心に―」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編『日本語文法の新地平 2 文論編』pp. 77-

97, くろしお出版.
田窪行則・金水敏(1996)「対話と共有知識」『月刊言語』25:1, pp. 30-39, 大修館書店.
田野村忠温(1991)「『らしい』と『ようだ』の意味の相違について」『言語学研究』10, pp. 62-78, 京都大学言語学研究会.
――― (2003)「コーパスによる文法の研究」『日本語学』22:5, 4 月臨時増刊号, pp. 175-186, 明治書院.
――― (2009)「コーパスを用いた日本語研究の精密化と新しい研究領域・手法の開発」『人工知能学会誌』24:5, pp. 647-655, 人工知能学会.
趙順文(1988)「『から』と『ので』―永野説を解釈する―」『日本語学』7:7, pp. 63-77, 明治書院.
角田三枝(2004)『日本語の節・文の連接とモダリティ』くろしお出版.
寺村秀夫(1988)『日本語のシンタクスと意味』第Ⅱ巻.くろしお出版.
永田良太(2010)「接続助詞カラの用法間の関係について」『日本語教育』107, pp. 36-44, 日本語教育学会.
永野賢(1952)「『から』と『ので』とはどう違うか」『国語と国文学』29:2, pp. 30-41, 東京大学国語国文学会.
――― (1988)「再説・『から』と『ので』とはどう違うか―趙順文氏への反批判をふまえて―」『日本語学』7:12, pp. 67-83, 明治書院.
ナロック・ハイコ(2006)「従属節におけるモダリティ形式の使用」『日本語文法』6:1, pp. 21-37, 日本語文法学会.
――― (2009)「モダリティと文の階層構造」『月刊言語』38:1, pp. 34-41, 大修館書店.
日本語記述文法研究会編(2008)『現代日本語文法 6 第 11 部複文』くろしお出版.
野田春美(2011)「『現代日本語文法』からみた日本語の記述文法の未来」『日本語文法』11:2, pp. 17-29, 日本語文法学会.
橋本進吉(1969)『助詞・助動詞の研究』岩波書店.
蓮沼昭子・有田節子・前田直子(2001)『日本語文法セルフマスターシリーズ

7 条件表現』くろしお出版.
服部四郎(1950)「付属語と付属形式」『言語研究』15, pp. 1-26, 103-104, 日本言語学会.
花井裕(1990)「『ので』の情報領域―『から』との対話性と比較して」『阪大日本語研究』2, pp. 57-81, 大阪大学日本語学研究室.
原口裕(1971)「『ので』の定着」『静岡女子大学研究紀要』4, pp. 31-43, 静岡女子大学.
日野資純(1963)「いわゆる接続助詞『ので』の語構成 - それを二語に分ける説を中心としてー」『国語学』52, pp. 56-63, 国語学会.
堀一城・坂尻彰宏・石島大悌(2013)「BCCWJ 教科書データより抽出した頻度情報に基づく日本語ライティング指導教材の作成」『第 4 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』pp. 45-52, 国立国語研究所言語資源研究係・コーパス開発センター.
前川喜久雄(2007a)「特定領域研究『日本語コーパス』―目標、進捗状況、そして夢」『特定領域研究「日本語コーパス」平成 18 年度公開ワークショップ(研究成果報告会)予稿集』pp. 1-12.
――― (2007b)「コーパス日本語学の可能性―大規模均衡コーパスがもたらすもの―」『日本語科学』22, pp. 13-28, 国立国語研究所.
――― (2009)「代表性を有する大規模日本語書き言葉コーパスの構築」『人工知能学会誌』24:5, pp. 616-622, 人工知能学会.
前田直子(2009)『日本語の複文: 条件文と原因・理由文の記述的研究』くろしお出版.
前原かおる・菊池康人(2005)「学習項目の提示順序の再検討による教育改善の可能性―理由の『から』『ので』を例に―」『2005 年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp. 288-289.
益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版.
――― (1993)『24 週日本語文法ツアー』くろしお出版.
――― (2002)「日本語記述文法の新たな展開をめざして」『月刊言語』31:1, pp. 85-91, 大修館書店.

――――― (2003)『三上文法から寺村文法へ 日本語記述文法の世界』くろしお出版.
――――・田窪行則(1992)『基礎日本語文法 - 改訂版 - 』くろしお出版.
――――・仁田義雄・郡司隆男・金水敏(1997)『岩波講座言語の科学 5 文法』岩波書店.
松本裕治(2009)「特集『日本語コーパス』にあたって」『人工知能学会誌』24:5, p.615, 人工知能学会.
丸山岳彦(2012)「大規模コーパスの利用とメタデータの役割」『第 1 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』pp. 203-210, 国立国語研究所.
――――― (2013)「現代日本語の従属節に現れるモダリティ形式の分布」『第 4 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』pp. 299-308, 国立国語研究所.
――――・田野村忠温(2007)「コーパス日本語学の射程」『日本語科学』22, pp. 5-12, 国立国語研究所.
南不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館書店.
――――(1993)『現代日本語文法の輪郭』大修館書店.
宮内佐夜香(2009)「丁寧体文内における従属句の文体と接続助詞について―『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を資料として―」『日本語学会 2009 年度秋季大会予稿集』p. 191.
――――・小木曽智信・小椋秀樹・小磯花絵(2009)「BCCWJ における接続表現形式とジャンル別の文体的特徴の関連について」『特定領域研究「日本語コーパス」平成 21 年度全体会議予稿集』pp. 99-106, 国立国語研究所.
三宅知宏(2006)「『実証的判断』が表される諸形式―ヨウだ・ラシイをめぐって」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編『日本語文法の新地平 2 文論編』pp. 119-136, くろしお出版.
村中淑子(2012)「外来語由来の接尾辞『チック』と類義語との比較」『第 1 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』pp. 69-74, 国立国語研究所言語資源研究係・コーパス開発センター.

森田良行(1980)『基礎日本語 2-意味と使い方』角川書店.
————(1981)『日本語の発想』冬樹社.
————(1988)『日本語の類意表現』創拓社.
————(1995)『日本語の視点-ことばを創る日本人の発想』創拓社.
————(2006)『日本語の類義表現辞典』東京堂出版.
森山卓郎(1992)「日本語における『推量』をめぐって」『言語研究』101, pp. 64- 83, 日本言語学会.
————(2000)『ここからはじまる日本語文法』ひつじ書房.
————・安達太郎(1996)『日本語文法セルフマスターシリーズ 6 文の述べ方』くろしお出版.
山口昌也(2013)「多義複合動詞の語義構造の分析」『第 4 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』pp.355-360, 国立国語研究所言語資源研究係・コーパス開発センター.
山崎誠(2006)「代表性を有する現代日本語書き言葉コーパスの設計」『平成 17 年度独立行政法人国立国語研究所第 13 回国際シンポジウム予稿集・報告書「言語コーパスの構築と活用」』pp. 63-70, 国立国語研究所言語資源研究係・コーパス開発センター.
———— (2009)「代表性を有する現代日本語書籍コーパスの構築」『人工知能学会誌』24:5, pp. 623-631, 人工知能学会.
———— (2011a)「多義語における意味の分布」『特定領域研究「日本語コーパス」平成 22 年度公開ワークショップ(研究成果報告会)予稿集』pp.395-402, 国立国語研究所言語資源研究係・コーパス開発センター.
———— (2011b)「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の構築と活用」『「現代日本語書き言葉均衡コーパス」完成記念講演会予稿集』pp. 11-20, 国立国語研究所言語資源研究係・コーパス開発センター.
————・小椋秀樹・小沼悦・柏野和佳子・佐野大樹・高田智和・富士池優美・間淵洋子・丸山岳彦・山口昌也(2011)「研究活動・成果の総括：データ班代表性を有する現代日本語書籍コーパスの構築」『特定領域研究「日本語コーパス」平成 22 年度公開ワークショップ(研究成果報告会)

予稿集』pp.149-156, 国立国語研究所言語資源研究係・コーパス開発センター.

山田孝雄(1908)『日本文法論』宝文館.

山田みどり(1984)「6 助詞の諸問題」鈴木一彦・林巨樹編『研究資料日本文法第五巻助詞編(1)助詞』pp. 197-213. 明治書院.

谷部弘子(1999)「『のっけちゃうからね』から『申しておりますので』まで」現代日本語研究会編『女性のことば・職場編』pp. 139-154, ひつじ書房.

横森宙世・下村彰子(1989)『接続の表現-外国人のための日本語例文・問題シリーズ 6』荒竹出版.

吉井量人(1977)「近代東京語因果関係表現の通時的考察 - 『から』と『ので』を中心として」『国語学』110, pp. 19-36, 国語学会.

李惠正(2010)「コーパスを用いた接続助詞『から』と『ので』について」『東北大学言語科学論集』14, 東北大学文学研究科学会, pp.13-26.

――― (2011)「日本語コーパスを用いた接続助詞『から』/『ので』－前件を中心に」『韓国日本学連合会第 9 回国際学術大会要旨集』pp. 150-153.

――― (2012a)「接続助詞『から』/『ので』－日本語コーパスを用いて」『日語日文学』53, pp. 83-98, 韓国大韓日語日文学会.

――― (2012b)「文体の違いからみた接続助詞『から』と『ので』- 丁寧体と普通体を比較して」『日語日文学』55, pp. 119-132, 韓国大韓日語日文学会.

――― (2013a)「接続助詞『から』/『ので』の接続文体について–日本語コーパスを用いて」『日語日文学』57, pp. 49-61, 韓国大韓日語日文学会.

――― (2013b)「接続助詞『から』と『ので』に関する一考察—前件のモダリティとの共起を手掛かりにして—」『第 4 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』pp.35-44, 国立国語研究所言語資源研究係・コーパス開発センター.

渡辺実(1971)『国語構文論』塙書房.

韓国語

이학식・임지훈(2009)『SPSS 16.0 매뉴얼』法文社.

辞書

亀井孝・河野六郎・千野栄一編(1996)『言語学大辞典』第 6 巻術語編.三省堂.

北原保雄編(2001)『日本国語大辞典』第 2 版.小学館.

――――(2010)『明鏡国語辞典』第 2 版.大修館書店.

国語学会編(1980)『国語学大辞典』東京堂出版.

新村出編(2008)『広辞苑』第 6 版.岩波書店.

林巨樹編(2001)『現代国語例解辞典』第 3 版.小学館.

飛田良文[他]編(2007)『日本語学研究事典』明治書院.

松村明編(1988)『大辞林』第 1 版.三省堂.

山口秋穂・秋本守英編(2001)『日本文法大辞典』明治書院.

# 謝辞

本研究を遂行し学位論文をまとめるに当たり、多くのご支援とご助言を賜りました。

本論文の作成にあたり、テーマの決定、研究の考え方、方法、まとめ方などの研究全般において忍耐強くご指導いただきました指導教官の後藤斉教授に厚く御礼申し上げます。博士前期課程の入学から本論文の完成までの 6 年間、コーパス言語学の基本的な概念や考え方からそれを用いた分析方法までの細部にわたり、熱意のあるご指導、ご鞭撻をいただきました。また、研究に対する姿勢や考え続けることの大切さを教えてくださいました。今一度、後藤斉先生に心より感謝を申し上げます。

また、ゼミなどを通じて惜しみないご助言と日々の研究を辛抱強く見守ってくださいました千種眞一教授と小泉政利准教授にも心より感謝申し上げます。

そして、修士の時から本論文の完成に至るまでの間、私の拙稿を何度も読んでいただき、日本語の修正をはじめ、論文の書き方、構成まで多岐にわたり多大なご助言をくださった菊池清一郎氏に深く御礼を申し上げます。お忙しい合間を縫って私を励ましてくださったり、行き詰まったときには前向きに考えられるように激励のお言葉を何度もくださいました。心より感謝申し上げます。

東北大学言語学研究室の博士前期課程や後期課程の同期と先輩、後輩の皆様には、ゼミや日ごろの研究についての討論などで多くのご支援と暖かい励ましのお言葉をいただきました。本当に感謝しております。

博士論文を書き上げられたことに対して、これまでお世話になった全ての方々に改めて謝意を表します。

最後に、妻として、嫁として、娘として何も孝行することができなかった私の院生生活を支えてくれた夫、夫の実家の家族、私の両親、祖母、兄姉に感謝したいと思います。今まで支えてくれた家族の支援のお陰で私はここまで来ることができました。本当にありがとうございます。

李　惠正